

鹿児島大学FD報告書

6号 2009

鹿児島大学のFD活動

平成20年度FD委員会活動報告（総括）

全学FD委員会が平成20年度に取り組んだ活動については、各担当より詳細な報告がされているので、それらを御一読願いたい。平成20年度からは学部におけるFD活動も義務化された。平成19年度には大学院におけるFD活動が義務化された。学部におけるFD活動については、本委員会としては、それなりの活動の実績があるが、大学院のFD活動については、始まったばかりなので、‘大学院のFD活動’のあり方について取り組んだ。一年間を振り返ってみて、平成20年度の全学FD委員会活動は、FD講演会等、内容の豊かな充実したFD活動が出来たと思う。

1. 大学院FDのあり方についての検討

平成19年度から大学院のFD活動が義務化されたことに伴い、鹿児島大学FD委員会はそのあり方について検討をした。そのために、各大学の対応状況等について学ぶために、広島大学で開催された「平成20年度全国大学教育センター等協議会」や、大分大学で開催された「第37回九州地区国立大学教養教育実施組織代表者会議及び事務協議会」に出席をした。

(1) 平成20年度全国大学教育研究センター等協議会（平成20年8月21日、広島大学）

1) 協議テーマ：義務化したFD活動への各大学の対応と協議会加盟機関の役割

コメント 青野 透（金沢大学、大学教育開発・支援センター）

課題

平成20年度から学部におけるFD活動が義務化された。前年には大学院におけるFD活動が義務化された。各大学は、これらの状況にどのように対応しようとしているのであろうか。

また、本協議会加盟機関はどのような役割を担っているのであろうか。

①岩手大学：「センターが関わってきたFD活動」

②東京工業大学：「教育工学開発センターの役割」

③東京農工大学：「大学教育センターのFD活動」

(2) 第37回九州地区国立大学教養教育実施組織代表者会議及び事務協議会（平成20年11月14日、大分大学）

1) 各大学は、大学院のFD活動として、どのような取り組みを行っているか。（提案大学：鹿児島大学）

（提案理由）

大学院FD活動の義務化により、本学でもその検討を行っているが、大学院のFD活動の在り方及び取り組みについて、具体的に御教示願いたい。

(3) 大分大学高等教育開発センター及び大学院FD検討ワーキングによる「大学院関係FDのあり方（答申）案」（2007年3月13日）

2. 平成20年度FD経費について

平成20年度からは、学部のFD活動（平成19年度には大学院のFD活動の義務化）についても義務化されたが、FD活動経費の予算示達額は4,950千円であった。そこで、各学部、大学院から提出されたFD活動経費を慎重に検討をし、『FD経費の予算要求に係るFD活動についての基本方針』、及びその基本方針に基づく『予算配分におけるガイドライン』に基づき、4,950千円を各学部、大学院のFD活動経費として分配した。

大学院のFD活動、学部のFD活動が義務化されているのに、予算示達額が19年度と同額であることは、今後の問題点としてのこった。

3. 平成20年度鹿児島大学新任教員FD研修会について

新たに鹿児島大学の教員として赴任された先生のうち、初めて教壇に立つ方を対象に、より良い授業を行っていただくための新任教員FD研修会を平成20年10月22日に開催した。基調講演として、NHK鹿児島放送局放送部長の福原健一氏を招待し、「学生（聴衆）を引きつける技術・話術について、ヒントを与える」という演題でその講演を聴いた。基調講演後、メディアデポを利用して、

学生から評判の良い授業を参観し、FD委員会の教員等との懇談を通して、講演会やメディアデポでの授業参観で感じたものをより確かなものにした。

4. 平成20年度「教養セミナーデザイン」ワークショップ

平成20年11月8日にFDワークショップとして「教養セミナーデザイン」を開催した。

(1) 目的

- ①教養セミナーの授業設計を体験する。
- ②教養セミナーへの理解を深める。
- ③今後の教養セミナー改善の道を探る。

(2) 内容

教養セミナー1クラス分のシラバス・授業計画書を作る班作業を行い、その中で、教養セミナーのあり方や、現場で発生する諸問題に対する対応方法について議論する。

当日の参加者25名、スタッフ14名の合計39名であった。また、今後の参考のために、FDワークショップアンケートを実施した。この「教養セミナー」は毎年開催される。

5. 学生・教職員ワークショップ：『自学自習の方策について～自ら学ぶ意欲をどう引き出すか～』

平成21年2月16日、「学生」、「教職員」による合同ワークショップを開催した。上記テーマに関して、以下の項目について討議・発表を行い、鹿児島大学の「学生」、「教職員」が集まって、意見交換をした。

(1) 自学自習を取り入れた授業の進め方

- ①教養科目(分野1と2)②教養科目(分野3)
- ③情報科学科目 ④外国語科目(英語)
- ⑤基礎教育科目

(2) 自学自習を取り入れたシラバスの作成

- ①学習目標(学生の達成度)における自学自習のあり方
- ②授業概要(内容と方法)における自学自習のあり方
- ③授業計画における自学自習のあり方

(3) 自学自習を反映した成績評価

- ①自学自習が成績評価にどのように反映されているか等

参加者は、学生43名、教員19名、職員5名、タスクフォース4名の71名であった。

6. FD講演会

平成20年12月19日、国立大学法人お茶の水女子大学学長郷通子先生【中央教育審議会大学分科会制度・教育部会長:「学士課程の構築に向けて」(審議のまとめ)】を講師として迎え、『学士課程と大学院の教育をめぐって一質の向上のために』と題して、その講演会を開催した。

参加者は、学長を始め、理事、監事、各学部長等や、お茶の水女子大学の同窓生、県内の大学、鹿児島大学の学生及び教職員等、246名で、稲盛会館は満席で、座席のない参加者もいた程であった。詳しくは、その活動報告を参照願いたい。

7. 平成21年度新入生クラス担任等教員FD講習会実施

国立大学の法人化も5年を経過している中、クラス担任等教員の業務も複雑で多岐にわたってきている。新しい時代に対処するために、共通教育に成績評価異議申立制度やGPA制度の導入も既に実施され、平成20年度からは新しい英語教育も導入された。

しかし、最も重要なことは、新入生クラス担任等教員による行き届いた教務・厚生指導である。最初の段階で主に行われる共通教育について、新入生クラス担任等教員はその全容を熟知した上、新たな学生生活を始めるにあたって、精神的にも不安定な新入生をきめ細く指導していくことが求められている。このように学生の指導・支援体制を充実するために、新入生クラス担任等教員FD講習会を開催した。

日時：平成21年3月23日

プログラム：

「新入生の心理—保健管理センターの相談事例からみた学生の心理—」

保健管理センター所長 森岡 洋史

同センター准教授 伊地知 信二

「共通教育の履修制度・手続き等について」

共通教育企画実施部長 志賀 美英

外国語教育推進部長 富岡 龍明

他、共通教育係職員

8. 各学部等のFD活動取組状況について

各学部等から、FD活動取組の実施状況について報告を受け、FD活動のあり方について、参考にした。

9. 平成20年度計画実績報告書（FD関係）

- 【1】「教養科目」の三本柱の1つである「教養特別科目」の名称を「人間教育科目」に変更し、人間教育（人間力育成）に重点を置いた。
- 【2】全学FD委員会は、少人数教育による「教養セミナー」の担当教員育成と、「教養セミナー」の質的充実をはかるために、全学部より参加者を募って、ワークショップを開催した。
- 【6】全学FD委員会は、「学生の自学自習の方策」について、学生・教員によるワークショップを開催し、この問題に取り組んだ。
- 【27】入学時に新入学生に配布する『鹿児島大学共通教育広報』で「鹿児島大学憲章」を掲載したり、その他、教育センターが発行する「共通教育履修案内」や各種パンフレット等の巻頭言で「大学憲章」を述べている。
- 【46】分野横断的なカリキュラムとして、大学院の学生に開講している「命を学ぶ」の授業科目郡に、教育センターも継続して協力している。
- 【57】少人数教育の「教養セミナー」の担当教員の確保、及びその更なる充実のために、全学より参加を募って、ワークショップを開催した。また、併せて、シラバスの作成方法を研修した。
- 【133】「第37回九州地区国立大学教養教育実施組織代表者会議及び事務協議会」で、創造性を伸ばす教育方法等について、協議題として提出し、各大学の取り組みを学んだ。なお、「教養セミナー」のワークショップで、成果として発表されたシラバスの中には、創造性を伸ばす教育方法もあった。

10. 平成20年度FD委員会活動報告

- 1. 平成20年度FD委員会活動総括
- 2. FDシンポジウム・ワークショップ
 - 2.1 「教養セミナー」ワークショップ
- 3. 新任教員FD研修会
- 4. 教育（FD）講演会
- 5. 学生・教職員ワークショップ
- 6. 新入生クラス担任等FD講習会
- 7. 各学部等のFD活動報告
- 8. その他

11. 平成21年度への引継ぎ事項

- 1. 教育センターFD関連行事一覧
 - (1) 新任教員FD研修会
 - (2) FD講演会・シンポジウム
 - (3) 教養セミナーワークショップ
 - (4) 学生・教職員ワークショップ
 - (5) 新入生クラス担任等教員FD講習会
 - (6) FDニューズレターの発行
 - (7) 各学部等のFD活動
 - (8) 大学院FDの取り組み
 - (9) その他
- 2. 平成21年度FD経費の予算配分について
- 3. その他

（文責：平成20年度全学FD委員会委員長
谷口 溪山）

平成20年度全学FDワークショップ「教養セミナーデザイン」

日時：平成20年11月8日（土）13時～17時	シラバスと授業計画書の仕上げ
場所：共通教育棟1号館2階第1会議室、他	16：10～17：00 全体セッション3
目的：教養セミナーの授業設計を体験する 教養セミナーへの理解を深める 今後の教養セミナー改善の道を探る	各班の発表 総合討論 閉会の挨拶：（高等教育研究開発部会長）
内容：教養セミナーひとクラス分のシラバス・授業計画書を作る班作業を行う。 その中で、教養セミナーのあり方や、現場で発生する諸問題に対する対応方法についても議論する。	17：00 終了 各班のプロダクト・個人アンケートの提出、散会

プログラム

13：00～13：35 全体セッション1	開会の挨拶：（教育センター長） 挨拶：（教育・学生担当理事） 教養セミナーの経緯・本日の作業説明： （理・永吉）
13：40～14：40 班作業1	基本計画書の作成
14：40～15：25 全体セッション2	各班の発表
15：30～16：10 班作業2	

表1 平成20年度全学FDワークショップ参考資料

教養セミナーの目的（平成17年度制定）

1. 知的活動への動機を高める
2. 科学的思考方法・学習のデザイン能力を高める
3. 自己表現力を高める
4. 学生と教員の、学生相互のコミュニケーションを図る

教養セミナーの学習目標（平成17年度制定）

- 1 （課題発見能力）：
課題（テーマ）を発見し、その解決に向けて思索・行動することができる
- 2 （コミュニケーション能力）：
グループ内で協力して作業を進めることができる
- 3 （自己表現能力）：
ディスカッションに積極的に参加し、自分の考えを述べるができる
- 4 （課題探求能力）：
テーマに関連した情報やデータを検索・収集することができる
- 5 （情報処理能力）：
プレゼンテーションに必要な情報技術を適切に操作することができる
- 6 （プレゼンテーション能力）：
調査結果を分析し、効果的に説明・発表することができる

1. 背景と目的

「教養セミナー」は、少人数によるグループ活動によって「大学での主体的な学び方を学ぶ」ための授業として、平成17年度に新設された教養科目（導入教育科目）である。その目的・学習目標としては、表1に示した内容を掲げてきた。

初年度は周知不足もたたってわずか19名の受講者であったが、その後は図1に示すように受講者数も増え、平成20年度には14名の教員と219名の学生が参加する授業へと育ってきた。しかしさらに多くの学生を受け入れるために、授業担当教員の数を増やす必要に迫られている。そのためには、教養セミナーの真の姿を全学の教員に知ってもら

い、誰もが気楽にこの科目を担当できるような体制を整えることが急務である。

本科目の実施スタッフは、平成19年以降、教養セミナー担当の実習を目的とするワークショップを、全学FD委員会の行事として毎年定期的実施してきた。次年度の実施体制を早めに決める必要があるため、ワークショップも早い時期に開催することとし、本年は11月上旬に開催することができた。

また教養セミナーは、これまでの4年間の実施経験のもとに、授業の実施形態や運営方法を見直し、新た

履修登録学生数

新生約2000名

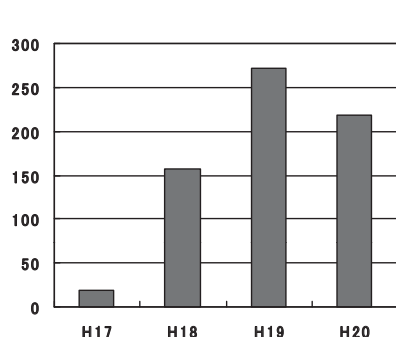
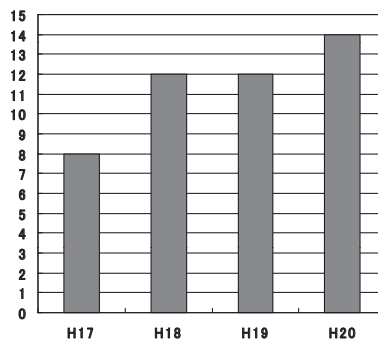


図1 教養セミナーの推移

担当教員数

専任教員数約850名



な発展段階への道を探す時期に来ている。今回のワークショップは、参加者の議論の中に、新たな教養セミナーの姿を見いだすことも、重要な目標のひとつと位置づけた。

2. ワークショップ概要

今回のワークショップは、20年度の教養セミナー担当者8名を含むスタッフ14名と、各学部からの一般参加者23名（25名参加予定のところ欠席2名）の参加を得て、冒頭に示したプログラムに従って開催された。当初は本年度前期にこの授業を受講した学生にも参加してもらう計画であったが、十分な連絡が取れなかったため断念した。

参加者はまず最初に、本学における教養セミナーの経緯と当日の作業内容についてのミニレクチャーを受けた。今回は資料を事前にメール配信することにより、この部分の時間を最小限にとどめ、後の班作業の時間を確保した。

ミニレクチャーのあと、一般参加者は5つの班に分かれて班作業に入った。各班には20年度の授業担当者が1名ずつ、アドバイザーとして貼りついた。一般のワークショップの場合に配置される「タスクフォース」とは異なり、単なるタイムキーパーとしてでなく、授業経験者としての経験を活かし、班の議論に深く関与していただいた。このグループ作業自体が、教養セミナーの授業において学生にしてもらう作業の一形態であり、教養セミナーの実習を兼ねているわけである。

班作業の内容はそのあとの全体セッションで発表し、各班の発表ごとに参加者全員による意見交

換を行った。前年のワークショップではこの「討議＋発表」を1セットしか行わなかったため、全体発表での質疑応答の結果を最終成果物に反映させることができなかったが、本年はこれを2セット行うことを絶対条件として、全体のプログラムを組んだ。

4時間をかけた全セッション終了後、参加者はアンケート記入・提出のうえ散会した。

3. 作業内容

班作業がスムーズに進むよう、表2のようなワークシートを用意し、各班に配布するパソコンにあらかじめ組み込んでおいた。このワークシートには、教養セミナー1クラス分の授業計画を作るために必要な議論事項を順に組み込んであり、その順序に従って議論をしながら空欄を埋めていくと、シラバスという形の班のプロダクトができあがるようになっている。

今回は特に、教養セミナーの教育目標・学習目標についての議論をしたうえで、授業計画の作成に入っていた。

全体セッションでは、このワークシートをスクリーンに投影する形で班発表と全体討論を行っていただいた。発表時間は短かったが、どの班も要領よく発表を行い、そのあとの質疑応答・意見交換は活発に行われた。

前述のように今回は、班作業＋発表のサイクルを2セット行った。1回目の班作業では、基本的な授業計画を立て、シラバスの概要を埋めるあたりまでを目標とした。全体発表でなされた質疑応答・意見交換の結果は、2回目の班作業で班のプロダクトに反映させていただいた。また班作業2の中では、これまでの教養セミナーの授業で実際に発生した事例を各班にひとつずつ配布し、それに対する対応方法を考えていただいた。

全学的取組み

表2 平成20年度FDワークショップ班作業 作業用紙

第 班			
役割	氏名	役割	氏名
リーダー		発表係	
資料作成		記録係	
		アドバイザー	

まず、シラバス中に書かれている既存の「教養セミナーの目的、目標」を確認してください。修正してもかまいません。引き続き、各班（クラス）の基本方針を討議し、その内容をここに書いてください。教養セミナー全体の目標のもとで、特にこのクラスでは学生にこうなってほしい、こんな力を身につけさせたい...といったことを討議してください。欄はいくら伸ばしてもかまいません。

--

★班討議のメモ

基本方針に従って具体的な実施方法を討議し、その内容を書きこんでください。欄はいくら伸ばしてもかまいません。

グループ編成の方法	
テーマの選択方法	
教室	端末室 普通の教室 その他
グループ活動促進の方策	
授業時間にやることと時間外にやることの明確化	
成績評価方法	
日常活動の評価方法	
その他 (Moodle を利用方法等)	

★シラバス

上記に従って、学生が見る実際のシラバスの中核部分を下記に作成してください。欄は必要に応じて多少は伸ばしてもかまいませんが、実際のシラバスにしたとき1頁に収まるためには、この部分全体で40行程度以内であることが必要です（最初の状態では34行です）。

学習目標 (学生の達成目標)	1 (課題発見能力)：課題（テーマ）を発見し、その解決に向けて思索・行動することができる 2 (コミュニケーション能力)：グループ内で協力して作業を進めることができる 3 (自己表現能力)：ディスカッションに積極的に参加し、自分の考えを述べるすることができる 4 (課題探求能力)：テーマに関連した情報やデータを検索・収集することができる 5 (情報処理能力)：プレゼンテーションに必要な情報技術を適切に操作することができる 6 (プレゼンテーション能力)：調査結果を分析し、効果的に説明・発表することができる	
授業概要 (目的・内容・方法)	教養セミナーは新1年生を対象とし、「知的活動への動機を高める」、「科学的思考方法」、「学習のデザイン能力を高める」、「自己表現力を高める」、「学生と教員の、学生相互のコミュニケーションを図る」という目的で開講する授業科目です。 このクラスでは、...	
成績評価 基準および方法		
授業計画	第1回：イントロダクション 第2回： 第3回： 第4回： 第5回： 第6回： 第7回： 第8回：中間発表会	第9回： 第10回： 第11回： 第12回： 第13回：最終発表会1 第14回：最終発表会2 第15回：レポート作成（個人） 時間外：
その他		

★こんなことが起こったらどうしましょう？

20年度の授業で実際に起こった例を、各班に配布します。それ以外にも、起こりそうなことを取り上げてください。

事例	
対応	

4. 各班の成果物

今回は2回の作業時間をとったために、前回のワークショップと比べて成果物の内容は大幅に充実させることができたようである。その最終プロダクトを、重要部分だけ抜き出して表3に掲載した。各班1ページに収まるよう、多少の加工を加えたことをお許しいただきたい。

今回の成果物の中で、これまでの教養セミナーでも実際に行われていない新しい試みが提案されている点は、大いに注目すべきである。具体的には、最終発表をディベート形式で行う、具体的な商品の開発計画を立てさせる、鹿児島大学で行われている授業の中から特定のテーマに関係するものを調べて独自のカリキュラムを作成させる、というような授業計画が目をつけた。これらはそのまま、次年度の授業で実行に移せるものであると言えよう。

5. アンケート

参加者には簡単なアンケートを書いてもらい、今回のワークショップによって教養セミナーとはどのようなものであるのかが理解できたか、教養セミナーの趣旨に賛同できるか、今回のワークショップが有意義であったか、などに答えていただいた。そのアンケート結果をまとめたものが表4である。大半の参加者から、肯定的な回答が得られた。

自由記述欄に書かれた意見は多くなかったが、表4に示すような貴重な意見が寄せられた。ワークショップの価値を認めながらも、そのために貴重な時間を割かなければならないことへの抵抗感、否めないようである。次年度のワークショップ開催の際には、これらの意見は大いに参考にさせていただきたい。

なおワークショップ自体へのアンケートとは別に、「教育センター長からのお願い」という形で、21年度の教養セミナー担当への意向を調査した。多くの教員は「関心はあるが他の授業を多く担当していてこれ以上は難しい」という回答であったが、今回の参加者の中から新たに教養セミナーに参加する教員を得ることができた。

6. おわりに

今回のワークショップは準備不足の上、大学祭



準備期間と重なったため、学生の参加者を集めることができなかった。来年度は授業期間中からこのワークショップへの参加者を集めるなどの工夫をしたい。

今回のワークショップ後の授業担当者の会議において、21年度からの教養セミナーは授業名を「セミナー・学問のスプー大学ではこう学ぼう」と変更し、教育目標と学習目標にも若干の手直しを加えて実施することとなった。また21年度は、本ワークショップの一般参加者を含む新たな担当者5名を迎えることになった。都合で担当をはずれる教員もいるため、クラス数は20年度と同じ7クラスであるが、本ワークショップの成果を反映させたよい授業が実施できることを期待している。

(文責：平成20年度教養セミナー代表世話人・FD
委員会委員 永吉秀夫)

全学的取組み

表3 各班の成果物

第 1 班	
<p>【教養セミナーの目的について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学的思考ではなく、論理的思考の方が文系、理系横断的な表現になるのではないか <p>【教育セミナーの学習目標について】</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. 課題探求能力：検索・収集に加えて、分析を入れないと、課題探求にならないのではないか。 5. 情報処理能力：調査結果を分析し、重要な情報を抽出することができる。 6. プレゼンテーション能力：プレゼンテーションに必要な情報技術を獲得し、効果的に説明・発表することができる。 	

★班討議のメモ

グループ編成	・コミュニケーション能力を高めさせるために、機械的に決定する。
テーマの選択方法	<ul style="list-style-type: none"> ・15コマを掛けてやるのに適切な内容にするにはどうすればよいか。 ・テーマの決定に際して、時間をかけてやるのにふさわしいテーマをどうやって決定させるか。 ・知的活動への動機を高める、という目的をどうやって達成するかどうか。 ・ミニレクチャーをして、テーマ決定方法のヒントを与える方が良いのではないか。 ・テーマの設定に結構時間をかけるとよいのではないか。 ・ミニレクチャーでは、時間をかけるに値するか、皆が知りたいテーマであるかなどに留意して、指導をする。
グループ活動促進の方策	<ul style="list-style-type: none"> ・Moodleを活用し、情報交換を促す。 ・高いレベルでの取り組みが求められているということを、はじめにしっかりと伝える。
授業時間にやること・時間外にやること	<p><授業時間にやること></p> <ul style="list-style-type: none"> ・顔を合わせている場において、相互に情報・意見を交換し、コミュニケーション能力を高めさせる。 ・次回までの課題・分担を明確化し、確実に実施することを求める。 <p><授業時間外にやること></p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回でた課題を各自が確実に実施する。
成績評価方法	<p><評価対象>・最終発表会、レポート</p> <p><評価内容>・課題設定が適切か?、プレゼンテーションの内容が適切か?、プレゼンテーションの構成が適切か?、適切な主張が盛り込まれているか?</p>
日常活動評価	・自己診断を目的として、自己評価をさせる(点数)
その他	・Moodleを使用してレポートを公開する。

★シラバス

学習目標 (学生の達成目標)	<ol style="list-style-type: none"> 1 (課題発見能力) : 課題(テーマ)を発見し、その解決に向けて思索・行動することができる 2 (コミュニケーション能力) : グループ内で協力して作業を進めることができる 3 (自己表現能力) : ディスカッションに積極的に参加し、自分の考えを述べるができる 4 (課題探求能力) : テーマに関連した情報やデータを検索・収集・分析することができる 5 (情報処理能力) : 調査結果を分析し、重要な情報を抽出することができる 6 (プレゼンテーション能力) : プレゼンテーションに必要な情報技術を獲得し、効果的に説明・発表することができる 	
授業概要 (目的・内容・方法)	<p>教養セミナーは新1年生を対象とし、「知的活動への動機を高める」、「科学的思考方法」、「学習のデザイン能力を高める」、「自己表現力を高める」、「学生と教員の、学生相互のコミュニケーションを図る」という目的で開講する授業科目です。</p> <p>このクラスでは、多種多様な情報の中から知的好奇心を満たすテーマを発見し、クラスメートと共同してそのテーマを探究する活動を通して、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を高めるとともに、知的活動を行うことの意義を感じてもらおうことを目指しています。</p>	
成績評価 基準および方法	<p>・最終発表会：60% ・レポート：40%</p> <p>ただし、単位取得の必須条件として、4/5以上の出席を必須とする。</p>	
授業計画	<p>第1回：イントロダクション(班編成)</p> <p>第2回：テーマ決定方法に関するミニレクチャーとテーマ検討</p> <p>第3回：テーマに対するグループ討議・決定</p> <p>第4回：テーマに対する課題の抽出・割当</p> <p>第5回：グループ内での調査結果検討1</p> <p>第6回：グループ内での調査結果検討2</p> <p>第7回：グループ内での調査結果まとめ</p> <p>第8回：中間発表会</p>	<p>第9回：指導に対する対策に関する検討</p> <p>第10回：グループ内での調査結果検討3</p> <p>第11回：グループ内での調査結果検討4</p> <p>第12回：グループ内での調査結果まとめ</p> <p>第13回：最終発表会1</p> <p>第14回：最終発表会2</p> <p>第15回：レポート作成(個人)</p> <p>時間外：</p>

★こんなことが起こったら？

事例	具体的な調査テーマが決まって資料収集が進みだした第5回あたりで、活動報告の提出を求めたら、過半のものがネット上の情報をコピペしただけのものであった。
対応	<ul style="list-style-type: none"> ・中間発表会までは、課題に対する世界のスタンダードを調べさせる。まる写しはだめであることを明確に伝え、出典を明らかにするとともに、情報を編集整理し発表させる。 ・中間発表以後は、抽出した問題に対する自らの意見をまとめさせ、課題解決に向けた方策について検討させる。

第 2 班

課題発見能力、コミュニケーション能力、自己探求能力、プレゼンテーション能力を伸ばすことを目的とする。

★班討議のメモ

グループ編成	各自の興味・趣味に基づきテーマを決定し、学生自身に決めてもらう。1グループ5-6名。5グループ作成
テーマの選択方法	世界と日本について考える。そのなかで各自の興味・趣味から共通の課題を見つける
グループ活動促進の方策	アイスブレイキングを取り入れる
授業時間にやること・時間外にやること	授業時間には、一週間の研究活動に対し、問題点・改善点をまとめる。
成績評価方法	教師による評価及び学生による各班ごとの投票で授業点とする。 また、レポート点も加算する。
日常活動の評価方法	各回の授業で報告をもとに評価する
その他	「教養セミナー」の名前を変える→大学内の歩き方？ 教養セミナーとは、何を求めるか、横のつながり

★シラバス

学習目標 (学生の達成目標)	1 (課題発見能力) : 課題(テーマ)を発見し、その解決に向けて思索・行動することができる 2 (コミュニケーション能力) : グループ内で協力して作業を進めることができる 3 (自己表現能力) : ディスカッションに積極的に参加し、自分の考えを述べるができる 4 (課題探求能力) : テーマに関連した情報やデータを検索・収集することができる 5 (情報処理能力) : プレゼンテーションに必要な情報技術を適切に操作することができる 6 (プレゼンテーション能力) : 調査結果を分析し、効果的に説明・発表することができる 7 (観察力) : 現象・状態の観察力・洞察力を身につけることができる 8 (積極力) : 積極的に参加し、とりくむ姿勢を身につけることができる	
授業概要 (目的・内容・方法)	教養セミナーは新1年生を対象とし、「知的活動への動機を高める」、「科学的思考方法」、「学習のデザイン能力を高める」、「自己表現力を高める」、「学生と教員の、学生相互のコミュニケーションを図る」という目的で開講する授業科目です。 このクラスでは、各自の趣味・興味から始まり、最終的にはグローバルな視野を身につける。特に観察能力、課題発見能力、コミュニケーション能力、自己探求能力、プレゼンテーション能力を伸ばすことを目的とする。これらを通して積極性を身に付けることを最終目的とする。 各自の趣味・興味を課題にできる。 作成5グループ(1グループ5-6名程度)にわけ、教室内にとどまらず、場合によっては教室外でも調査・研究を行う。	
成績評価方法	授業内に教官による評価及び学生による各班ごとの投票で授業点とする。レポート点も加算する。	
授業計画	第1回: イントロダクション(総説) 第2回: グループ分け・アイスブレイキング 第3回: 示説(研究方針設計・プレゼンテーション方法) 第4回: 図書館・検索方法説明 第5回: 研究作業1 第6回: 研究作業2 第7回: 研究作業3 第8回: 中間発表会1	第9回: 中間発表会2 第10回: 研究1 第11回: 研究2 第12回: 研究3 第13回: 最終発表会1 第14回: 最終発表会2 第15回: レポート作成(個人) 時間外: 与えられた課題を各自調査

★こんなことが起こったら？

事例	発表当日、発表担当学生が無断欠席
対応	事態予防の徹底。万が一欠席しても、他の者が発表できるように研究・発表内容をグループ内で共有

事例	次第にこなくなる学生。発言しない学生
対応	グループ内で親密に連絡をとるように促す。コミュニケーション

「教養セミナー」の改善点・拡充に向けての提案
<ul style="list-style-type: none"> ・担当教員の固定化を防ぐためにローテーション(一部の教員に負担が集中しないようにする) ・学生・共通教育担当教官のメリットとは →学部外の友人ができる 教官の教育貢献への評価 ・授業学生の少人数化 →教員の拡充 ・E-learningの功罪 →携帯でのレポート提出、コミュニケーション能力の低下をもたらすのではないか ・「教養セミナー」のタイトルに問題があるのではないか 「教養」とは？

全学的取組み

第 3 班

<学習目標>
ディベートを通して、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の向上を図る

★班討議のメモ

グループ編成の方法	5名1組で6班編成。 学部が偏らないようにランダムに決定。
テーマの選択方法	教員が相反する答えが想定されるテーマをいくつか用意する。 時事に即したテーマを5つ程度。
グループ活動促進の方策	班構成後、アイスブレイキングなどを用いた自己紹介を行わせ、学生間のコミュニケーション向上を図る
授業時間にやること・時間外にやること	・授業時間内：グループ討議（資料選別、スライド作成） ・授業時間外：資料収集、情報収集
成績評価方法	・学生同士の相互評価（発表内容を学生に評価させる。評価理由を明記させる） ・教員の評価 学生、教員それぞれに持ち点を設定し、評価を行う
日常活動の評価方法	・電子掲示板を使用、書き込み数で評価する
その他	・日常活動の評価方法に用いる電子掲示板を、Moodleにて作成する

★シラバス

学習目標 (学生の達成目標)	1（課題発見能力）：課題（テーマ）を発見し、その解決に向けて思索・行動することができる 2（コミュニケーション能力）：グループ内で協力して作業を進めることができる 3（自己表現能力）：ディスカッションに積極的に参加し、自分の考えを述べることができる 4（課題探求能力）：テーマに関連した情報やデータを検索・収集することができる 5（情報処理能力）：プレゼンテーションに必要な情報技術を適切に操作することができる 6（プレゼンテーション能力）：調査結果を分析し、効果的に説明・発表することができる	
授業概要 (目的・内容・方法)	教養セミナーは新1年生を対象とし、「知的活動への動機を高める」、「科学的思考方法」、「学習のデザイン能力を高める」、「自己表現力を高める」、「学生と教員の、学生相互のコミュニケーションを図る」という目的で開講する授業科目です。 このクラスでは、与えられたテーマに対して発表を行い、分析能力、コミュニケーション能力、発表能力の養成を目的とします。最後に、ディベートを聞いた後の評価能力についての育成も目指します。	
成績評価基準 および方法	・発表内容に対する学生間の相互評価 ・個人レポートの教員による評価	・発表内容に対する教員による評価 ・掲示板記入件数による日常活動の評価
授業計画	第1回：授業目的の説明・自己紹介・班編成 第2回：テーマの選定・ミニレクチャー（ディベートについて、方法等） 第3回：資料収集1 第4回：資料収集2 第5回：資料の分析・整理 第6回：発表原稿の作成1 第7回：発表原稿の作成2 第8回：中間発表会（各班15分程度）	第9回：発表資料の手直し1 第10回：発表資料の手直し2 第11回：最終発表の準備・練習 第12回：最終発表会1 第13回：最終発表会2 第14回：最終発表会3 第15回：レポート作成（個人） 時間外：資料収集

★こんなことが起こったら？

事例	講義途中から授業放棄する学生が生じた
対応	・班内での話し合いなど、基本的には学生主体で対処をさせる ・予防的措置として、 班内連絡網の作成 アイスブレイキングや構成的グループエンカウンターなどを手厚く行う できるだけ役割を分担させる Moodleを利用するなどグループ内での情報共有を行わせる
事例	ディベートの勝敗がトラウマになった
対応	・ディベートの相手チームとの構成的グループエンカウンターを行い、相手チームとの人間関係の構築を図る ・ディベートの意味合いをレクチャーしておく

第 4 班

★班討議のメモ

グループ編成の方法	テーマ「地球環境について」(教員から提示) 4-5人のグループ編成(学部・学科はランダム編成) サブテーマを学生側から提示(食料・燃料等) テーマに沿って再編成、人数等は自由 サブテーマに関する講義等が鹿児島大学で行われているか
テーマの選択方法	大学のシラバス・カリキュラムの中から
グループ活動促進の方策	教員がコーディネーターとなって、調査活動をそくしんする。 グループ間での意見交換を活発にする。
授業時間にやること・時間外にやること	授業時間にやること：テーマ内容の具体化・意見のすり合わせ 時間外にやること：テーマに沿ったシラバス・カリキュラムの調査活動
成績評価方法	日常の調査活動・内容 発表内容の採点方式 自己評価方式
日常活動の評価方法	
その他	Moodle にリサーチ内容を順次アップロードして、情報を共有し、解決手段とする。

★シラバス

学習目標 (学生の達成目標)	1 (課題発見能力) : 課題(テーマ)を発見し、その解決に向けて思索・行動することができる 全体の三分の一 2 (コミュニケーション能力) : グループ内で協力して作業を進めることができる 3 (自己表現能力) : ディスカッションに積極的に参加し、自分の考えを述べるすることができる 4 (課題探求能力) : テーマに関連した情報やデータを検索・収集することができる 全体の三分の一 5 (情報処理能力) : プレゼンテーションに必要な情報技術を適切に操作することができる 6 (プレゼンテーション能力) : 調査結果を分析し、効果的に説明・発表することができる	
授業概要 (目的・内容・方法)	教養セミナーは新1年生を対象とし、「知的活動への動機を高める」、「科学的思考方法」、「学習のデザイン能力を高める」、「自己表現力を高める」、「学生と教員の、学生相互のコミュニケーションを図る」という目的で開講する授業科目です。 このクラスでは、教員より与えられたテーマに関して、学生はサブテーマを決定する。次に鹿児島大学でテーマに沿ったカリキュラム(講義・実習等)が実施されているかを調査・発表し、最終的に独自のカリキュラムを作成するのが目的で、今後の専門教育に活用する。	
成績評価方法	日常の調査活動・内容 発表内容の採点方式 自己評価方式	
授業計画	第1回：イントロダクション (大テーマ提示) 第2回：サブテーマの発見①(KJ法) 第3回：サブテーマの発見② 第4回：サブテーマの発見③ (グループ再編成) 第5回：サブテーマの探求①(シラバスの内容の確認) 第6回：サブテーマ内容に関する討論会(グループ間) 第7回：発表会に向けてのまとめ(グループ内) 第8回：中間発表会	第9回：問題解決のための鹿児島大学独自カリキュラム編成① 第10回：問題解決のための鹿児島大学独自カリキュラム編成② 第11回：問題解決のための鹿児島大学独自カリキュラム編成③ 第12回：まとめ 第13回：最終発表会1 第14回：最終発表会2 第15回：レポート作成(個人) 時間外：

★こんなことが起こったら？

事例	グループ人数が少ない場合
対応	各個人にテーマを与える。

全学的取組み

第 5 班
1. 知的活動への動機を高める、2. 科学的思考方法・学習のデザイン能力を高める、3. 自己表現力を高める、4. 学生と教員の、学生相互のコミュニケーションを図る 上記の目的に加え、教養セミナーにもとづいて、自己評価し、自分の欠点を考慮し高める。また、倫理観あるいは社会観を理解する。

★班討議のメモ

グループ編成の方法	6人を1グループとしてグループ編成を行う。 (男女比、または学部混合でグループ作成する。)
テーマの選択方法	鹿児島県のヒット商品について各グループで考えさせる。
グループ活動促進のための方策	最終発表（プレゼンテーション）を行うことに関して、第1回目でグループ行動が重要であることと最終目標を明示する。
授業時間にやること・時間外にやること	それぞれ個人にテーマにもとづいて分担し、時間内では、分担担当ごとのディスカッションを行い、意見等をまとめる。また、時間外では、分担部分を情報収集し、自分の意見を考える。
成績評価方法	グループ内のディスカッション、プレゼンテーション、レポート、出席などで評価する。
日常活動の評価方法	
その他	

★シラバス

学習目標 (学生の達成目標)	1 (課題発見能力) : 課題(テーマ)を発見し、その解決に向けて思索・行動することができる 2 (コミュニケーション能力) : グループ内で協力して作業を進めることができる 3 (自己表現能力) : ディスカッションに積極的に参加し、自分の考えを述べるすることができる 4 (課題探求能力) : テーマに関連した情報やデータを検索・収集することができる 5 (情報処理能力) : プレゼンテーションに必要な情報技術を適切に操作することができる 6 (プレゼンテーション能力) : 調査結果を分析し、効果的に説明・発表することができる	
授業概要 (目的・内容・方法)	教養セミナーは新1年生を対象とし、「知的活動への動機を高める」、「科学的思考方法」、「学習のデザイン能力を高める」、「自己表現力を高める」、「学生と教員の、学生相互のコミュニケーションを図る」という目的で開講する授業科目です。 このクラスでは、テーマとして、あるヒット商品を学生さんたちに考えさせ、最終目標に掲げ、グループ活動を通じて情報収集統合することで、商品をつくるための課題をみつける。さらにプレゼンテーションを行い、コミュニケーションを高める。 最終発表で、企業向けのプレゼンテーション(図表、サンプルなど。)、他のグループからの意見交換などを行う。	
成績評価方法	グループ活動の評価、プレゼンテーションまたはレポート評価。	
授業計画	第1回：イントロダクション 第2回：ディスカッション 第3回：グループ分け 第4回：中間発表会 第5回：情報収集およびディスカッション 第6回：情報収集およびディスカッション 第7回：情報収集およびディスカッション 第8回：情報収集およびディスカッション	第9回：中間発表会 第10回：情報収集およびディスカッション 第11回：情報収集およびディスカッション 第12回：情報収集およびディスカッション 第13回：最終発表会1 第14回：最終発表会2 第15回：レポート作成(個人)、講評 (優秀グループ表彰)
その他	中間発表1回目：各グループのテーマ発表、2回目：(他のグループの学生さんからの意見)	

★こんなことが起こったら？

事例	
対応	

表4 H20年度FDワークショップアンケート集計
(参加者23名中 22名回収)

●教養セミナーとはどういうものであるか理解できましたか？

1. よくわかった (11名)
2. まあわかった (11名)
3. よくわからない点がある

●教養セミナーの趣旨(目的・目標)には賛同できますか？

1. 大いに賛同できる (13名)
2. まあ賛同できる (9名)
3. 賛同できない点がある

●今回のワークショップはあなたにとって、

1. とても有意義であった (13名)
2. まあ有意義であった (9名)
3. あまり有意義でなかった

●事前配布資料について

1. とても役に立った (5名)
2. 少し役に立った(ないよりはマシ) (13名)
3. なくてもよかった (2名)
4. その他 (読まなかった1名、受け取らなかった1名)

●教養セミナーのあり方、今回のワークショップの運営について、その他ご意見があればお書きください

- ・他学部の先生方と意見交換する場を持って、よかった。やはり、多分野から人が集まると意見も多面的に論議できることを実感した。ただ、殺人的スケジュールの中で、半日、時間を作るのは正直負担感がある。振替休日は、実際取れないし、そもそも土曜も仕事が入っているのが現状。
- ・大変よく準備されていたと思います。ありがとうございました。参加した先生方が大変積極的に議論されていたことで、刺激になりました。
- ・やはり、セミナーのタイトルは、公募するなどして改称するのが、より発展に結びつくと思います。それと、アドバイザーの先生方がとてもあたたかかったのが印象に残りました。
- ・一つのテーマについても多様な意見が出ることに對し、驚きを感じた。大変有意義な会であったと思う。
- ・もっと宣伝してもよい内容だったと思います。講義名は、もっと良いものに。
- ・本セミナーは、教育センターが中心になって行うものではなかったでしょうか。とすれば、教育センター専任教員の積極的な参加もお願いしたい。

平成20年度 新任教員FD研修会

平成20年度の新任教員FD研修会が、11月18日(火)、稲盛アカデミー1階の各教室を使って開催された。参加者は、25名が参加し、概要の説明、谷口教育センター長と中山教育・学生担当理事の挨拶のあと、午前のプログラムでは、福原健一NHK鹿児島放送局放送部長による「どうすれば相手に伝わるのか」と題する講演、午後のプログラムでは、平成19年度後期に教養科目として開講された平川忠敏教授担当の「自分さがしの心理学」をMedia Depoを用いた授業参観を行い、これらを基盤に、少人数のグループでの意見交換とその成果発表という構成で実施された。

○福原健一NHK鹿児島放送局放送部長の講演「どうすれば相手に伝わるのか」

福原氏の講演では、授業を担当するにあたって最も重要な能力といえる、人に伝わる話し方について、聞き手による内容の判断、腹式呼吸や母音の効果の利用など発声方法を含む話し方の身体的技術、話し言葉を基調にする修辞技法のあり方や陥りやすい失敗を、これまでの取材や講演の経験を踏まえて、わかりやすく説明された。

特に大学の新任教員であることを踏まえ、講義の場面での視線の動かし方(全体に8の字に動かすとよいとのこと)や、聴衆が集中力を維持できる時間が短くなっているという歴史的変遷をはじめ、ゼミなどにおける就職指導を踏まえながら短時間でインパクトを与えて適切に伝えたいことを伝える技法について、幅広く大学という場면을意識した、講演をしていただいた。

参加者からは、3つの質問がなされた。

「話しをするときの原稿はどのようなものか」という点については、福原氏は「簡単なメモかレジメ程度のもを用意しており、その中で伝えるべき点を絞って話すようにしている。シミュレーションをするとよいのではないか」と回答された。

また、「最初のつかみでインパクトを与えても、その受け止め方の多様性に対してどのように対応するか」という点については、「テレビでは、逆に、映像の印象の強さから、本来多様な

面を持ちうるものを一面的にしてしまうことがある。大河ドラマの篤姫に出てくる幾島のイメージが、原作を読んだときには、読み手によって様々だが、いまは、松坂慶子さんになってしまっている。」とされて、難しい問題であると指摘された。また、これに付随して、聴衆や視聴者の集中力が短くなっている状況に対しては、「つかみになるようなネタを、時折はさむ」といった技術の重要性を指摘された。

最後に、テレビ会議システムなどを用いた講義において、どの程度のカメラ目線を向けるべきかとの点の質問がなされた。福原氏は、「現在は、プロンプタという機械があり、モニタそのものにカメラがついていて、原稿が映る画面の真ん中にカメラが仕込まれていて、自然にカメラ目線になるようになっている。それがいないときは、句点の前あたりから、必ずカメラを見るようにすると、説得力が増す。」と回答された。

福原氏は、本学の法文学部や農学部等での授業の一部を担当された経験もあり、現在の学生気質を踏まえつつ、持ち前のエネルギーで熱のこもった講演をしていただいた。

○研修会アンケートから

後半は、本学教育センターが有するe-learningシステムであるMediaDepoにアップされている、平川忠敏教授担当の「自分さがしの心理学」の1コマを全員で視聴し、全体を通して数名ずつに分かれてのグループ討論を行い、その成果発表を行った。

これらを踏まえ、研修後に実施されたアンケートでは、平川教授の授業構成の巧みさや、授業ないでグループワークを用いて学生に考えさせ、発表させるという方法の有効性の指摘をはじめ、当研修会の中でのグループ討論で、他の学部の教員と意見交換ができる点や他の教員の経験を共有できるという指摘、また、共通の悩みや問題を持っていることがわかり、授業に対する負担感が軽減されたなどの回答があった。

また、議論の主題として、口頭での伝達技法に偏りがあったので、身振り手振りなどを踏まえた

授業実践の在り方などにも注目したらどうかという提案や、回数を増やすべきであるという意見も見られた。

この取り組みは、毎年恒例のものとして定着しつつあり、新人教員が授業改善について考える契機を提供する点で、確実な成果を上げてきている。今後は、通常のFD活動の中で、この取り組みの長所や成果を、全学／各部局のFDの中でどのように生かすのかを考える段階に来ているように思われる。

(文責：平成20年度FD委員会委員 米田 憲市)



平成20年度教育（FD）講演会

平成20年度の、鹿児島大学FD委員会主催のFD講演会は、お茶の水女子大学長郷通子先生を講師としてお招きし、開催した。

全学FD委員会は、昨年度（19年度）より、義務化された大学院のFD活動にも取り組んでみたものの、一体、大学院のFD活動は、何をやるものか、学部のFD活動は、これまでそれなりの実績を積んでいるものの、大学院のFD活動については、全くその方策が思い浮かばず、思案をしていたところ、国大協大学マネージメントセミナー（平成19年11月15日）で、国立大学法人お茶の水女子大学長郷通子先生が「大学院教育の質の向上」と題して、御講演された資料が手に入ったのをきっかけに、私達全学FD委員会として、この際、郷学長に、大学院のFD活動について、御指南を受けた方が良いのではないかとということで意見が一致して、お願いすることになった。御講演に講師としてお越しいただくまでの経過・経緯については、FD講演会（稲盛会館）で、教育センター長としての挨拶の中で多少述べてみましたが、実に、年度をまたがっての粘り強い交渉であった。

郷学長は著名な研究者として、国内外に広く知られた学者（専門は、生物物理学、生命情報学、進化学等）で、学会活動では重鎮であります。そして、政府の議員、審議会委員等も歴任されておられますが、なによりも郷学長は、平成20年3月に、中央教育審議会大学分科会制度・教育部会が「学士課程の構築に向けて」（審議のまとめ）を発表されたが、郷学長は、その部会長を努められておられました。これは、鹿児島大学全学FD委員会主催の講演会としては、願っても叶えられない、日本のトップの先生をご講演にお招きしたいと思い、鹿児島大学の学長をはじめ、大学全体が、ことのほか、感激したものでした。

なお、鹿児島大学がお茶の水女子大学郷学長をお招きし、FD講演会を開催したことは、文教速報（平成21年1月14日、第7256号）でも、次のように報じられた。

『鹿児島大学は、平成20年度教育（FD）講演会をこのほど開催、郷通子お茶の水女子大学長が「学士課程と大学院の教育をめぐって～質の向上

のために～」と題して講演を行った。

郷学長は、大学院教育や教員・学生数等に関する国際的な比較データや国の大学院教育時改革の骨子等に関する説明とともに、お茶大における国際規格のFD戦略事業等の取組事例を紹介。また、大学院教育の実質化に向けて「FD活動の重要性を全学的に認識し、主体的に取り組むことが不可欠」と指摘した。

講演後の質疑応答では、複数教員指導体制の実態やオーバーポストの社会的受皿などについて活発に意見が交わされ、出席した教職員約230名は、中央教育審議会委員としても活躍している郷学長の話に熱心に耳を傾けていた。

また、講演会に先立ち、同大の教育センターの取り組みや今年度の英語教育改革実践の経過について報告があった。』

当日のプログラム、講演の内容は以下の通りである。

～ 平成20年度教育（FD）講演会 ～

日時：平成20年12月19日（金）14時～16時50分

場所：鹿児島大学稲盛会館

講師：郷 通子 氏（お茶の水女子大学長）

演題：「学士課程と大学院の教育をめぐって」

- ・学士課程教育の構築について
- ・新しい教養教育の試み
- ・FDについて
- ・大学院教育の姿

プログラム：

13：30～14：00 受付

14：00～14：30 教育センターの取り組み

谷口 溪山(教育センター長)
平成20年度英語教育改革実践の経過報告
富岡 龍明
(教育センター-外国語教育推進部長)

14：30～14：40 開会挨拶

谷口 溪山(教育センター長)

14：40～14：50 挨拶

吉田 浩己(鹿児島大学長)

- 14：50～15：00 講師紹介
 15：00～16：30 講演
 「学士課程と大学院の教育をめぐって」
 郷 通子 氏
 （お茶の水女子大学長）
 16：30～16：40 質疑応答
 16：40～16：50 閉会挨拶
 中山 右尚
 （教育・学生担当理事）

※ 司会・進行：FD委員会委員

当日の参加者は、学長、教育センター長、理事（教育・学生担当を含め4名）、監事1名、全学の学部長（8名）、教育副センター長、教育センター三部門の部門長（3名）、教員については、法文学部（10名）、教育学部（15名）、理学部（16名）、医学部（6名）、歯学部（14名）、工学部（28名）、農学部（18名）、水産学部（6名）、教育センター（6名）、学共施設等（1名）、事務職員については、教育学部事務（2名）、理学部事務（6名）、工学部事務（4名）、事務局事務（12名）、学生の参加もあり（57名）、また、県内大学等からの参加もあった。第一工業大学（3名）、志学館大学（4名）、鹿児島純心女子大学（5名）、鹿児島女子短期大学（1名）、それにお茶大同窓会（8名）、そして南日本新聞（取材）（1名）で合計246名であったが、稲盛会館の会場は満席で、後の方では、座る席がなく、立っている状況であった。

講演内容についての概略は次のとおりです。

〔講演の内容〕

学士課程と大学院の教育をめぐって

—質の向上のために—

1. 学部教育の改策

(1)大学の变化

- 1) ユニバーサル化（大衆化）（50%を超える大学進学率）
- 2) 知識基盤社会化
- 3) グローバル化

(2)「学士力」

- 1) 何を付加価値として卒業するのか
- 2) 学部教育から学士課程教育へ

3) 「学部」（組織）から「学位の課程」（教育の内容）へ

2. 学士課程教育の構築に向けて

—中央教育審議会大学分科会制度・教育部会
 「審議のまとめ」、平成20年3月25日—
 (1)基本的な考え方

1) 「知識基盤社会」における大学教育の量的拡大（ユニバーサル段階）を積極的に受け止めつつ、社会からの信頼に応え、国際通用性を備えた学士課程教育の構築を目指す。

2) 3つの方針（①学位授与 ②教育課程編成・実施 ③入学者受け入れ）に貫かれた教学経営、PDCAサイクルの確立

(2)具体的な施策（主に国による支援・取り組みの例）

- 1) 我が国の学位水準の維持・向上に向けた枠組みづくり
- 2) 教育内容・方法の優れた実践を行う大学に対する重点支援
- 3) 高等学校との接続の改善
- 4) 教職員の職能開発の推進
- 5) 質保証システムの整備・確立
- 6) その他

3. 中長期的な大学教育の在り方について

—中央教育審議会、平成20年9月11日—

(1)大学院に関する課題と論点整理

論点1. 学位プログラム等を通じた大学院教育の実質化

論点2. 大学院生や博士課程修了者への進路や経済的支援

論点3. 大学院の今後の量的規模

論点4. 大学院大学（特に専門職大学院大学）の在り方

論点5. 専門職大学院の在り方

4. 大学教員の能力開発FD（Faculty Development）

—努力義務から義務化へ—

平成19年4月 大学院のFD

平成20年4月 学士課程のFD

（FD活動、FD推進委員会設置などへ）

5. 国際的に魅力ある大学院教育 ジにつながる生涯学習システム構築
- (1)21世紀は「知識基盤社会」の時代であり、
大学院は最高段階の教育研究活動を行う場として、我が国の人材養成の中核を担うことが必要
- (2)学生に対する教育と教員の研究活動が渾然一体をなして実施され、学生に対する教育が研究室の中で完結する従来型研究指導では限界
- (3)大学院教育の充実・強化のための5年間程度(平成18～22年度)の重点施策を明示し、体系的かつ集中的な施策展開を図る
- (4)国際的に魅力ある大学院教育の構築が図られることが極めて重要(大学院教育振興施策要綱の策定－平成18年3月30日)
6. 大学院改革について－大学院教育振興施策要綱の策定－(平成18年3月30日)
- (1)大学院教育の実質化(組織的展開の強化)
- 1) 課程制大学院の趣旨に沿った教育の課程と研究指導の確立
 - 2) 学生に対する修学上の支援
 - 3) 若手教育等の教育研究環境の改善
 - 4) 産業界との連携の強化
 - 5) 各分野のバランスのとれた発展(人社会系大学院)
- (2)国際的な通用性・信頼性(大学院教育の質の確保)の向上
- 1) 実効性ある大学院評価の取組の推進
 - 2) 国際貢献・交流活動の活性化
- (3)国際競争力のある卓越した教育研究拠点の形成
- 1) 平成19年度からポスト「21世紀COEプログラム」を実施し、世界最高水準の卓越した教育研究拠点形成のため重点的支援(「グローバルCOEプログラム」:平成20年度要求額 470億円)
7. 総合科学技術会議「早急に取り組むべき課題」
－大学が更なるイノベーションの創出・促進を担うために－
- ◎大学・大学院改革
- (1)大学の研究力・教育力の強化
 - (2)世界に開かれた大学づくり
 - (3)地域の大学等を活用した新たなチャレンジにつながる生涯学習システム構築
8. 高等教育の国際的な質保証を巡る世界の動向
－大きな変革期にある大学を取り巻く国際情勢－
- (1)国際機関等における検討
 - (2)ヨーロッパにおける取組例
 - (3)ポローニャ宣言(1999年)
 - (4)各国の事前関与と相まって高等教育の質保証と制度の共通化を目指す
 - (5)高等教育機関に対する公財政支出の対GDP比のOECD各国比較(2004年)
 - (6)主要国における高等教育機関に対する支出の対GDP比(2004年)
 - 1) 学生一人当たりの高等教育費の国際比較
 - (7)主要国等の政府負担研究開発費の推移
 - (8)主要国の政府負担研究開発費の対GDP比
 - (9)大学の収入構造
 - (10)大学院改革に係る報告書－1、報告書等－2
 - (11)イノベーション創出を担う－理工系博士の育成と活用を目指して、平成19年3月20日、日本経済団体連合会－
 - (12)人材の養成、確保、活躍の促進(○科学技術関係人材の養成・確保)
 - (13)入学者数と延べ入学志願者数の比(修士課程)
 - (14)入学者数と延べ入学志願者数の比(博士課程)
 - (15)教員数(大学院担当者)の推移
 - (16)大学院における在学者数及び在学者数に対する教員数比の推移(私立)
 - (17)教員一人当たり学生数
 - (18)米国における理工系博士号取得者の大学教員としての雇用
 - (19)大学院を置く大学
 - (20)大学・大学院における在学者の状況(平成19年5月1日現在)
 - (21)大学院規模の国際比較
 - (22)主要国の学位取得者数(自然科学系)
 - (23)博士課程修了者の研究開発者としての企業採用実績
 - (24)ポストドクター経験者の研究開発者としての企業採用実績

- (25)新卒で採用した博士課程修了の研究者の資質
- (26)日米の博士号取得者の雇用部門別分布
- (27)日米の博士号取得者の職業別分布
- (28)日米の博士号取得者の就業実態
- (29)シラバスを作成している大学院（平成17年度）
- (30)大学院におけるフォカリティ・ディベロップメント（FD）実施状況
9. 大学院における「大学院教育振興施策要綱」に関する取り組みの調査結果—中央教育審議会大学分科会、大学院部会、平成20年11月20日—
- (1)博士の標準修業年限内での学位授与率（平成18年度分野別）
- (2)平成18年度学位授与者（課程博士）のうち標準修業年限からの超過年別推移（分野別）
- (3)博士の学位授与の円滑化に関する取組（複数回答）
- (4)社会人入学者の割合
10. お茶の水女子大学のFD体制
- (1)お茶の水女子大学のFD（教育開発）
- 1) 学生による授業評価アンケート（H15より）→教員の授業改善→教員アンケート→報告書（集計・分析）
- 2) FD講演会「人気教員授業を語る」（H18）「文理融合リベラルアーツとFD」（H19、H20）
- 3) FDリレーエッセイ授業評価の高い教員に依頼・執筆（H18年度より）ウェブ公開
- 4) 教員による相互授業参観（H19-20）3学部&大学院 授業参加・コメント
- 5) 全学学生意識調査 教育・学生支援・女性支援など（H17、H19）→調査報告書
- 6) 国際規格のFD戦略（政策対応経費、H20）
- ①文理融合リベラルアーツ科目群（20年度）→全学的なFDの必要性→リベラルアーツFDシンポジウムの定期開催
- ②教員が「他所に（他所から）」学ぶ
- (2)国際規格のFD戦略
- 1) 女性リーダー育成
- 2) 途上国女子教育支援
- 3) 国際協力人材育成
- 4) 女性が進出できる研究分野の開拓
- 5) 幼・保
- 6) リスク社会
- 7) 食育
- 8) トラック教育←社会と学生のニーズ→テーマ別教育研究
- (3)国際規格に向けて
- 1) 教員の海外研修
- 2) 米韓の大学教育調査
- 3) 海外招聘教員による授業とFD講演
- 4) 国際規格の教育カリキュラム・評価体制
- (4)海外招聘教員によるFD—授業実践とFD講演—
- 1) 是枝正人先生による講義と講演会（米国ミシガン大学教授、有機化学）
- 2) D・ケンネット教授（比較経済学）
- (5)米韓大学訪問調査—教育環境・授業参観・インタビュー—
- 1) 梨花女子大学
- 2) ヴァッサー大学
- (6)文教育学部のFD活動
- 1) FD授業参観
- 2) FDシンポジウム
- 3) FDワークショップ（1）、（2）
- 4) FD活動への提言
- (7)教育の全学的運営（大学院改組—お茶の水女子大学の事例—）
- すべての専任教員が研究院（基幹部門、先端融合部門）に所属
- 1) 大学院における教育研究機能の強化
- 2) 学部間・学部大学院間をつなぐ教育の全学的運営
- 3) 研究情勢に応じた柔軟な研究組織の構築と人事予算配分の効率化（先端融合部門など）
- (8)お茶の水女子大学(大学院改組と教育改革)

11. 魅力ある大学院イニシアティブ：お茶の水女子大学が進める教育事業（ユニバーサルマインドをもつ女性人材の育成）

- (1)学位取得実質化（ステージ制）
- (2)6年間のアカデミックトラック
- (3)教育課程の実質化
 - 1) ステージ制＝お茶大モデル
 - ①複数指導教員制を導入
 - ②年度ごとの達成目標を設定
 - ③修士論文を「中間論文」と位置づける
→5年間での学位取得促進

(4)大学院教育の実質化

- ・全学的に組織を改革する
- ・事務部門の改革も大切
- ・全学の教育と研究を一望できるしくみ
- ・教育プログラムと研究プログラムの提案はボトムアップ
- ・競争的資金獲得への取り組みに役員会の寄与

12. まとめ

- ・大学院生は多すぎない
- ・教員の教育負担は増加
- ・公的投資が国際的に大きく見劣りする
- ・国際通用性の実現は行革と相容れない
- ・キャリアパスの多様化と拡大に向けて社会のイノベーションを
- ・オーバー・ポストク問題の解決は喫緊
- ・楽しくやりがいのあるFDが見えてきた

（文責：平成20年度教育センター長 谷口 溪山）



平成20年度 学生・教職員ワークショップ「自学自習の方策について」

・・・自ら学ぶ意欲をどう引き出すか・・・

日時：平成21年2月16日（月） 12：00－16：00

場所：稲盛アカデミー棟1階

ワークショップの実施のスケジュール

(1)オリエンテーション	12:00－12:15 (15分)
(2)昼食・自己紹介	12:15－13:00 (45分)
(3)グループ・ディスカッション	13:00－15:00 (120分)
(4)プレゼンテーション	15:00－15:30 (30分)
(5)全体討論	15:30－15:55 (25分)
(6)閉会	16:00

1. 目的

FD委員会では平成18年度から実施している学生・教員・職員の3者合同のワークショップを平成20年度も実施した。今年度は学習効果を高めるためには、どのような方法や方策があるのか、3者に集ってもらい議論してもらった。共通教育では、各学期の終了時に行う授業アンケートの実施や中間授業アンケートにより学生の要求をくみ上げ、それを授業改善に結びつける活動を実施している。しかしながら、学生の自学自習に関連する項目はアンケート項目の中にあるものの学生の要求を直接聞いて、それをシラバス作成の参考にすることができれば、さらに授業改善に繋げることができると考えている。学習成果が問われるようになった現状において、単位の実質化をどのように実施していくのか、大変評価の難しい問題への対応が問われている。このためにも学生・教職員によるワークショップは授業改善に向けての貴重な機会になっていると思われる。

2. 実施内容

ワークショップは、学生43名、教員20名、職員8名、タスクフォース6名、スタッフ4名の計79名が参加して実施された。ワークショップは以下のような内容で実施した。初めにオリエンテーションの説明をした後、各班に分かれて、自己紹介を兼ねて昼食をとることにした。班毎の議論を始める前に昼食を一緒にとることで、お互いの理解が少しでも得られると考えたからである。その後、各班ごとに2時間の議論を実施してもらった。議論する内容については、以下に述べることにする。その後、全員に集ってもらい各班での議論を整理して、議論の内容を発表してもらった。それに引き続いて、全体討論を行い各班の発表に対して意見を出してもらい議論した。

ワークショップの実施においては、参加者は6班に分かれてそれぞれのテーマについて議論した。各班は共通教育を構成している主要な項目に対応して以下のような班に分かれた。

- ①班：教養科目（分野1）
- ②班：教養科目（分野2）
- ③班：教養科目（分野3）
- ④班：情報科学科目
- ⑤班：外国語科目（英語）
- ⑥班：基礎教育科目

各班はそれぞれの担当分野に関連して、以下に示す3項目について議論を行った。

- 1) 自学自習を取り入れた授業の進め方：
 - ・班毎に決められた科目分野について
- 2) 自学自習取り入れたシラバスの作成：
 - ・学習目標（学生の達成度）における自学自習のあり方
 - ・授業概要（内容と方法）における自学自習のあり方
 - ・授業計画における自学自習のあり方
- 3) 自学自習を反映した成績評価：
 - ・自学自習が成績評価にどのように反映されているか等

3. 実施結果とアンケート

今回のテーマは「自ら学ぶ意欲をどう引き出すか」が主要な点である。学生・教職員による熱心な議論が行われた。限られて時間の中では十分な議論の纏めを行うのは無理があると考えれるが、FD委員会では、このワークショップの結果を踏まえて、参加者にアンケートを実施した。このアンケートは以下のような内容になっている。

学生・教職員によるワークショップに関するアンケート

今年度の教職員ワークショップは「自学自習」について議論していただきました。本日の感想を以下のようなアンケートとして纏めますので、よろしくお願いします。

学生の方（該当する番号に○印をつけてください。）
(1) シラバスに示された学習目標についてどのように考えますか。 1. 分かりやすい 2. 大体分かる 3. 分かりにくい
(2) 自学自習の目標はどのようなものが適切と考えますか 1. 具体的な記述 2. 概略的な記述 3. キワードのみ
(3) 自学自習の成果はどのように成績評価に反映すべきと考えますか 1. 具体的項目で評価 2. 概略的項目で評価 3. 評価は必要ない

教職員の方（該当する番号に○印をつけてください。）
(1) シラバスに学習目標を示すとき望ましいのは 1. 具体的に記述 2. 概略的に記述 3. キワードのみの記述
(2) 自学自習をシラバスに記入するとした場合 1. 具体的な記述 2. 概略的な記述 3. キワードのみの記述
(3) 自学自習の評価を行うとした場合 1. 具体的項目で評価 2. 概略的項目で名評価 3. 評価は必要ない

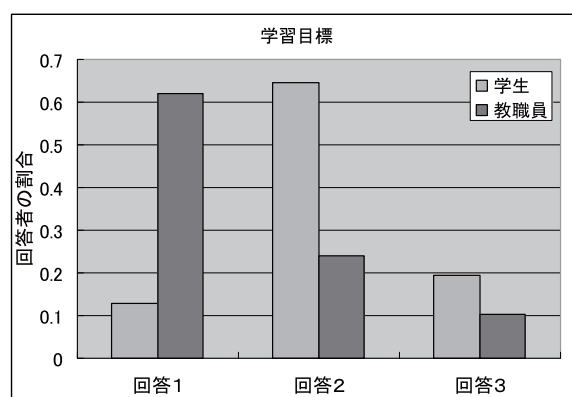
自由なご意見。感想を記述してください。

後日提出される場合は、教育センター共通教育係に提出してください。

上記に示したアンケートに対してワークショップに参加した学生、教職員から回答が得られた。回答者数は60で、学生が31、教職員が29であった。その結果は以下のようにものであった。

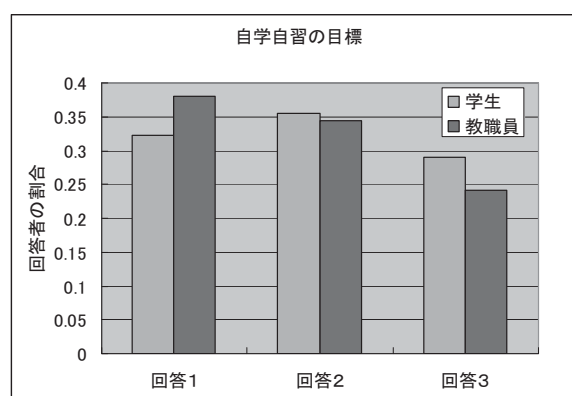
(1) シラバスに示された学習目標についてどのように考えますか。

学生はシラバスの学習目標は大体分かると答えた割合が約60%（回答2）であり、教員はシラバスに学習目標を示すとき、具体的に示すのは望ましいと考えている割合が約60%（回答1）になっている。一方、シラバスの学習目標が分かりにくいと答えている割合が約20%あり（回答3）、シラバスに学習目標のキーワードのみを示すだけでは、学生は理解してないことが分かる。



(2) 自学自習の目標はどのようなものが適当か。

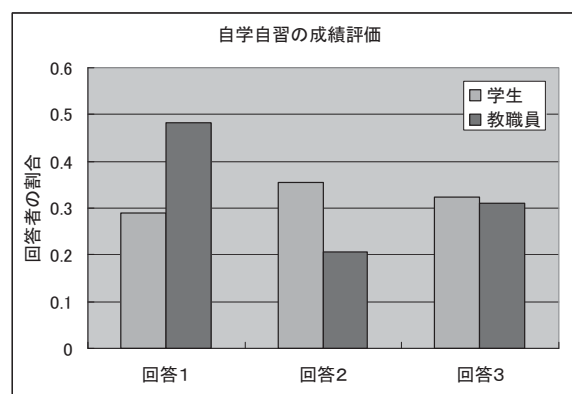
自学自習の目標を具体的に記述することが適当であると回答した学生は約32%、教職員は約37%と同様な割合を示している（回答1）。また、その目標を概略的に記述と回答した学生と教職員は約35%と同等になっている（回答2）。一方、キーワードのみの記述と回答した学生の割合は約30%、教職員は約25%となっている（回答3）。このためシラバスに記述する自学自習については、どのような記述がてきとうか、意見がわかれる結果を示している。



(3) 自学自習はどのように成績評価に反映させるか。

具体的項目で評価すると回答した学生の割合が約30%に対し、教職員は約48%を示している（回答1）。概略的項目で評価すると回答した学生の割合は約33%、教職員は約20%であり、教員は具体的な項目で評価する方が望ましいと思われる（回答2）。また、自学自習を成績評価に反映させる必要はないと回答した学生および教職員はともに約30%である（回答3）。

以上に示したように、学生・教職員ともに自学自習については色々な意見があることが分かる。自学自習の評価を全ての学生と教職員が望んでいないので、どのような自学自習で学習能力の向上を図るべきなのか、これからの議論が待たれる。



(4) 学生の自由な意見の例

- 1) 共通教育はゆるくてよい。専門では嫌でも必要になるから。
- 2) 他の学部の方と意見交換できてよかった。
- 3) 学生は熱心な講義には魅力を感じる。自分のことは自分で決めるように扱うこと

が大事。

- 4) 自学自習について自分で考える機会になった。シラバスは読みやすくしてもらいたい。
- 5) 明確に目標を抱かせるような自学自習が望ましい。

- 6) 自学自習は共通教育では必要ない
- 7) 参加学生が少ないので、学生全体に分かるような情報があるとよい
- 8) 学生の意見を聞く機会を作ってもらいたい。
- 9) 自由な視点での自学自習を評価してもらいたい。

(5) 教職員の自由な意見

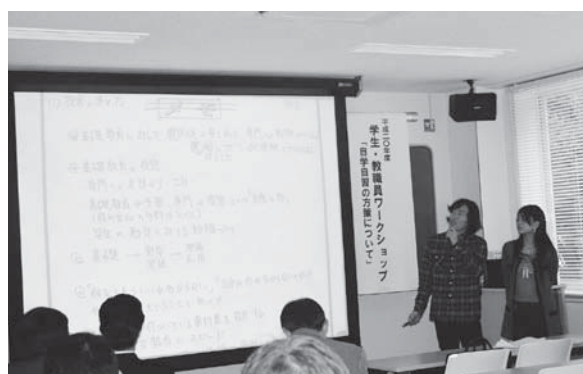
- 1) 自学自習とは何かはっきりしない。教育センターはどのような自学自習を期待しているのかはっきりしないと、議論できない。
- 2) 目標を持った学生とそうでない学生にどのような対応するのか検討したい。
- 3) よく考えている学生もいると思った。
- 4) 各グループにPCとプロジェクターがあると能率が上がる。
- 5) 自学自習というテーマに無理がある。このワークショップは質の向上には繋がらない
- 6) 自学自習をしなくても単位がとれることが問題。共通教育と専門教育の位置づけが不明では議論がかみ合わない。
- 7) 自学自習の方策に特効薬はない。将来の職業を意識したモチベーションが大事ではないか。
- 8) やる気の無い（例えば今回出席していないような）生徒に意欲を持たせる討論が必要では。
- 9) 学生の意見が聞いてよかった。自学自習のあり方を教える科目があってもよいのでは。

4. まとめ

ワークショップを実施すると、常に貴重な意見が述べられる。学生・教職員の両方ともに自学自習については色々な意見があることが分かる。自学自習については、質問項目の3で述べたように「自学自習はどのように成績評価に反映させるか」が評価の分かれる問題でもある。本来、評価する必要のない項目までシラバスに示すことが適切なことなのか、意見の分かれるところでもある。どのような自学自習で学習能力の向上を図るべきな

のか、これからの議論が待たれるところである。自学自習に関する対応は、学生が継続的学習能力をどのように修得したかを示すものでもあり大変評価の難しい問題である。このためにも学生・教職員によるワークショップは授業改善に向けての貴重な機会になっていると思われる。

(文責：平成20年度高等教育研究開発部長
河野 健二)



平成21年度 新入生クラス担任等教員FD講習会

日時：平成21年3月23日（月）13：30－16：30
場所：総合教育研究棟102号教室

新入生クラス担任の業務はカリキュラムに沿った科目履修方法の指導や学力向上を目的とした学習支援から、不安定になりがちな新入生の精神面に対する支援まで多岐にわたる。これらの指導・支援体制を十分に理解していただくことを目的とした講習会が開催され、各学部から44名の参加者があった。

1. 講習会の概要

最初に、谷口溪山教育センター長より、今回のFD講習会開催の趣旨について説明があった。また今年度から大きく変わった英語教育や人間教育科目群の新設、疑義申し立て制度、GPAに基づく教育センター長からの学生表彰などについて概略説明をいただいた。

森岡洋史保健管理センター長からは、近年精神面でのサポート相談件数が増加しているが、これは担任制度の普及からその存在が気づかれるようになったこと、異常のサインを感じたらセンターに連絡し以後の対処に情報を共有していくことの大切さが説明された。

伊地知信二センター准教授は、センターの相談事例から見た学生の多様性について述べられ、人間の持つ多様性の高さとこれがもとで起こるつまずき、あるいは発達の偏りと、大学が学生の多様性に対応しなければならない法的根拠についての説明があった。

志賀美英共通教育企画実施部長からは、平成21年度の履修案内をもとに、共通教育科目や教養科目の構成について丁寧な説明があった。試験における不正行為の適応基準、学期GPAが1.5未満で助言指導対象となる学生への教員の対処法なども詳述いただいた。富岡龍明外国語教育推進部長からは新しくなった英語教育の概要についてパンフレットをもとに紹介いただき、外国語の履修については学部・学科などで受講パターンが異なることを履修案内に沿って説明いただいた。事務職員からは、新入生オリエンテーションでの伝達事

項について資料に基づき説明が行われた。

2. アンケート結果

講習会に関連した11項目の設問に対して、3段階の回答方式によるアンケートが講習会終了後に実施された。全ての項目に対して7割以上の参加者が概ね理解できたと回答しており、講習会の開催がクラス担任の業務支援に一定の効果を持ったと思われた。また自由記述欄には19名の方から多岐にわたる意見をいただいた。時間が長すぎる、説明が重複している、資料にページがなく説明箇所がわからない、学会の多い時期の開催に困惑など、次年度のクラス担任講習会を開催するにあたり、全学FD委員会で検討すべき指摘もみられ、さらに実りある講習会を目指したいと願っている。（文責：平成20年度FD委員会委員 四宮 明彦）



法文学部FD活動報告

I 「学生による授業評価アンケート調査」 報告

【実施の経緯】

法文学部では、平成13年度にFD委員会を設置して以来、学部の授業の点検と改善に取り組んできた。そのための活動の一環として、学生による授業評価アンケート調査を行い、回答された個票データは授業担当者に返却し、また、学科単位での集計結果を報告書として公表して、教員の授業改善に役立ててきた。

平成17年に精査改訂されたアンケート票を継続して採用しているが、昨年度の報告書ではマンネリ化が指摘されていた。それは次のことを意味している。すなわち、良好な授業評価結果が継続する傾向にあるが、それはアンケート票で触れられる限りでの授業改善努力が飽和状態にあることを反映している。そのため、従来のアンケート票による授業評価が授業改善のための新たな提言性を持ち得ないということである。こうした状況に鑑みて、昨年度より新たに、出席頻度の低い授業科目についての評価を加えることにした。その背景には、法文学部では、学生に対し、シラバスを通じて講義内容を納得させたいうえで、一学期における受講単位数の上限（25単位）の規定下で学習を徹底させる方策をとっているにもかかわらず、履修登録科目に対する学生の出席状況が完全ではないという事態は問題であるという意識がある。

以上の認識にもとづき、今年度は出席頻度の低い授業科目に対する評価についての分析に集中することにした。17年以来採用されている出席授業に対する評価については、大きな傾向の変化は生じていないであろうとの推測のもと集計は施さず、教員各自の授業改善資料として活用するにとどめた。

期間：2008年12月1日～12月12日

実施機会：各教員の担当授業のうち、1コマ（1回）。講義・演習・実習いずれでも可

調査の実施にあたり、教員からの協力度が昨年

度よりかなり低下したように思われる。アンケート票を提出した教員の割合は次のとおり。法政策学科80%。経済情報学科41%。人文学科44%。

【実施の経緯】

昨年度と同一のアンケート票（後掲）を用いた。

【今後の課題】

学科ごとの分析結果を施してあるが、ここでは、学部全体を通してみたFDの課題について述べておく。

履修登録科目のすべてに対して常時出席している学生の割合が4割弱から5割台半ばという事態について、前年度の集計結果と比較して、次の仮説が提示されよう。

- (1) 調査時点が、昨年度は7月であったが、今年度は12月である。気候条件が出席状況に影響したことが考えられる。ただし、経済情報学科の集計結果には特異な動きがあったので、データの蓄積が進展して安定的な傾向を見出した後に判断することが望まれる。
- (2) 全学科において、出席頻度が低いために評価の判断材料を欠く結果、アンケート票の評価項目に対して無回答もしくは否定・肯定どちらつかずの評価である評価点3を回答した学生が最多数を占めているという事態は、学生達がアンケートで問われた観点での評価に至りさえせずに出席放棄していることを示唆している可能性がある。

いずれにせよ、本アンケート票に設定された評価項目が、出席放棄の要因を捕らえるには不十分であることを示している。それは、アンケート票の評価項目の設定の根拠である従来型FDによる対応の限界を示している。学生気質の把握を中心とした新たな対応が望まれるところである。その必要性は、一部学科で授業に対する肯定的評価の割合が改善したにもかかわらず、履修登録科目のすべてに対して常時出席している学生の割合が低下した事態を考え合わせると、一層強く感じられる。新たな課題への取り組みは授業評価のマンネリ

各学部のFD活動報告

打破にもつながろう。それは、今年度の調査で教員の協力度が低下したことへの対処につながるものと思われる。そのためには、昨年度報告書で指摘された通り、「学生による自由記述欄に焦点を

あてた『記述型アンケート調査』や、学生への授業に対する『面接調査』などを別途実施するなど、今後の工夫が必要」なのであろう。

(表面)

平成20年度後期 法文学部授業評価アンケート調査

この調査は、法文学部における授業改善に役立てるために行なうものです。あなたの回答が成績等に影響することは一切ありません。受講して思った事や感じた事を率直に回答してください。

表と裏の両面に全部で26の設問があります。(1)から(17)まではすべての授業科目で回答してください。(A)と(B)は講義のみ回答してください。(a)と(b)は演習や実習のみ回答してください。裏面は、今年度の本調査を初めて受ける人だけ回答してください。(18)は履修登録した科目全般について、(19)から(22)については、出席頻度の低い科目全般について回答してください。(13)は記述式で、それ以外はマークシート方式で、○印を黒鉛筆・シャープで塗りつぶして回答してください。

科目名 ()	学生の所属学科
曜日時限 ()	○1 法政策学科
担当者 ()	○2 経済情報学科
	○3 人文学科
○1 講義	科目の開設学科
○2 演習	○1 法政策学科
○3 実習	○2 経済情報学科
学年 1 2 3 4	○3 人文学科
○ ○ ○ ○	○4 共通

すべての授業科目（講義・演習・実習など）で回答

(1) あなたはこの授業によく出席した	あまり出席しなかった	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	よく出席した
(2) あなたは不明な点を積極的に教員に質問した	全く質問しなかった	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	積極的に質問した
(3) あなたは授業に意欲的に取り組む努力をした	あまり努力しなかった	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	非常に努力した
(4) この授業は分かりやすいものだった	分かりにくかった	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	分かりやすかった
(5) 教員は授業の目標をはっきり示した	全く示さなかった	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	はっきり示した
(6) 教員の声や話し方は聞き取りやすかった	聞き取りにくかった	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	聞き取りやすかった
(7) 教員は授業を時間どおり行なった	全くそう思わない	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	強くそう思う
(8) 教員の授業に対する意欲や工夫が感じられた	全くそう思わない	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	強くそう思う
(9) 授業を通して、自分にとって発見があった	全くそう思わない	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	強くそう思う
(10) 質問や意見に対して適切に対応してもらえた	全くそう思わない	1 2 3 4 5 ○ ○ ○ ○ ○	強くそう思う

Ⅱ 「授業公開・授業参観（研修授業）」報告

1. はじめに

全教員による法文学部授業公開・授業参観は今年で3年目を迎えた。2005年度までは、法文学部で独自に授業公開・授業参観（名称は「研修授業」）を行ってきたが、2006年1月に学長裁定により「鹿児島大学「授業公開」実施要項」が制定されたことで、2006年度より全教員による授業公開・授業参観が開始された。

法文学部では、2006年6・7月に実施された他学部の例を参考に、2006年12月4日～15日に2006年度法文学部授業公開を実施した。2007年度は、2006年度の実施状況を参考に、実施期間を一週間延長して三週間とし、公開コマ数も1コマ以上とした上で、2007年11月26日～12月14日に実施した。

3年目を迎えた2008年度法文学部授業公開では、昨年度の反省点（参観率の低下など）を踏まえ、（1）FD委員会による推薦授業の導入、（2）実施期間の延長、の2点を改善し、2008年11月24日～12月19日に実施した。また、授業公開報告書では、意見交換会で話し合われた内容を記述する欄を新たに設けた。

1.1. 実施期間

- ・2008年11月24日（月）から12月19日（金）

1.2. 対象教員

- ・法文学部全教員（非常勤講師を除く）。
- ・全教員は、法文学部における担当授業の上記期間中の全コマの中から、1コマ以上を選び、他の教員に公開する（講義以外でも可、共通教育は除く）。
- ・全教員は、上記期間中に公開される授業の中から、1コマ以上参観する。

1.3. 授業公開の流れ

- ・授業参観者は、授業を担当する教員（以下、授業担当教員）に事前に参観する旨を伝える。
- ・参観後、授業参観者は、「授業参観報告書」を授業担当教員に提出する。
- ・授業担当教員は、授業参観者と相談のうえ、

意見交換会を行ってもよい（授業終了後でなくても構わない）。

- ・授業担当教員は、「授業公開報告書」と「授業参観報告書」を12月26日（金）までに各学科のFD委員に提出する（授業参観者がいない場合は、「授業公開報告書」のみを提出する）。

平成20年度 鹿児島大学法文学部授業公開報告書

授業科目名		授業担当者名	
公開期日	平成	年	月 日 () 時限
授業参観者			
意見交換会	有 無		
(1) 昨年度の授業公開 (参観者からの意見等) を基に先生が工夫、改善された点等をお書き下さい。			
(2) 授業参観者からの意見等に対する感想をお書き下さい。			
(3) 意見交換会で話し合われた内容についてお書き下さい。(意見交換会を実施された方のみ)			
(4) 授業公開の実施時期や授業公開に対して意見等があれば、お書き下さい。			

平成20年度 鹿児島大学法文学部授業参観報告書

参観者氏名		参観者所属	
参観授業名		授業担当者名	
参観期日	平成20年 月 日 (曜日) 時限		
<p>本授業を参観して、工夫していると感じた点や、自分の授業に取り入れたいと思った点をお書き下さい。</p>			
<p>本授業をより良いものにするためには、どのようにすればよいかをお書き下さい。</p>			
<p>本授業に対する感想やコメント等をお書き下さい。</p>			

2. 授業公開の報告

ここでは、授業公開報告書と授業参観報告書の以下の項目を、学科ごとに「講義形式の授業」についてのみ、再録する。

- (1) 「授業公開報告書」の「昨年度の授業公開（参観者からの意見等）を基に先生が工夫、改善された点等をお書きください。」（以下、「授業担当者の工夫、改善点」）
- (2) 「授業参観報告書」の「本授業を参観して、工夫していると感じた点や、自分の授業に取り入れたいと思った点をお書き下さい。」（以下、「工夫していると感じた点・取り入れたい点」）

2. 1. 法政策学科

2. 1. 1. 授業担当者の工夫・改善点

- 今年度のテキストは昨年度のをあらため（毎年、変えているが）、学生に、より興味のもてるものにした。
- OHP等の教育機器を利用しようと考えたが、今年は余裕がなくて実行できなかった。授業効果を高めるために、来年あたりは利用したいと思っている。
- 一回の授業内容が、時間内に完結するよう、気を付けた。
- 受講者の関心を引きやすい教材を選んだ。
- プリントを増やして説明を分かり易くした。
- 受講者の授業参加を促し双方向性を高めた。

2. 1. 2. 工夫していると感じた点・取り入れた点

- 講義の流れは板書され、理解を助けるためには条約集のプリントを配布するという形をとっておられるのは、分かりやすくよいと思った。プリントにも工夫が感じられた。
- 90分で1つのテーマを上手に話し終えられた点には感心した。準備が十分なされているからであると想像する。
- 多様で豊富な資料を用い、学生に極めて理解し易いように話し、学生が納得しうる解説の仕方である。
- 豊富な資料に基づき、客観的で冷静な分析をした上での講義は、とても参考になった。

■教材は英字新聞等をコピーして作成されているが、関連資料も充実し、わかりやすくていねいな授業がおこなわれている。またOHPが効果的に利用され、学生の注意をよくひきつけている。

■TOEIC関係のテキストで、テープも用いられ、訓練のための英文は実用性に富むものとなっている。授業担当者の解説は丁寧でわかりやすく、補足説明等も加えられており、学生の理解度を確かめながら授業が進められている。

- 最新のデータを含んだ資料が配付されている。
- 資料が豊富である（B5版・A4版 12枚）。
- 授業の進行に合わせて、資料を配付している。

2. 2. 経済情報学科

2. 2. 1. 授業担当者の工夫・改善点

- 授業の目的である「プレゼン能力の向上」が必要な理由を説明した。
- プレゼンに対する自己評価レポートを書かせることにした。
- プレゼンの様子をビデオで撮影しており、昨年度は、希望者に映像（ファイル）を渡すと言ったが、希望者が1人もいなかったので、今年度は、自分の映像を見た上で、自己評価レポートを書かせた。
- 学生とのコミュニケーションを高めた。
- 受講生の理解度を向上させるために練習問題を増やして習熟度のチェックを行うように改善を図った。
- 学習の習熟度を把握したうえで、重要な簿記処理についてはより詳しく補足的な説明を加えることにした。
- 受講生が積極的に授業に関われるように、（1）担当箇所の下訳の事前提出→指導→再提出→授業でのチェック、（2）授業内容に関する小テストの実施、（3）学生によるテキスト翻訳の印刷発行、という試みを取り入れた。
- 講義で触れる時代背景を簡潔に理解できるように、話のポイントと映像資料がよりかみ合うよう努力した。
- 新たにCDを使い、音声資料も使用した。

- 学生の意欲を保つべく、時間進行・内容を見直し上々の効果を得ていると感じた。
- 毎回出席をとり、昼休み頃にレポートを課し、時折学生に質問を投げかけた。
- 東アジアと中国経済の事例を講義の内容に入れることで工夫と改善を図った。
- 自分で出来る精一杯の準備と授業を行った。
- プレゼンテーションの画面を一部カラーにした。
- レポート発表および質疑応答で発言しやすい環境を作るため、学生を教室の前方に固めて着席させた。

2.2.2. 工夫していると感じた点・取り入れた点

- 授業内容の説明に際して、事項と事項を矢印でつなぐなど、論理的な関連がよく分かるように工夫された板書であった。
- 字も大きく見やすく、授業のスピードと板書のタイミングも絶妙で、理解しやすい授業であった。
- 板書の記述が、適度な量であり、内容も整理されていた。
- 板書の記述が多すぎると、受講生は、書き写すことに集中して、口頭での説明を聞かなくなり、少なすぎると、後日ノートを読み返したときに、内容が分からなくなる可能性があるのに対して、この講義の板書は、口頭での説明を聞くこともでき、後日ノートを読み返しても内容を十分に思い出すことができる量であった。
- 板書と説明の順番や間合いが参考になった。
- 「板書→説明」の順番だと、受講生は書き写すことに集中して、話を聞かなくなるが、「説明→板書」の順番だと、受講生が内容を理解してから、書き写すので、要点をまとめやすくなると感じた。
- プレゼンテーションのツールである「パワーポイント」の利用をより効果的にさせるためにさまざまなスキルを修得させていた。
- 身近な問題を材料にして、プレゼンテーションをしやすいように工夫していた。
- 持ち時間を与えてひとりずつプレゼンのコンテストをやらせることによって、モチベーションを高めるような工夫をしていた。
- 学生との間で和やかに成される授業運営は長年の経験に基づくものだと感じ、参考にしたいと思った。
- 板書が大変丁寧で見やすく、講義の要点を理解できるように工夫されていた。
- 板書の合間の説明が簡潔で分かり易く、ビール会社などの具体的な事例に即して講義を進めていた。
- 豊富な事例に基づいた講義形式は、是非自分の授業にも取り入れたいと思った。
- 受講生の授業態度については、私語もまったくなく、全員が熱心に聞いており、授業に対する受講生の信頼が十分に窺われた。
- 経済構造の変化が、消費構造、消費動向にどのように影響を及ぼすのかわかりやすく説明されている。
- 適宜、授業中にビデオ鑑賞等が行われているが、当時の農家の様子等、視覚にうったえるもので、学生諸君にとって具体的な説明となっており、特に、小坂明子の「あなた」は当時の消費生活を解説する上で適切な教材だと思った。
- 配布されているレジュメの内容がていねいで、ちょうど90分の講義に合うよう作成されており、写真、漫画等が掲載され興味をひくものであった。
- レジュメがB4 1枚にコンパクトにまとめられており、また、絵や写真も利用して分かりやすいと感じた。
- ビデオも10分程度の短いものを利用しており、授業の内容ともマッチしていると感じた。
- 戦後の都市化に伴う消費や生活様式の変化について、詳細な配布資料とビデオを使いながら丁寧な解説が行われ大変分かりやすい授業であった。
- 配布資料には、当時のイメージ図などが描かれており、当時のファッションや消費財をイメージし易くするための工夫が随所に施されていた。
- 説明を補足するためのビデオの使用は学生の理解を深めると共に学生の集中力を高める上で大変有効な方法であると感じた。
- ビデオを見る際には照明の明るさを調整し、

説明を行う際には多くの具体例を用いて説明するなど、大変きめ細かい授業がなされており、学生への教育的配慮が多くうかがえる大変有意義な授業であった。

- 難しいパソコンの操作を、初心者にも分かり易く丁寧に説明していた。
- 常に学生の理解能力に配慮しながら授業を進めており、感動した。
- 毎回の講義のキーワードを10語ほど設定して、講義を進められているのは、学生に便宜だと思うので、自分でも取り入れる可能性を模索してみたい。
- 1974年や1983年の新聞記事の切抜きを大切に保存して、教材として利用されているのは流石で、自分もきちんと切抜きし整理して、講義に利用していきたい。
- 比較的ゆっくり話をされていて、学生には聴き易いだろうと感じた。
- 現在のサブ・プライム問題に起因する経済状況の変化（例えば、リーマン・ブラザーズの破綻の前と後との違い等）にリンクして、事前のシラバスに縛られずに臨機応変に講義内容を差し替えて講義されているのは、学生の興味と関心からしても適切な対応であり、大変良いことだと考える。
- プレゼンテーションに工夫が見られ、きちんと授業が計画的に進められていた。
- 学生の集中度も高いと感じた。
- 抽象的なテーマであるが、画像・動画資料と文字資料を組み合わせ、授業の主題を例示・説明し、議論を進める点に工夫を感じた。
- 論文資料を作業中に講読し、説明を加えた上で、次回にレポートを提出させる点は参考になった。
- 事前にプレゼンを行う際の注意点を丁寧に説明していた。
- 各学生がプレゼンの工夫に苦心している姿が容易に想像できた。

2.3. 人文学科

2.3.1. 授業担当者の工夫・改善点

- ノートに記入できる余裕を持たせるために、スライドの画面の進行を少し遅くした。

- 大人数の講義形態なので、授業内容に関する質疑や受講生とのコミュニケーションが取り難いため、定期的に用紙を配布して質問を募ってこれに回答する機会を設け、授業の理解度を高める工夫を行なった。
- 基本的に授業担当者の板書を受講生が筆録する形態をとっているが、受講生の理解を更に促す目的で、板書を緻密にし、特に重要な語句に傍線を施すなどの工夫をした。今後は資料の配布も考えたい。
- 前時の授業の復習に時間を割いて、重要事項に関する理解の定着化に努めた。また、しばしば学生から早口であるとの指摘を受けるので、その点を特に留意し、文献を読む態度について、繰り返し学生にアドバイスした。
- 昨年度は演習の公開だったため、特に講義で改善した点はないが、授業アンケートなどで指摘のあった板書についてはなるべく丁寧にゆっくり書くように努めた。
- 授業内容のポイントを分かりやすく明確にしたこと。
- 受講学生からの質問に対して、丁寧な回答を行うよう心がけたこと。
- 具体的な研究事例（個人の研究）を取り入れたこと。
- 板書の文字の大きさを大きくしたこと。ノートに写す時間を充分に取るよう注意したこと。
- 考古学では視覚に訴えないと理解しづらいので、パワーポイントを使い、図版は配布資料とした。また、ゆっくりしゃべるように心がけた。板書には気をつけているが、なかなか綺麗にいかない。
- 教科書以外の教材を増やし、豊富な内容にした。
- 昨年度も参観者がなかったので、意見等は参考にしていないが、授業内容を精査し、分かりやすく呈示する工夫は毎年続けている。
- 講義内容に係わりのある土地を現地で撮影し、授業中に適宜活用して学生の理解の便をはかった。
- ケータイ使用料、就職活動、語学留学などで支出の多い学生にとっては高価なテキスト(3,000円で、1年間使用))ではあるがテキストばかりではなく、関連した資料も必要に

応じて配布して一層幅広い理解を得られるようにしている。

- なるべく板書を控え、パワーポイントで見やすい文字で表示できるように工夫した。
- 昨年度まで授業参観者はいなかった。3年前より講義においてはパワーポイントを導入している。以前は、そのスライドをすべてプリントにして配布していたが、学生が安心してほとんど筆記しないことに気づいた。そこで今年度よりスライドの一部をプリントするにとどめ、口頭の説明を学生が筆記するようにさせた。
- 授業計画をテーマや取り上げる作家ごとに3-4回1セットの4クールに分けた。それによって、学生が授業の全体像を予測しやすいようにできた。1クールの中に1回は映画作品を取り入れ、学生の興味を持続させた。また、学生が映画の授業を予測できるようにした。またクールごとの参考文献も提示した。全体として、学生が何をどのような順序で学び、それについてより深く学ぶにはどうしたらいいかを体系化したつもりである。
- ゆっくり話すように努めている。
- 重要事項は、繰り返すようにしている。
- 迅速な資料配布に努めている。
- 視聴覚資料を効果的に用いるように心がけている。
- 講義中に参考図書の紹介を挿入することを心がけている。

2.3.2. 工夫していると感じた点・取り入れた点

- 教科書あるいは板書に相当する内容が、配布されたレジュメに記されている。
- ほぼ常に学生のほうを向いている(私の場合、教科書・ノート・配布したレジュメ・板書を見ながら話すことが多く、落ち着かない感じがあるのではないかとと思っている。)
- とてもわかりやすい。
- とてもわかりやすなので、他の思想家の分もよみたくなくて、知り合いの学生からプリント全ページコピーしてもらった。とても、おとくな気分になった授業だった。
- かたりの「だよね」「ね」などが、学生に親

近感をあたえていてよかったと思う。

- 期內レポートを書かせるのも非常にいい試みと思った。
- 90分しゃべりつづけないのも、学生の集中力をかんがえると、頷ける。
- ベルクソンの著書の抜き書きと、論理の流れを示したプリントを予め配布していた点は、講義の内容を理解するのに役だった。論旨はよく整理されており、事例や補足的事項を種々説明することで、理解に役立つ構成になっている。声は大きく、聞き取りやすい。熱意の伝わる授業といえる。
- 15回分の資料を1回目に配布して、受講生の予習を促す点。
- 難解な問題に対する受講生の理解を助ける目的で、資料を読み上げつつ細かく具体的にコメントを加え、更に必要に応じて遡って論点を整理する点。
- 丁寧に作成された講義資料の流れに沿って、元気で大きく、メリハリのある声で分かり易い説明がなされている。間の取り方、大事なpointを繰り返す等の工夫が見られ、効果的学習が出来るようになっている。原典(翻訳)の引用も適切。結論を予告してから本論に入る点、又、学生に問いかけるような話し方がとても良かった。
- 資料が視覚的に注意を引くよう、インパクトのあるものを用いている点は、たいへん工夫がなされており、参考になった。
- 学生の質問をアンケートのように集めて答えている点は、学生の授業参加の意欲を高める点でとても有効だと思う。
- 説明材料に分かりやすい自前の写真や地図を用いる等の工夫。
- 質問を求めてもなかなか発言しない受講生に対して質問用紙を配布して、再度質問を促した点。
- 授業テーマに沿ったパワーポイントの効果的な使用。
- 授業テーマとかかわりのある身近な事例を問いとして投げかける導入部。
- ブレイクタイムの採用。
- 課題レポートのメールによる提出の義務付け(学生の自己表現・発信能力の涵養に効果的)

- 同じヨーロッパを専門領域とするので、自分の勉強にとっても幅広い知見が得られて有益であった。西洋、特にギリシャ、ローマの思想史（哲学史の一面と考えてよいと思う）というのは、ギリシャ語、ラテン語が必須のため専門外の人間には容易には理解しがたいが、担当の先生の長年の研鑽に基づく適切な解説で想像以上に理解できたと思う。
- 「クール」という形で、授業を分節化することは、学生にとっても、「今、自分が何を学んでいるか」ということを明確化しやすい方法だと感じた。取り入れてみたい。
- テキスト分析に入る前の作家像を提示するにあたって、パワーポイントによる画像と豊富なエピソードで描き出しているところに工夫を感じた。
- 前回の質問に対して授業中に返答している点。
- インターネットからダウンロードした映像資料（ニュース）を用いていた。視覚的な資料は、授業に変化をもたらすと思う。
- 紙媒体による資料が少なく、資源の節約になると思った。
- パソコンによる映像資料を用いるには、パソコン操作技術が必要となる。
- 「ケガレ」など、由来の説明は興味深かった。
- プレゼンテーションソフトを活用し、視聴覚資料や授業内容の項目などを効果的に提示し、板書時間のロスがなく、スムーズに授業が展開されていた点。
- 授業に関連した新たな調査成果や、現地でのエピソードを上手に組み込んでいた点。

3. 授業公開の総括

3.1. 授業公開実施による成果について

全員参加による授業公開・授業参観は今年度で3年目を迎えた。過去2年の授業公開の実施により、各教員は様々な工夫、改善を行っていることが報告書から読み取れる。

講義形式の授業では、

- (1) 如何にして学生に興味・関心を持たせるか
- (2) 如何にして学生の理解度を高めるか
- (3) 如何にして双方向的な授業スタイルを確立させるか

の3点について、様々な工夫・改善が見られる。(1)については、学生の興味を引くような教材の選択や配布資料の作成がなされており、解説の際、映像や写真を見せるなどして学生の注意を引きつけるような工夫が施されている。(2)については、板書方法や話し方を見直し、OHPやPowerPointを使うことにより視覚的な説明を行うなど学生の理解を助ける工夫が見られる。(3)については、学生に質問を投げかける、学生に発表する機会を与えるなど学生を積極的に授業に参加させるような工夫がなされている。以上3点は、授業公開の実施を通して大きく改善された点と言えよう。

一方、演習形式の授業では、

- (1) 如何にして学生の自主的な発言を引き出すか
 - (2) 如何にして学生同士の討論を活発にするかの2点がこれまでの共通した課題となっている。
- (1)については、テキストを易しいものにする、発表レジュメを事前に配布する、ディベートの際の立論要約を配布し内容確認をしやすくするなど種々の改善が図られている。(2)については、討論の際の役割分担を明確にする、質疑応答やグループ討論の時間を設けるなど学生が発言しやすい環境・雰囲気づくりがなされており、学生が主体となって演習を進行・運営するような工夫が見られる。一方で、役割分担を行っても報告者と教員のみ議論になってしまうなどいくつか課題も残されており、引き続き試行錯誤しながら最善の方法を探っていく必要があるだろう。

3.2. 授業公開のあり方について

ここでは、報告書の「授業公開・参観に対する意見」を参考に今後の授業公開のあり方について、以下の3点を中心に考察を行う。

- (1) 実施期間について
- (2) 実施方法について
- (3) 推薦授業について

(1)については、昨年度同様、前期にも実施してほしいという意見が多く見られた。来年度は両期とも実施し各教員がどちらかを選択して公開するような形で前期にも実施する必要があるかもしれない。ただし、前期の実施となると、第1回FD委員会が5月に開かれることを考えると、授

各学部のFD活動報告

業公開の運営上、十分な準備期間をとれないという問題もある。

(2)については、毎年授業公開を実施するのではなく数年に一度の実施でよいのではないかという意見がいくつか出された。この点については、全学的に再度議論する必要があるのではないかと思う。他にも授業公開をより効果的なものにするために、これまでの工夫・改善をリスト化して一覧表を作成・配布してはどうかという意見もあった。授業公開を形骸化させないためにも授業公開・参観を実施するだけでなく良い改善例等については文書にして全教員に配布し自分の授業に生かしてもらうような方法も今後考えていかなければならないかもしれない。

(3)については、評価の高い授業を公開して

いただき多くの教員が参観し自分の授業に生かしてもらう目的で、昨年度の授業参観報告書等を参考にFD委員会の推薦する授業を推薦授業として8科目選定させていただいた。下の表は、昨年度と今年度の「公開された科目数」、「参観者のいた科目数」、「公開された科目数に対する参観者のいた科目数の割合」、「参観者数」、「推薦授業の参観者数（今年度のみ）」、そして「参観者総数に対する推薦授業の参観者数の割合（今年度のみ）」を表わしたものである。参観者数47名のうち約30%の14名が推薦授業を参観しており、公開された科目数のうち推薦授業科目数が占める割合が約9%しかないことを考えると、多くの人が推薦授業を参観したと言えるだろう。

	昨年度	今年度
公開された科目数	88科目	85科目
参観者のいた科目数	47科目	36科目
公開された科目数に対する参観者のいた科目数の割合	約53%	約42%
参観者数	63名	47名
推薦授業の参観者数		14名
参観者総数に対する推薦授業の参観者数の割合		約30%

しかし、上の表より、昨年度と比較すると、今年度は「参観者のいた科目数」、「公開された科目数に対する参観者のいた科目数の割合」、「参観者数」とともに減少していることが分かる。推薦授業にはある程度参観者が集まったものの全体の参観者数を増やすという目標は達成できなかった。

全教員による授業公開・授業参観が始まって3年目の今年、参観者の増加を目的にFD委員会では推薦授業の選定という新しい試みを行ったが、

参観者数は減少し、参観者のいない科目数は増加してしまっ。今年度の授業公開を企画・実行した者として深く反省している。このままでは、授業公開そのものが形骸化していく可能性があるので、(1)や(2)でも述べたように現行制度の改善策を今後検討していく必要があるであろう。

なお、今年度も他学部からの参観者はいなかった。

教育学部FD活動報告

平成20年度の教育改善に向けての教育改善委員会の活動報告

第1節 平成20年度の主な活動

平成20年度の教育学部教育改善委員会（FD委員会）の委員の構成及び年間の活動内容について簡単に報告する。平成20年度は以下のメンバーで委員会を構成した。

教育改善委員会委員	大野 克彦（生涯教育系）
（50音順）	片岡 美華（教育系）
	北 廣男
	（委員長、全学FD委員）
	黒光 貴峰（理系）
	瀬戸 房子（教務委員会委員）
	種村 完司
	（文系、自己評価委員会委員）
	寺床 勝也
	（大学院教育学研究科運営委員会委員）
	藤田 勉（実技系）

教育改善委員会は毎月1回開催され、教育学部及び大学院教育学研究科の教育改善のための活動を行った。主な活動内容は次の通りである。

《平成20年度前期の活動内容》

1. 授業公開及び教員相互の授業参観を実施した。
（平成20年5月21日(水)～6月4日(水)）
2. 学生の教育改善委員会委員と教員の教育改善委員会委員の担当者との意見交換を毎週火曜日の昼休みに行った。
3. 平成19年度に行った「授業分析・改善報告書」の第5項目（教員が授業環境に望むこと）の集約結果を5月の教育学部教授会において報告を行い、改善に向けての予算措置を依頼した。第1項目から第4項目までは7月の教授会で報告を行った。尚、第1項目から第4項目の内容は以下の通りである。
 - 第1項目：授業運営にあたって、日頃から心がけていること
 - 第2項目：昨年度と比較して、授業を改善した具体例
 - 第3項目：授業を参観して参考になった授業方法

第4項目：自分の授業を分析して、今後改善が必要であると感じた点や改善のための方策

《平成20年度後期の活動内容》

4. 学部学生による授業中間アンケートを実施した。
（平成20年11月25日(火)～平成20年12月9日(火)）
5. 教育学研究科の大学院生による授業アンケートを実施した。
（平成20年11月19日(水)～平成20年12月2日(火)）
6. 教育学研究科の授業公開を行った。（主としてゼミ室の公開）
（平成20年12月初旬～平成20年1月中旬）
7. 学生の教育改善実行委員会主催のバレーボール大会（わっぜ仲良くなろうバレーボール大会）を実施した。（平成20年10月19日(日)）13チーム100名以上の学生が参加した。
8. 研修会、シンポジウム、ワークショップへの教員の派遣をした。
 - ・福岡教育大学FDフォーラム「大学改革とFD」（平成20年10月2日(木)）に教育改善委員会委員1名が参加した。
 - ・山口大学教育センターを2名の教育改善委員が訪問し、山口大学のFDの取組について学び、研修を積んだ。
 - ・「教養セミナー」（鹿児島大学FD委員会主催）（平成20年11月8日(土)）に教育学部から5名の教員が参加した。
 - ・「新任教員FD研修会」（鹿児島大学FD委員会主催）（平成20年11月18日(火)）に教育学部の5名の新任教員が参加した。
 - ・「教育（FD）講演会」（鹿児島大学FD委員会主催）（平成20年12月19日(金)）に教育学部の教員15名、職員2名が参加した。
9. 第4回シンポジウム「学生と教員が求める教育学部とは」を開催した。
（平成21年1月28日(水)）
10. 第3回シンポジウム「学生と教員が求める教育学部とは」において、学生から出された要望

に対する、教育学部の回答をまとめて公開した（1月28日(水)のシンポジウムで学生に開示した）。（自己評価報告書〈教育分野〉（2008）を参照）。

11. FD講演会を実施した

講演題目：「卒論でつまずくこどもたち」

－発達の偏りの視点から－

講師：鹿児島大学保健管理センター所長
森岡 洋史 教授

平成21年3月9日(月)に実施した。

12. 教育改善委員会のホームページの制作。（現在作成中）

13. 平成20年度の教育改善委員会報告書を作成した。

第2節 平成20年度の活動の詳細について

この節では、前節で述べた活動内容の主なものについて詳細に説明する。以下で記述されている内容は、「平成20年度鹿児島大学教育学部・大学院教育学研究科教育改善委員会報告書」（以下教育改善委員会報告書と呼ぶ）の一部を抜粋してまとめたものである。

【1】授業公開及び教員相互の授業参観の実施報告

1. 授業公開の実施計画について

平成20年度の教育学部授業公開を、以下のよう
な手順で実施した。

（1）授業公開の目的と枠組み

平成20年度は昨年度と異なり、前期に授業公開を実施した。教育学部所属の専任教員全員が担当授業科目を一つ以上公開し、同時に、全教員が一つ以上の授業を参観するというこ
とを基本的な枠組みとした。

（2）授業公開科目調査

平成20年5月21日(水)から平成20年6月4日(水)まで、授業公開の科目調査を行った。調査方法としては、各専修の世話人を通じて専修ごとに各教員の授業公開科目を取りまとめ、教育改善委員会で集約した。

調査内容は、①授業公開科目（教育学部専任教員一人一科目指定）、②授業公開実施予定日・時限（授業実施予定日のうち一日以上を指定、複数回の指定も可）、③授業教室、

④授業参観受け入れ可能人数（特に指定がある場合）の四項目であった。なお今回は、今後の参考資料として、学生実行委員による授業参観の受け入れの可否を調査する項目も設けた。

（3）授業公開科目一覧と報告書書式の提示

授業公開科目調査表を集約し、教育学部全教員に授業公開科目一覧表（専修別・日別）と授業参観報告書の書式を配布するとともに、授業公開の実施要領を提示した。授業参観をした教員は授業参観報告書を提出することを原則とし、教育改善委員会で集約したのち、授業改善のための資料として個々の教員へフィードバックした。また、授業公開科目一覧表は教育学部だけではなく、全学FD委員会を通じて鹿児島大学の全学部に公開し、授業参観を受け入れる体制を整えた。

（4）授業公開の実施

平成20年6月23日(月)から平成20年7月11日(金)までの3週間を授業公開期間とし、この期間中に各教員に授業公開及び授業参観を実施してもらった。

（5）「授業参観報告書」の提出

授業を参観した教員は平成20年8月1日(金)までに「授業参観報告書」を提出し、これを教育改善委員会が集約した。

（6）授業公開のまとめ

提出された授業参観報告書をもとに授業参観者数等を集計し、平成20年度教育学部授業公開のまとめを行った。詳細については教育改善報告書を参照のこと。

2. 授業公開の実施状況

（1）授業公開科目数

公開された授業科目数は93、複数日公開された授業を含めた総コマ数は116であった。全専任教員94名の99%（前回は96%）にあたる93名が授業を公開した。

（2）授業参観者数

授業参観報告書の提出は60件（昨年度54件）、ただし、複数の授業を参観し複数枚の報告書を提出した教員もいたため、実際に授業参観を行った教員の実数は59名（昨年度39名）であった。この数は全専任教員数の約

63%にあたる。

3. 「授業参観報告書」の記述より

授業参観報告書における記述を見ると、教育学部の教員が真摯な姿勢で授業参観に臨み、教育改善へ向けて熱心に取り組んでいる様子が窺える。ここでは、授業改善報告書に記述された内容を、授業全体への感想等及び参考になった授業方法等という二点に大きく分け、一部抜粋して紹介する（紙幅の都合上、表現を改めたところがある。また、個人名が特定できるような内容については載せていない）。

【授業全体への感想等の一部】

- パワーポイントやプロジェクターを使用し、わかりやすいスライドを見せながら丁寧な説明をしていた。
- 学生が議論をリードする学生主体の授業であった。教員は、学生たちだけでは分からない場合に適切な助言を与えていた。
- 質問や宿題へのフィードバックが丁寧になされていた。
- 前回までの内容との連続性・系統性が窺がえる授業展開がなされていた。
- 学生が漫然と聞き流している態度や中途退席するのが気になった。

【参考になった授業方法等の一部】

- 次回の宿題が講義の途中で出され、大変新鮮に感じられた。途中で伝えることでその後の学習活動に目的意識が付加され、学生の思考に深みが増す効果があるのではないかと気づいた。自分の授業でも取り入れたい。
- 学生が取り組んだ課題について、一方的に添削し指導するのではなく、学生の考え・疑問・悩んでいる点などをよく話させた上で、それを尊重しながら理論的な間違いを指摘している点が参考になった。
- 当日の学習目標が配布資料に書かれていて、きちんとした計画の下で授業運営されており、自分の授業を見直す上で参考になった。
- 学期途中にこれまでの講義の復習を行うのは、学生の理解を深めるのに有意義であると思うので導入してみたい。

4. 授業公開のまとめ

授業を公開した教員の割合は、昨年度の96%を上回る99%で、授業公開の目的や意義に対して共通の理解が得られるようになったと言えよう。また、授業参観者数について見てみると、全専任教員数の約63%にあたる60枚の授業参観報告書を回収することができた。昨年度の授業参観者数の割合が39%であったことを考慮すると、かなり高い伸びを示しており、授業参観に関しても授業改善への取り組みに対する意識の向上が見て取れる。

教育改善委員会も、教員個々の授業改善への取り組みが潤滑に行われるような環境を整備し、授業改善による具体的な教育的効果を提示する方策を、試行錯誤を繰り返しながら探求し続けるよう努めていかなければならないだろう。

【2】平成20年度教育学部学生による授業アンケート結果分析

1. 授業アンケートの趣旨

授業アンケートは、教員の授業改善に役立つ情報を提供する内容でなければならない。そのためにも効果的かつすみやかにフィードバックされる必要がある。これまでの授業アンケートのあり方では、かかるフィードバック機能を十分に果たせたか疑問が残る。

本年度は、従来の授業アンケートの実施時期を早め、授業改善のための情報提供をすみやかに行うことで教員個人への改善点を明らかにし、効果的に運用する目的で行われた。

2. アンケートの実施方法

平成20年度後期の教育学部学生による授業アンケートを以下の手順で実施した。

（1）授業アンケート実施科目調査

（平成20年11月4日～11月10日）

教育改善委員会より、各専修世話人に依頼し、授業アンケートを実施する科目を各教員に対して調査し、集約した。

（2）授業アンケート用紙配布

（平成20年11月19日）

授業アンケート実施科目調査の結果をもとに、各教員に対して、調査票を配布した。

（3）授業アンケート実施

（平成20年11月25日～12月9日）

各教員にアンケート調査を実施してもらっ

た。なお、回収した調査票は封筒に入れ、教育改善委員に返送する形で集約した。

(4) 授業アンケート回答締め切り

(平成20年12月10日)

12月10日を調査票回収の期限として指定した。

(5) 授業アンケート結果集計・集計結果の返送

(平成20年12月11日～12月26日)

各教員から回収された調査票を集計し、全体的な傾向を分析した。集計結果を年明けの授業の後半に役立ててもらうため、迅速な集計作業を行い、12月26日までに各教員への返送を終了させた。

3. 質問項目

各質問項目に対して選択肢1から選択肢3までの3段階あるいは選択肢1から選択肢4までの4段階の評価レベルを用意し、その中から該当すると思う程度の番号を黒くぬりつぶすマークシート方式を実施した。設定した質問項目は、「あなた自身について」(設問1から設問6までの6問)、「授業について」(設問7から設問12までの6問)、「教員について」(設問13から設問16までの4問)という3つのカテゴリと「その他」(授業に対する感想や要望を自由に記入してもらう)として自由記述欄を1つ設け、合計17項目であった。以下に、それぞれの質問項目を挙げる。

あなた自身について

設問1) この授業を受講するにあたって、シラバスを確認しましたか。

設問2) あなたにとって、この授業の難易度はどの程度ですか。

設問3) この授業に対して、予習・復習を行っていますか。

設問4) あなたのこの授業に対する準備(復習を含む)は、授業の内容を理解するために、十分だと思いますか。

設問5) この授業を何回欠席しましたか。

設問6) この授業にオフィスアワーが設定されているのを知っていますか。

授業について

設問7) 授業の内容は、シラバスの内容に沿ったものですか。

設問8) 授業の内容は、授業科目名にふさわしい

ものですか。

設問9) 授業の中で、教員の発問や学生の発言はどの程度活発に行われていますか。

設問10) 授業における資料(板書、OHP、配布資料等)の提示は適切ですか。

設問11) あなたは、この授業の内容をどの程度理解できていますか。

設問12) あなたは、この授業に満足していますか。

教員について

設問13) 教員の話し方は明瞭で聞き取りやすいですか。

設問14) 授業は時間通りに行われていますか。

設問15) 授業に対する教員の熱意が感じられますか。

設問16) オフィスアワー等、授業に対する質問へていねいに対応していますか。

その他

*この授業に対して、感想・要望などがあれば記入してください。

4. 調査実数

授業アンケート実施科目調査によりアンケートの実施に同意して頂いた授業数は92授業、実際に授業アンケートを実施し、教育改善委員会で回収できた数は、66授業分であった。この結果、授業アンケートの実施回収率は71.2%であった。

5. データの分析

(1) 各質問項目へどのように回答しているか?

表1に授業アンケートによって得られたデータの平均値と得点分布を示した。各質問項目への回答は、設問1と設問6が選択肢1から選択肢3までの3段階、それ以外は選択肢1から選択肢4までの4段階レベルで評価された。選択肢1と選択肢2については低い評価あるいは否定的な評価となる表現とし、選択肢3と選択肢4については高い評価あるいは肯定的な評価となる表現とした(授業の難易度を尋ねた設問2については、選択肢1が「易しい」、選択肢2が「どちらかといえば易しい」、選択肢3が「どちらかといえば難しい」、選択肢4が「難しい」とした)。

表1. 基本統計量

設問	項目	平均値	選択肢1	選択肢2	選択肢3	選択肢4	有効 回答数	未記入 回答数
			回答数	回答数	回答数	回答数		
1	この授業を受講するにあたって、シラバスを確認しましたか。	1.63	770	941	104	-	1815	2
			42.4	51.8	5.7	-		
2	あなたにとって、この授業の難易度はどの程度ですか。	2.77	64	600	836	314	1814	3
			3.5	33.0	46.0	17.3		
3	この授業に対して、予習・復習を行っていますか。	1.88	525	1014	236	34	1809	8
			28.9	55.8	13.0	1.9		
4	あなたのこの授業に対する準備（復習を含む）は、授業の内容を理解するために、十分だと思いますか。	2.14	373	866	501	65	1805	12
			20.5	47.7	27.6	3.6		
5	この授業を何回欠席しましたか。	1.47	1166	466	147	33	1812	5
			64.2	25.6	8.1	1.8		
6	この授業にオフィスアワーが設定されているのを知っていますか。	1.55	863	890	57	-	1810	7
			47.5	49.0	3.1	-		
7	授業の内容は、シラバスの内容に沿ったものですか。	3.52	13	44	702	956	1715	102
			0.7	2.4	38.6	52.6		
8	授業の内容は、授業科目名にふさわしいものですか。	3.68	7	50	452	1303	1812	5
			0.4	2.8	24.9	71.7		
9	授業の中で、教員の発問や学生の発言はどの程度活発に行われていますか。	2.78	92	569	785	360	1806	11
			5.1	31.3	43.2	19.8		
10	授業における資料（板書、OHP、配布資料等）の提示は適切ですか。	3.25	24	124	1029	630	1807	10
			1.3	6.8	56.6	34.7		
11	あなたは、この授業の内容をどの程度理解できていますか。	2.81	57	453	1087	220	1817	0
			3.1	24.9	59.8	12.1		
12	あなたは、この授業に満足していますか。	3.06	44	258	1056	452	1810	7
			2.4	14.2	58.1	24.9		
13	教員の話し方は明瞭で聞き取りやすいですか。	3.15	56	261	853	642	1812	5
			3.1	14.4	46.9	35.3		
14	授業は時間通りに行われていますか。	3.68	16	53	433	1309	1811	6
			0.9	2.9	23.8	72.0		
15	授業に対する教員の熱意が感じられますか。	3.38	5	80	940	786	1811	6
			0.3	4.4	51.7	43.3		
16	オフィスアワー等、授業に対する質問へいねいに対応していますか。	3.17	23	104	1060	433	1620	197
			1.3	5.7	58.3	23.8		

本年度は、アンケートの結果を授業の後半に役立ててもらおうという意味で授業の中間にアンケートを実施したが、授業の最後にアンケートを実施した昨年度とほぼ同様の結果が示された。いくつかの質問項目は、昨年度に比べ小数点以下のレベルで違いが見られた（なお、統計的な検定は行っていない）が、低い評価あるいは否定的な評価が高い評価あるいは肯定的な評価になる、もしくは、その逆になるようなことはなかった。

本年度と昨年度では、アンケートを実施した教員並びに授業科目がことなるため結論付けることはできないが、もし、授業の中間と授業の最後の授業評価が同じならば、授業の中間で学生による授業評価はある程度決まっている可能性が考えられる。したがって、授業の中間でアンケートを実

施し、その結果をもとに授業の後半に改善を試みてもらおうという意味で行われた本年度の授業アンケートは授業改善への有効なアプローチのひとつとして考えても良いかもしれない。

- (2) 各質問項目の間では回答の様子がどのように関係するのか？
- (3) 各質問項目はどのようにまとまるのか？
- (4) 「授業における教員の行動」及び「授業の内容に対する理解度」と履修人数の関係

などに関しても詳細に分析を行った。詳しくは「教育学部教育改善報告書」を参照していただきたい。

6. アンケート調査を振り返って

昨年度までは授業の最後にアンケートを実施していたが、本年度は授業の後半にアンケートの結果を役立ててもらうため、授業の中間に実施した。

さらに、本年度は、単にデータを集計するのみならず、学生の質問項目に対する回答傾向を明らかにした。その結果、学生は「授業における教員の行動」と「授業の内容に対する理解度」という2つの観点から、授業アンケートを回答していることが明らかになった。これらのことからすると、「授業における教員の行動」を改善するためには、各教員による指導法の工夫などの試みが必要であると言えるだろう。

しかしながら、「授業の内容に対する理解度」のグループの中に、「あなたはこの授業に対する準備（復習も含む）は、授業の内容を理解するために、十分だと思いますか？」という項目が含まれていることからすれば、学生も授業の内容を理解するための準備（例えば、予習・復習をする、分からないところは遠慮をせず教員に質問するなど）をすることが授業改善に必要なようになってくると考えられる。すなわち、授業をより良いものにしていくための要因には、教員の指導法のみならず、学生の取り組みも含まれると言えるだろう。

【3】教育学研究科の大学院生による授業アンケート実施報告

1. はじめに

昨年平成19年度（2007年度）の授業アンケートの目的は、学部との比較を行うため、学部と同じアンケートフォーマットを用いて実施された。しかしながら、授業改善に役立つ情報を入手しがたいことが明らかとなった。その理由は、アンケート集計の結果から、ほとんどの質問項目に対して「大変よい」または「よい」に相当する回答が全体の9割を占め、具体的なニーズを明らかにすることができなかつたためである。そこでこの反省を踏まえアンケート手法の議論を重ねてきた。

はじめに検討したことは、研究科の「授業」の意味である。本研究科の授業は少人数教育が基本的なスタイルであり、学部の授業アンケート法では改善資料を得ることは難しいことが確認された。さらに大学院生にとっての授業は、学部の基礎の上に位置づけられるとともに、自らの研究に

役立つか否かを軸とした視点が盛り込まれるべきだと考えられ、大学院における「授業」の解釈を「大学院生の研究環境（授業も含む）」、「指導教員の支援や熱意（授業も含む）」と拡大解釈し、これに相当するアンケートを実施することで、大学院生のもつ授業に対する満足度や要望を探ることが可能ではないかと導き出された。

そこで本年度の授業アンケート調査では、選択肢を除外し自由記述欄を設け、大学院生からの要望を問うことで教育研究環境の改善資料を得る目的で実施されたものである。

2. アンケートの実施方法について

平成20年度後期の教育学研究科大学院生による授業アンケートを以下の手順で実施した。

(1) 調査時期 2008年11月19日（アンケート配布開始）～12月2日（回収締切）。

(2) 対象 教育学研究科全学生を対象。（1年生46名、2年生40名、計86名。2008年11月4日現在。）

(3) 手法 アンケート用紙にて自由記述アンケートとした。

(4) 配布方法 教育改善委員により、各コース・専修ごとに必要部数を送付（11月18日）。

各コース・専修の研究科運営委員から院生へ配布（11月19日～）。

(5) 回収方法 アンケート回答後、院生は大学院系のポストへ直接提出（12月2日）。

(6) 集計方法 2008年内に集計および分析を行った。

3. アンケートの質問項目について

質問項目は大きく4つで、①授業内容、②研究環境、③教員の指導方法、および④その他とした。各質問項目では、満足度または改善すべき要望について自由記述とした。なお、匿名性を高めることでより具体的な要望を聞き出せるよう配慮した。ただし、コース・専修名は記入させず、学年のみを明記させた。

4. 大学院生による授業アンケートの結果について

大学院1年生から13名、2年生から14名の計27名から回答を得た。回収率は全体の31%とふるわなかったものの、以下、寄せられたアンケートから意見を集約する。

(1) 大学院の授業について満足していますか？

1年生、2年生ともに「満足する」とした回答が大多数であった。

1年生からは、「もっと込み合った話をしてくれると良い、学部よりも深い内容なのでやりがいがある、学部の授業とは異なり意見交換や深い内容を学習できる」といった意見がだされ、大学院の授業内容にほぼ満足であった。ただ、「シラバスと内容が異なることがあるので正確にして欲しい、教授者の解説が不適切で非常に理解しがたい授業も残念ながらある」とする意見も寄せられた。

2年生からは、回答者全員より「満足」「特になし」という意見が寄せられた。

(2) 現在の研究環境について満足していますか？

1年生13名のうち12名は「満足・おおむね満足」とした。その具体的な評価は、「研究するには十分な環境である、PCが充実している」となっている。その一方で、「研究個室があれば充実してよい」「複数人数で利用するにはスペースが問題」とする意見もあった。その他の要望として「コピーを自由に使えば助かる、高い学費を払っているので制限つきでもかまわないのでコピーを自由にしてほしい(2名)」、「研究室の資料が古い、辞書類の充実を望む(1名)」の意見も寄せられた。

2年生からは14人中6人から「満足・おおむね満足」の回答を得た。残りの8名から「実験環境・設備備品等の整備の要求(2名)」、「資料・雑誌の充実(2名)」、「コピーを自由に使いたい(1名)」、「冬場の環境(特に暖房設備の充実)(2名)」があげられた。「院生用の研究室がない(1名)」、「図書館の開館日・時間の延長の希望(1名)」などいくつか具体的な改善の要望も寄せられた。

(3) 指導教員の指導について満足していますか？

1年生はすべて「満足」と答えた。2年生も「満足」であった。ただ、「もう少しさまざまな情報を知らせてほしい(1名)」の要

望もだされた。

(4) その他の要望

1年生の2名から「資料・図書の充実」の要望があげられた。

2年生の1名から「水道の蛇口を交換してほしい」の要望があげられた。

多くは「特になし」という回答であった。

5. 総括と今後の課題

本年度の教育学研究科の授業アンケートは、「研究科の『授業』の意味」について、授業も含めた研究を軸とした教育環境の改善と広く解釈し、アンケート調査を実施、収集した。授業や研究室等の環境について大学院生の要望を問うたものであった。

結果を総括すると、おおむね大学院生の満足度は高いものといえた。

1)「授業」については、ほとんどが「満足した」回答であった。ただ、シラバスと異なる点が指摘されるなど、教員側にシラバスとの整合性を確認する責任が追及された。

2)「研究環境」については、ほぼ「満足した」回答であったが、いくつか検討しておかなければならない事項が2つ明らかとなった。ひとつは研究室のスペースの確保であった。特に学年があがるにつれて、研究室の環境改善について要望が高くなる傾向がうかがい知れ、研究室の満足度に格差がみられた。もうひとつは、研究上の支援の要望であり、具体的には、コピー機の使用、専門資料や図書の充実があげられた。これらの要望を踏まえ、各研究室の実態を各教員が再度把握することが望まれる。

3)「指導教員の指導」については、大学院生全員が「満足」の回答となり、日頃の取り組みが評価されたといえよう。

【4】平成20年度「教育学研究科」授業公開について

1. はじめに

今年度は前章で述べた授業アンケートと同じ構想にもとづき、「授業公開」を拡大解釈して、「大学院生の教育・研究環境の公開」を行ってみたいかどうかという議論がなされた。公開期間を定め、その期間、教員(あるいは大学院生)が、研究室

訪問を行い、良い点（学びあう点）や改善点を情報交換しあう相互交流するスタイルの実現に向けて検討を重ねてきた。

以上の原案をもとに物理的なスケジュールを組み立て、平成20年度後期に「研究室公開」を実施した。その目的は、大学院生が日頃実践している教育研究環境（主としてゼミ室）を公開し、互いに見学および意見交換するなかで、大学院生ならびに各研究室のかかえる課題や要望について意見を集約し、よりよい教育研究環境となるべく改善資料を得る目的で行われるものとした。

2. 授業公開の実施方法

(1) 公開時期 2008年12月初旬～2009年1月中旬旬（各コース・専修・研究室の希望日時に応じる）。

(2) 対象 教育学部全教員ならびに院生。

(3) 事前調査 教育改善委員は、事前に各コース・専修の研究科運営委員宛てに「事前アンケート用紙」にてゼミ室の有無・所在・公開の可否・公開の希望日時について調査を行い（11月18日～11月25日）、「公開リスト」を作成し、その結果を教員あてメールで配信する（12月1日）。同時に、「報告シート」も配信する。

(4) 授業公開 教員は「公開リスト」をもとに相手方へメール等で事前の承諾を得る。

このとき大学院生の参加も認めることとし事前に人数を知らせる。

(5) 報告 教員は、授業公開を参観した後は、「報告シート」に記述し、メールでの返信、もしくは印刷物での提出を教育改善委員までに提出する。

(6) 集計 1月下旬までに「報告用紙」の集計および分析。

3. 研究室公開リストの結果

「事前アンケート」の結果、学校教育専攻の3コースから7つ、教科教育学専攻の9専修より14の研究室から公開希望の提出がなされた。

4. 教育学研究科「研究室公開」の結果について

今回は試行的に実施したところ、実際に参観し報告シートで回答された数はわずか5件と少ない結果となった。慌ただしい年末時期であったこと、公開日時が限定されていたことも一因といえる。研究室公開の意図が十分理解されていなかった点も指摘された。大学院の授業公開の方法についてさらに次年度で検討することが求められる。

本年度は少ないながらも貴重な示唆に富む意見が寄せられたので以下に示す。なお以下の本文中の（ ）は意味が通じるように加筆してある。

(1) 取り入れたい点

「大学院生の研究室運営に対する自立した姿勢」

「学部生と大学院生の共通ゼミは、よい相互作用をうみだしていること。また大学院生自身に自覚されている点が素晴らしい」

「実際に開発した教材を現場の教員にモニターし、その結果をフィードバックする実践的取り組みは学生と現場の教員をつなげる大学教員の調整作用が大切」

「(授業での) 教員と大学院生との質疑応答が印象的」

「(授業での) 大学院生の自由でおおらかな発言に対して、教員がわかりやすく回答し説明していた」

「意見が述べやすい雰囲気づくり」

「権威主義的ではない教員の態度」

「文献検索の学習指導方法」

「学会誌等の効果的な使用法とキーワード検索の重要性を再認識」

(2) 気づいた点

「大学院の授業は、教員と大学院生との関係が学部学生と比べて良好・親密であることから、授業中の意見交換も容易であり、かつ有意義なものが多いことを改めて気づかされた」

「元々教員の部屋であったものを、演習室に改善し使いやすい環境づくりをしている」

「院生が利用できる必要最小限の蔵書をそろえてある」

「教育学研究科（と一言でいっても）の研究室も画一的なものではなく、教授・学習活動のかたちには専門領域の固有性が作用して

いることを改めて気づかされた」
「研究室の書架の効果的運用方法」
「共通利用のパソコン使用のルール」
「研究室ゼミの過去資料の整理」
「研究室の運用を大学院生が自覚的に取り組んでいる（取り組むよう指導されている）」

(3) 改善すべき点

見学先の研究室に対して改善すべき点は「特になし」という回答がすべてであった。

ただ、他の研究室を知ることがきっかけで以下のような回答に転化している。

たとえば、

「他の授業や研究室を見学することは、自らの振り返りに有益」

「自分の研究室の雰囲気づくりも改めて見直すきっかけとなった」

「研究室の枠を超えた大学院生同士の交流はあまりないことを改めて認識した」

「同じ教育学を専攻している大学院生にとってさまざまな視点から自らの研究テーマを検討、成果を共有できる機会があればさらによりよい効果を生むと思う」

5. 総括

今年度の授業公開は「研究室公開」の形で進められたが、上記の意見に示されるとおり、相互の研究室交流には意義深いものが認められた。

今後の大学院の授業公開を検討する場合、研究室公開月間（もしくは週間）を設けることはひとつの方策ではある。ただ日頃から教員間のみならず大学院生同士の交流をすすめていくことも肝要といえた。「院生会（仮称）」などを組織し月一恒例の座談会（茶話会）等を開催するなど、大学院生の相互交流の仕組みをつくることも教育研究上効果的と思われる。今回の調査の課題は「教員個人を対象」としたのではないために、教員個人の具体的な課題の掘り下げはできなかったことである。次年度は、本調査結果を踏まえ、授業公開もしくは研究室公開に活用し、さらによりよい教育改善につながる方策について検討することを望む。

【5】「学生と教員が求める教育学部とは」シンポジウムに向けての取組

教育改善は教員と学生がそれぞれの目指す目標を確認する中で進められるべきで、どのような改善が必要かを認識することが重要である。教育改善のための学生実行委員会が設立されて今年度は2年目となる。学生の委員会は学生の間で自主的に継承された組織であり、教育学部の学生の意見を代表する機関である。

1. 教育改善委員会学生実行委員会の活動について

(1) 学生実行委員会について

昨年度、立ち上げた教育委員会学生実行委員会の活動をより充実したものにするために、今年度は、3年生を中心に各専修から1名ないし2名を選出し、委員の編成を行った。

(2) 学生実行委員会活動報告

学生実行委員の活動として、昨年度はシンポジウムの開催に向けての活動が主であったが、今年度は、シンポジウムに限らず、1年間を通して多くの活動および議論を行った。主な活動内容は以下の通りである。

2. 教育改善委員会学生実行委員会「わっぜ仲良くなろう!!!バレーボール大会」について

(1) 開催の経緯

教育改善委員会学生実行委員会（以下、学生実行委員会と略す）では、①学生実行委員の活動を知ってもらう、②学生同士絆を深める、③1月開催予定のシンポジウムをアピールする、という目的でスポーツ大会を企画した。学生実行委員会では、4月から教育学部の改善のために話し合い等を行ってきたが、まだその存在や活動を知らない学生も多い。シンポジウムの開催のためにも、まずは、教育改善委員会および学生実行委員の存在、活動を知ってもらうことが必要であると感じた。また、将来、教員を目指す教育学部学生には、コミュニケーション力が求められる。コミュニケーション力は人と人とのつながりによって育まれるが、大学生活では、同学年、専修内のつながりは強いが、他専修との交流が少ない。以上の点から、学生実行委員会で

は、学生が参加しやすく、委員会の活動の周知もでき他専修と交流ができるような機会を設けるため、スポーツ大会を企画し開催した。

(2) 概要

学生実行委員会「わっぜ仲良くなろう!!!バレーボール大会」についての概要は、以下の通りである。当日は、各専修から14チーム100名近くの参加者があった。今回のバレーボール大会は、初めて実施するため、試験的に参加者を3年生のみ対象として行った。

日 時 10月19日(日)
 集 合 9:00
 開 会 式 9:10
 試合開始 9:30
 閉 会 式 17:00
 場 所 鹿児島大学教育学部構内 第二体育館

3. 「学生と教員が求める教育学部とは」第4回シンポジウムについて

教育改善委員会では、昨年度に引き続き、「学生と教員が求める教育学部とは」というテーマでシンポジウムを開催した。

(1) 事前アンケートについて

シンポジウムを学生中心のものにするため、事前に実際に大学生活を送っている学生が教育学部に対してどのようなことを考えているのか、アンケート調査を行い、それらをまとめた上で、内容、進行等を考えることにした。また、昨年度、実施したシンポジウムで、改善点として出された意見が、改善されたかどうか意見を求めた。事前調査の概要および結果は、以下の通りである。

調査対象：鹿児島大学教育学部所属の学生
 調査項目：「環境」、「カリキュラム（教育課程など）」、「講義」、「その他」 4項目
 ①良い点、②昨年と比べて改善された点、③改善してほしい点、3つの視点
 調査期間：2008年12月から2009年1月

項目「環境」について

良い点	昨年と比べて改善された点	改善してほしい点
<ul style="list-style-type: none"> ・緑が多い ・学内が禁煙 ・冷暖房がついている ・キャンパスが他学部と別 ・体育館グラウンドがある ・グラウンドが広い ・体育館が2個ある ・同じ志を持っている人が多くいて、刺激しあえる ・パソコンを使える場所がある ・色々な教室がある ・敷地が広い ・駅から近い ・駐車場がある ・コンビニが近い ・スポーツ大会が多い 	<ul style="list-style-type: none"> ・101号教室の改善 ・学内が禁煙になった ・101号教室の机が新しくなり動かせるようになった ・花が多くなった ・第2講義棟の女子トイレにフックがついた ・教室がきれいになった ・教育実習中に部屋が用意された ・トイレがきれいになった ・駐輪場がきれいになった ・ゴミ捨て場が整理された ・ゴミがあまり落ちていない ・第2講義棟の改修工事が行われた ・第2講義棟の裏の道がコンクリートになり歩きやすくなった ・掲示板がホワイトボードになり見やすくなった 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校を新しくしてほしい ・喫煙場所を作ってほしい ・冷暖房の管理 ・喫煙者のマナー ・科室（自習室）がほしい ・パソコンをいつでも使える場所がほしい ・屋根つきの駐輪場がほしい ・ゴミを整理してほしい ・放置自転車の対応 ・エデュカ前に駐輪場がほしい ・トイレにハンドソープや鏡やセッケンを置いてほしい ・トイレの洋式を増やしてほしい ・テレビ・ビデオを新しく ・グラウンドのトイレの整備 ・使用可能な施設が少ない ・屋上を開放してほしい ・バリアフリーでない

項目「カリキュラム（教育課程）」について

良い点	昨年と比べて改善された点	改善してほしい点
<ul style="list-style-type: none"> ・免許がたくさんとれる ・実習が1回生にあり意識が高まる ・冊子が分かりやすい ・教育学部1回生必修の授業が同じ日にある ・教職基礎研究があって色々と考えられている ・授業が選択できる ・カリキュラムが充実している ・履修期間が長いところ ・パソコンから履修登録できる ・体育の実技が前期、後期に設置されている ・上限30単位まで取れる ・祝日が休みなところ ・自分の専修の免許が取りやすい ・介護体験がある ・教育課程の裏に取得単位が細かく書ける 	<ul style="list-style-type: none"> ・エントリーシートになった ・学校体験が1回生からできる ・1回生から履修できる専門科目が増えた ・実習ノートが少なくなった 	<ul style="list-style-type: none"> ・必修科目などの人数制限をなくしてほしい ・教育課程の説明を分かりやすくしてほしい ・免許に必要な単位の取り方を分かりやすくしてほしい ・前期と後期の始まりを共通教育と合わせてほしい ・必修科目の授業時間が、重ならないようにしてほしい ・副免の取得方法を早い時期から説明してほしい ・副免を取りやすくしてほしい ・隔年開講はやめてほしい ・他学部と休日を合わせてほしい ・留学のしやすいシステムにしてほしい ・教育実習を地元で行けるようにしてほしい ・前期、後期の授業数の差をなくしてほしい ・携帯電話で履修登録ができるようにしてほしい ・シラバスを本にしてほしい ・実践的な授業を増やしてほしい ・1回生から小専科目が取れるものを増やしてほしい

項目「講義」について

良い点	昨年と比べて改善された点	改善してほしい点
<ul style="list-style-type: none"> ・他の専修と仲良くなれる ・単位が取りやすい ・専修ごと専門的に行われている ・専門科目で興味深い内容の講義が多い ・視聴覚機器が充実 ・毎回スライドを使って丁寧に講義してくれる ・オフィスアワーがある ・共通とずれるがテスト勉強がやりやすい ・教員採用試験のことを考えた講座ができた ・小・中学校に体験に行ける ・授業が集中しやすい ・講義が面白い ・文系・理系に限定されず色々な科目が取れる ・学科に関係なく先生が質問に答えてくれる。 ・宿題が少ない ・一部の講義が少人数制でよい ・ビデオを使ってくれる 	<ul style="list-style-type: none"> ・人数制限の科目 ・指導案が手書きからパソコンOKになった ・制限がエントリー式になり、上級生が優先になった ・どの先生方も均等に出席をとるようになった ・休講案内がホワイトボードで見やすくなった 	<ul style="list-style-type: none"> ・講義の休講や補講の連絡を早めに連絡してほしい ・マイクを使って授業をしてほしい ・板書などの字が汚いことがある ・授業評価のアンケートを行ってほしい ・大教室の空調設備 ・時間通りに終わってほしい ・学生のことを考えてほしい ・教員採用試験のことを考えた授業をしてほしい ・ディスカッション方式などの授業を取り入れてほしい ・必要な授業同士の時間が重なる ・休講が多い ・移動時間を考えてほしい ・先生のモチベーションを上げてほしい ・プロジェクターがついてない教室に付けてほしい ・スライドの字が小さい ・集中講義の時期と必須を集中講義にしないでほしい ・講義室の急な変更をなくしてほしい ・講義途中のアンケートをきちんと活かしてほしい ・ビデオなどをつかってわかりやすく説明してほしい

各学部のFD活動報告

項目「その他」について

良い点	昨年と比べて改善された点	改善してほしい点
<ul style="list-style-type: none"> ・休講情報などメールがくる ・専修同士の仲が良い ・学生が優しい ・学生係が優しい ・ボランティアがすごい 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報がメールでくる ・学生係りが親切なところ ・実習中の図書館利用時間が延長されたところ 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員にならない学生への情報提供を充実してほしい ・証明書の機械を土日でも使えるようにしてほしい ・郵便局のATMを設置してほしい ・授業中にメールがくるのをやめてほしい ・パスカードの発行時期を増やしてほしい ・盗難についての対策をとってほしい ・休講情報が遅いときがあるので早めにしてほしい ・特別支援、音楽科の教員を増やしてほしい ・全員買わなければいけないものは配布してほしい（卒論の表紙など） ・掲示板の期限が切れたものははずしてほしい ・先輩たちの卒業後の進路の情報提供をしてほしい ・メールをもっと活用してほしい

(2) 第4回シンポジウム「あなたがきっかけ。一緒に変えよう教育学部」について

(1) 概要

シンポジウムの概要等は、以下の通りである。

日	時	平成21年1月28日(水) 16:30～18:30
場	所	教育学部 第一講義棟 101 教室
パネリスト		藤田 勉先生 日吉 武先生 樋口 晶彦先生
コーディネーター		黒光 貴峰先生 鞍掛 晃さん(学生実行委員委員長)

(2) プログラム

時間	プログラム
16:30	開 会 教育改善委員会委員長；北 廣男先生
16:35	学部長あいさつ 教育学部学部長；河原 尚武先生
16:40	実行委員紹介 学生実行委員委員長
16:45	教育改善委員会学生実行委員会活動報告 学生実行委員
16:55	講 演①「授業アンケートについて」 教育改善委員会委員；藤田 勉先生
17:05	講 演②「学生と教員が求める教育学部とは」 教育学部音楽専修；日吉 武先生
17:20	講 演③「教師この素晴らしき職業に乾杯」 教育学部英語専修；樋口 晶彦先生
17:35	報告 学生実行委員
17:50	ディスカッション
18:20	まとめ 教育改善委員会委員；種村 完司先生
18:25	閉 会

「学生と教員が求める教育学部とは」（あなたがきっかけ。一緒に変えよう教育学部）の当日の内容の詳細については、「教育学部教育改善委員会報告書（平成20年度）」を参照していただきたい。

4. まとめ 学生実行委員会委員の感想

委員 A：委員をさせてもらったこの一年で教育学部に対する思いというものが強くなったと思います。シンポジウムを行ってみて学生の思いを伝えることができたのではと思います。ひとつ気がかりなのは人数を集められなかったことではないかと思います。

委員 B：改善委員をした一年間で大変なこともありましたが、他専修に友達が出来たし、みんなで協力することが出来て本当によかったです。シンポジウムでは教育学部の先生方、学生からの意見が聞けてとてもいい機会になりました。これからもぜひこのような活動を続けていってほしいです。

委員 C：改善委員になって、教育学部をこれまでとは違う視点から見る事が出来ました。沢山の意見を聞いて、それまでは気が付かなかったことを色々な視点から考えました。また、改善点をみんなで議論をするのも楽しかったです。大学生活を楽しくするためには、私たち学生が積極的に活動することが大切なのだと思います。これからも、改善委員を中心に学生みんなで教育学部を盛り上げていければいいなと思います。

総括：学生達は討議の結果、教育学部の改善が大きく前進したことを実感しているようである。学生支援コーナーの充実、カリキュラムの改善、講義室や環境設備の改善等が進んだ。学部長をはじめ関係職員の深い理解があったことも忘れてはならない。教育改善の最大の目標は、安い授業料ですべての学生に大学教育を提供することである。

「学生と教員が求める教育学部とは」第4回シンポジウムの様子



河原教育学部長あいさつ



藤田先生の報告の様子



日吉先生の講演の様子



樋口先生の講演の様子



実行委員からの報告①



実行委員からの報告②



シンポジウムの様子①



シンポジウム参加者の様子②

理学部FD活動報告

本格的に軌道に乗り始めた理学部でのFD活動に関して、今年度はその順調な継続と、FDのための有効データの蓄積をめざし、次の5つの企画を実施した。

- (1) 学生による前期授業アンケート (7月)
- (2) 学生による後期授業アンケート (1月)
- (3) 前期授業公開 (6月)
- (4) 後期授業公開 (12月)
- (5) FD講演会 (3月、理工学研究科および工学部FD委員会との共催)

本報告では、上記(1)～(4)についての概要を記載する。詳細については、「平成20年度理学部FD活動報告書」をご覧ください。

1. 学生による授業アンケートの実施

理学部における授業アンケートの目的は、受講学生の率直な声を担当教員に還元することにより、個々の授業や学科のカリキュラムを、より有益なものへと改善していくことにある。教員評価のための資料としては利用しないことを、初めて授業アンケートを実施した平成13年度に取り決めている。

今年度の授業アンケートは、集中講義、教職専門科目、非常勤講師担当科目を除く全科目を対象に行われた。多数の教員が1回ずつ担当する総合講義方式の授業も、アンケート対象としている。アンケート用紙は、授業ごとに受講者分を担当教員に渡し、授業時間内に記入させた。記入済みアンケートはその場で所定の封筒に入れさせ、それを教員が学生係に持参することにした。

結果の経時的な変化についての分析をおこなうため、アンケート内容は数年間変えないで実施することがFD委員会の中で取り決められているが、意味のないと思われる項目をひとつ削除するとともに、質問文の表現について軽微な修正を加えた。全部で13の質問と1つの自由記述欄のほか、各教員が独自に設定できる質問項目を1つ設定できるようにした。質問内容は、後述のアンケート結果を参照していただきたい。

前期は前年度の方法を踏襲して、選択肢の番号を手書きで指定枠内に書かせたが、読み取りミス

が多いので、後期はマークシート方式に改めた。マークシート方式を採用することにより、アンケート実施の労力は大幅に軽減されたが、自由記述欄の転記、結果の集計作業には、なお多くの労力を要している。

アンケート結果は授業科目ごとに集計し、担当教員に還元した。またアンケート用紙の記名欄をカットしたものをそのまま返却し、自由記述欄を読んでいただいた。担当教員はそれらにもとづいて、「自己分析書」を提出することになっている。また前・後期の授業アンケート結果および担当教員から提出された自己分析書にもとづき、学科単位でも「分析書」を作成し提出した。このアンケート結果は、担当教員の提出した自己分析書とともに、理学部FD委員会で保存するほか、学科ごとにFD委員および学科長のもとで保管して、各学科のカリキュラム改善のための基礎データとして活用できるようにしている。

表1には、今年度の授業アンケートの実施状況を、過去のデータとともに示した。アンケート対象科目の中で実施できなかった科目は前・後期とも9科目(9～10%)であり、延べ受講者数は前期423名(9.7%)、後期366名(8.7%)であった。これは前年度とほぼ同じである。アンケート回収枚数・回収率についても、ほぼ前年度と同レベルであった。授業アンケートの実施は、学期末の行事として定着してきたと言えるだろう。

平成17年度以前のWebでアンケートを行っていた時期と比べて、回収数は50%以上増えているが、履修登録者に対するアンケート回収率は、60%弱のレベルで頭打ちとなっている。その主な理由は、履修登録者のうちのかかなりの部分が、授業アンケートの行われる時期までに途中放棄していて、出席していないためと考えられる。

表1 授業アンケートの実施状況

		18年		19年		20年	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期
アンケート対象科目	科目数	117科目	126科目	91科目	105科目	89科目	100科目
	受講者数1	5028人	5016人	4296人	4291人	4366人	4199人
アンケート実施科目	科目数	93科目	104科目	74科目	94科目	80科目	91科目
	受講者数2	4252人	4307人	3575人	3960人	3943人	3833人
アンケート回収枚数		1995枚	2679枚	2333枚	2369枚	2446枚	2242枚
回収数/受講者数1 (%)		39.7	53.4	54.3	55.2	56	53.4
回収数/受講者数2 (%)		46.9	62.2	65.2	59.8	62	58.5

2 授業アンケートの結果と分析

アンケートの回答に示された数値は、その授業の善し悪しを忠実に反映したものとは言いがたいが、学生とのミスマッチの程度を表す目安としての意味は充分にある。そこで次に、アンケート結果を回答の平均値によって解析してみよう。13個の質問には、1～5の5段階の数字で答えるようになっているが、11、12番以外の質問については、5の回答が最も望ましく、1が最も望ましくない回答である。そこで5は5点、4は4点、3は3点、2は2点、1は1点として加重平均した点数を授業ごとに算出し、その平均値を記載した。ただし、11、12番の質問（授業のレベル、および量）への回答は、3が最も適合していることを表し、5（レベルが高すぎる、量が多すぎる）や1（低すぎる、少なすぎる）が最も不適合であることを表すので、回答が3であった場合を5点、4と2を4点、5と1を3点として平均してある。なお質問5（自習時間）の回答値は、5：3時間以上、4：2～3時間、3：1～2時間、2：30分～1時間、1：30分以下、を表している。このようにして算出した平均点を、授業開講学科別にまとめたものが表2である。

理学部全体としてみたとき、19年度報告書に記載されている前年度の結果と比べて、前期は質問1（シラバスを読んだか）、11（授業レベル）、12（授業分量）、後期は質問1（シラバス）、5（自習時間）、8（授業方法）において、点数で0.2以上の改善が見られた。前・後期とも、前年度と比べて目立って点数が低下した項目はなかったが、その中で質問3（自習態度）に若干の低下が見られた。

質問1については質問の表現を少し変えたことが回答に影響した可能性もあるが、数値は前・後期とも大きく（0.8ポイント以上）改善している。シラバスなどが念入りに作られるようになった成

果のひとつと考えておきたい。

授業のレベル・量に関する質問（質問11、12）については、この表での平均値の計算法（最低でも3となる）のために4.0以上という高い値を示しているが、その中でも昨年度と比べてかなり高く、18年度なみに改善している。これら2つの質問については、レベル・量が適切（回答：3）からはずれるほど評点が低くなるようにして平均値をとっているが、実際には「レベルが低すぎた」「量が少なすぎた」という回答はまれ（2%以下）である。この数値が改善したのは、学生のレベルにあわせて授業のレベル・量を落としたことの表れと見ることができよう。

後期は、質問5（自習時間）の数値に0.3の改善が見られる。回答の平均値2.2～2.3は約60分の自習時間に相当し、学則で期待されている自習時間（講義科目1科目あた180分）と比べれば、はるかに少ない時間にとどまっているが、少しでも改善傾向が定着しているのであれば喜ばしいことである。

開講学科ごとに見ると、総じて数理情報科学科・物理科学科の数値が低く、生命化学科・地球環境科学科の数値が低い傾向が見られる。詳細については、理学部FD活動報告書をご覧ください。

表2には、学部全体の通年の点数について、前年度に対する比も記載してある。一部の質問項目以外は数値が改善されているが、前年度比の平均点の変動は、ほとんどの項目で数パーセント以内である。しかし理学部では平成13年度以降授業アンケートを実施しているので、もう少し長い時間尺度で点数の比較を行ってみた。初期の授業アンケートは内容も方式も現在とは異なっているので、そのまま今年度との比較はできないが、ほとんど同じ質問も多い。表2の最後の欄は、平成15年度アンケート結果を使って、今年度と比較可

能なものだけを取りだして比較した結果である。多くの項目で10%以上の平均点向上が見られることがわかる。積年の教員の努力が形となって現れた結果と見ることができよう。

アンケートにはFD委員会で設定した質問項目への回答だけではなく、自由意見（コメント）を書く欄を設けてある。前後期併せて4689枚のアンケート中の454枚に、何らかの自由記述があった。その自由記述を内容によって大まかに分類したものが表3である。肯定的、否定的、の両面をもつ記述は2重にカウントした。またそもそも分類の難しいものもあるので、この表はあくまでも目安と考えていただきたい。

この欄に授業に対する不満が多く書かれるのは当然であるが、真剣な内容のものが多い。肯定的であれ否定的であれ、授業方法や内容についての具体的な感想や提案が書かれているアンケートは、今後の授業改善のために極めて有用なデータ

である。このような意見を踏まえて次回の授業計画を立てることこそが、その授業を活力あるものにするための重要な作業と言える。

肯定的な意見では、「内容が面白かった」「××についての理解が深まった」「わかりやすかった」という包括的記述が多かったが、板書・質問・レポートなどについての具体的内容に関する意見は、教員にとっても大いに励みになるものである。

一方否定的な意見は、さまざまな方面に及んでいる。板書、スライド、教科書とその使い方、練習問題やレポート類へのサポート方法、レベルの高さなどについての不満が多かった。これらの不満に単純に対応することが、必ずしも授業の改善に直結するとは限らないが、それらが学生と教員との間のミスマッチを表していることは確かである。学生の要望に単純に応ずるだけでなく、そのような不満の生じないようにするための方策を考え、実践することが大切であると言えよう。

表2 授業アンケート結果の評価点平均（上段＝前期、下段＝後期）と過年度比較

番号	質問内容	数理	物理	生化	地環	学部	学部	
							(平成19年度比)	(平成15年度比)
1	シラバス等を読み、問題意識をもってこの授業を履修しましたか？	3.5	3.4	3.6	3.8	3.6	1.34	
		3.6	3.8	3.8	3.8	3.7		
2	この授業の出席状況を教えてください。	3.9	4.0	4.5	4.0	4.1	0.99	
		3.7	3.9	4.3	4.1	4.0		
3	授業の予習・復習をし、宿題などにも積極的に取り組みましたか？	3.6	3.3	3.7	3.4	3.5	0.98	1.30
		3.6	3.5	3.6	3.6	3.6		
4	授業中、真剣に学ぼうと心がけましたか？	3.8	3.7	4.0	4.1	3.9	1.02	1.08
		3.8	3.9	4.0	4.0	3.9		
5	この授業に対しては、授業時間以外に毎週どれほどの自習時間をとりましたか？	2.3	2.1	2.4	2.0	2.2	1.10	1.22
		2.4	2.5	2.3	1.9	2.3		
6	シラバスの内容はわかりやすかったですか？	3.5	3.4	3.6	3.8	3.6	1.03	1.07
		3.6	3.6	3.8	3.8	3.7		
7	授業はシラバスの目的・内容にそって実施されたと思いますか？	3.6	3.6	3.8	4.0	3.8	1.01	1.07
		3.8	3.8	3.9	4.0	3.9		
8	授業方法は興味をわかせる理解を促す上で有用でしたか？	3.4	3.5	3.7	4.0	3.7	1.02	1.13
		3.7	3.7	3.8	3.9	3.8		
9	授業から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか？	3.3	3.4	3.6	3.9	3.6	1.02	1.10
		3.6	3.6	3.8	3.7	3.7		
10	この授業は、学力（知識・技術・思考能力）の増大に役立ちましたか？	3.6	3.8	3.9	4.1	3.8	1.02	1.12
		3.9	3.9	4.1	4.0	3.9		
11	授業内容のレベルはいかがでしたか？	4.2	4.4	4.5	4.5	4.4	1.04	
		4.4	4.4	4.5	4.5	4.4		
12	授業内容の分量はいかがでしたか？	4.4	4.5	4.5	4.6	4.5	1.05	
		4.5	4.6	4.6	4.6	4.6		
13	教員の話し方は聞き取りやすく、説明もわかりやすいと思われましたか？	3.5	3.2	3.7	3.9	3.6	0.99	
		3.6	3.4	3.8	3.9	3.7		
	質問1、6、7（シラバス関係）の平均	3.5	3.5	3.7	3.9	3.6	1.11	
		3.7	3.7	3.9	3.9	3.8		
	質問2～5（学生自己評価）の平均	3.4	3.3	3.6	3.4	3.4	1.01	
		3.4	3.4	3.6	3.4	3.4		
	質問8～13（授業内容）の平均	3.7	3.8	4.0	4.2	3.9	1.02	
		4.0	3.9	4.1	4.1	4.0		
	全体の平均	3.6	3.6	3.8	3.9	3.7	1.03	
		3.7	3.7	3.9	3.8	3.8		

表3 平成20年度授業アンケートにおける自由記述件数(前後期合計)

		アンケート枚数	記入アンケート 枚数に対する比(%)	全回収枚数に 対する比(%)
肯定的な 内容のもの	具体的なキーワード を含むもの	36	7.9	0.8
	包括的な内容のもの	102	22.5	2.2
否定的な 内容のもの	具体的なキーワード を含むもの	230	50.7	4.9
	包括的な内容のもの	30	6.6	0.6
その他		39	8.6	0.8

3. 授業アンケート結果に対する教員の対応

授業アンケートの結果については、授業ごとに各項目についての加重平均点を計算し、全体の平均点とともにまとめたものと、学生名の部分を切り取ったアンケート用紙を教員に返却した。担当教員はそれを見てアンケート結果を分析してもらい、今後の対応を考え、学生係に提出してもらうこととしている。前期はアンケート結果があった80科目の74%にあたる59科目から、後期は91科目の52%にあたる47科目から分析書の提出があった。前期は昨年と比べてかなり向上しているが、これは期間を延長して再三の催促をした結果の数字である。

提出された分析書には、多彩な分析や取り組みが書かれている。次年度の授業で実践しようという具体的な取り組みも、数多く書かれている。反面、教員のもつ教育理念と学生の実情との間のギャップの大きさに途方にくれている教員の姿を垣間見ることできる。

本報告ではその具体的内容は省略するが、理学部FD活動報告書には、目についたものを各学科の授業から数例ずつピックアップしてある。質問1、6、7(シラバス関係)、質問2～5(学生自己評価)、質問8～13(授業内容)に分けて、現状の自己分析と今後の改善策の例として掲載してあるので、ご覧いただきたい。

授業アンケートの結果については、各授業担当教員とは別に学科単位でも、学科ごとのアンケート平均値や、担当教員からの自己分析書について分析を加え、今後の対応をまとめて提出してもらっている。詳しくは、やはり理学部FD活動報告書をご覧いただきたい。

教員から出された自己分析書には、この授業アンケートに対する価値ある意見も多く書かれてい

る。その中にはこの授業アンケートの意義そのものに関する疑問も多く出されている。それらは次の4点に集約できそうである。

- (1)実施・集計の労力に見合う効果があるとは思えない
- (2)毎年やっても結果は同じである
- (3)向学心の少ない学生の責任な意見が表に出すぎる
- (4)無責任な学生による評点の数値が一人歩きして、教員の評価に利用される恐れがある

これらは授業アンケートというものに対する批判として常々語られることであり、過年度の報告書でも指摘されていることである。以下では本アンケートを実施した側からの見解を述べて、授業アンケートのまとめとしたい。

このアンケートの実施手順はほぼマニュアル化されているので、実施すること自体の労力は大きくない。現在多くの労力を要するのは集計作業であるが、マークシート方式で実施するこのアンケートでは、自由記述欄の入力作業を外注化し、読み取りデータの集計作業の手順をキチンとマニュアル化して後任者に伝えるなどの体制を整えれば、労力は大幅に軽減されるはずである。

すでに示した集計結果にも見られるように、学科や学部単位で集計した結果に見られる経時的変化はわずかである。個々の科目の個々の質問項目で見ても、平均点の数値に大きな変化が見られる例はわずかであろう。アンケート実施の第一の目的は、その数値を得ること自体にあるとは言えない。大事なことは、担当授業のアンケート結果に対する自己分析書を書くことによって、教員にとってその授業の在り方を見直す機会が、少なくとも年一回はもたらされるということである。もちろんこのような授業の見直しは授業を行いなが

ら常時行うべきことではあるが、一学期間の授業が終わった時点で必ず見直し、それを文章に書いてみるということには、それ自身重要な意味があると言えるだろう。

アンケートの信頼性への疑問や教員評価への利用の危惧に関して、理学部FD委員会は、アンケート結果に表れる数値とは学生と教員の間 mismatches の程度を表す目安であって、授業の善し悪しを表す尺度ではないという考えにたっている。アンケート結果に表れる数値が低い授業を改善する努力は大切であるが、その数値を上げることを第一義の目標としてはならない。アンケートの数値を上げるために成績評価基準を下げるなどということは、決してあってはならない。従ってこのアンケート結果に示されている数値は、決して教員の評価のために使うべきものではない。理学部では、アンケートの数値を教員評価に使わないことを、当初より取り決めている。

4. 授業公開の実施

前年度に引き続き、今年度も前期、後期の2回に分けて授業公開が行われた。前期は平成20年6月9日(月)から6月20日(金)までの2週間、後期は平成20年12月2日(月)から12月19日(金)までの2週間に渡って実施された。初めて授業公開が行われた平成18年度後期以来、理学部では以下の実施要領に従って、授業公開を行っている。

- (1) 教員全員が、授業公開または授業参観のいずれかに、年間1回以上関わることを原則とする。
- (2) 公開される授業は学科、講座のバランスを考える。(非公開の学科、講座がないようにする)。
- (3) 参観した教員は、講義を担当した教員にレポートを提出し、講義を行った教員はその意見を参考にしながら、学生係にレポートを提出する。

前年度と同様に、参観者からは参観者報告書を提出してもらい、授業担当者はその意見を参考に授業公開報告書を学生係に提出することになっている。公開授業名、日時、授業公開に際して使用した参観者用報告書、授業公開報告書の様式などについては、理学部FD活動報告書を参照していただきたい。

授業公開実施に際して、理学部内へはメールによるアナウンス、また全学に向けては理学部のホームページにも載せ、メールにより全学へのアナウンスもおこなって参観者を募った。表4に示すように、前期は4学科合わせて15の授業が公開対象となり、そのうち9つの講義に参観者があった。延べ28名の教員が参観した。後期は11の授業が公開対象となり、そのうち6つの講義に参加者があり、延べ10名の教員が参観をおこなった。

前後期合計では、26科目の授業公開に対して15の講義に参加者があり、延べ39名の参加者があったことになる。前年度は参観数ゼロの授業が過半を占めたが、今年度は公開授業数を減らす一方、公開される授業ごとに前日に学科内に確認メールを流す、公開期間に先だって参観予定アンケートをとる、などの工夫を重ねることにより、参観者の更なる増加への工夫を行った。その結果、前年度の2倍の参観者を得ることができ、初めて授業公開を行った平成18年度のレベルまで回復した。

報告書に記載されている参観者からのコメントとそれに対する担当教員の反応の中には、表5の例1～5のように、次年度の授業改善に直結しそうなものも数多く見られた。しかし例6～10のように、改善の必要性はわかっている、そのための具体策が簡単には見つからないという悩みが伝わってくる記述も多い。公開された授業の改善への提案だけでなく、その授業のよい点を評価し、それを参観者の自分の授業の改善に取り入れようという気持ちの伝わってくる記述も多い。ここに示した事例以外にも、多くの有意義な例が見られた。詳細は理学部FD活動報告書を参照されたい。

授業公開の時期が昨年度から年2回となり、報告書を見る限り授業改善のために有効に活用されているようである。しかし参観者数は増加しているものの、まだ充分ではない。「教員全員が、授業公開または授業参観のいずれかに、年間1回以上関わる」というルールを達成するには、さらに参加者を20名以上増やす必要がある。各学科のFD委員の積極的な参加の呼びかけはもちろんのこと、あらゆる方策を尽くして参観者の数を増やすことを考えなければならない。

各学部のFD活動報告

表4 授業公開の数

学 科		公開講義数	参観者のあった講義数	延べ参観者数
数 理 情 報	前 期	5	5	16
	後 期	5	2	3
	年 間 合 計	10	7	19
物 理 科 学	前 期	3	2	10
	後 期	2	2	2
	年 間 合 計	5	4	12
生 命 化 学	前 期	3	1	1
	後 期	2	2	5
	年 間 合 計	5	3	6
地 球 環 境	前 期	4	1	1
	後 期	2	0	0
	年 間 合 計	6	1	1
理学部合計	前 期	15	9	28
	後 期	11	6	10
	年 間 合 計	26	15	38

表5 授業公開でのコメントとそれに対する反応例

	コメント	反 応
例1	もう少し色を使って板書した方がよい	ちょうど授業の山場を越えたところで、今回の公開授業であった。そのため、今回の授業は、ここまでで学んだ「骨格の整理」と「その総合的利用」という内容とした。整理ということで、急ぎ足になり、板書に色を付けることまでやらなかったことは反省点と思う。
例2	学生プログラミング作成の進捗が極端に開き、プログラム修正の為に一部の学生に掛かっている間、他の学生に対して暇な時間を作ってしまうようである。授業担当者が定期的に学生の進捗を把握する(TAなど作業補助者からの合図も借りる)必要がある。	進捗の定期的チェックは行っているが、先に進んでいる学生に対しては発展的テーマを課して暇な時間を作らないように心掛けたい(他のwebページを開いて遊んでいる状況を減らしたい)。
例3	実験を早めに見せるとよいかもかもしれない。	実験をするつもりだったが時間的に十分でなかった。全般に少し丁寧になりすぎたかもしれない。
例4	実習では、話し方が速い、キーボード操作が速いため、学生がついてきていないのでは。画面操作についても同様である。教師用画面を操作不慣れな学生にさせたらどうか。	実習を進めるにあたって、ゆっくり話をする、話に間を置く、画面操作をゆっくり行うように、今後心掛けたい。教師用端末を学生にさせるという案については、試行してみたいと思う。
例5	話しが少し聞き取りにくく感じた。計算の説明に入ると早口になる。	授業ではいつも残り時間を気にして、つい早口になったり、学生に問いかけるのをスキップすることがあるのは反省点です。内容を欲張りすぎて過密になっているのかもしれない。
例6	レベルが低すぎて退屈な学生もいるのではないか	受講生が講義前にもっている熱現象の知識は実は少ない。昨年の試験結果を元に今年の授業内容を考えて、さらに最初数回の授業で調整している。従って、レベルが低すぎることはないだろう。寧ろ、授業内容を難しいと感じている学生が相当数いると思う。物理としての骨格を丁寧にやるか、現象を理解する部分に重点をおくかは考えどころと思っている。
例7	教師が一人でしゃべるのではなく、時々、学生にも発表させて、相互に討論させたらどうでしょうか。	すぐにはなかなか難しいと思いますが、将来的には目指したいと思います。現在でも講義中に学生に質問をぶつけることはあります。
例8	使っている数学は、学生はどれくらいわかっているのでしょうか？	数学を理解できている学生とそうでない学生がはっきり分かれているのが実状です。なるべく式の展開・導出がしやすいようにテキストブックにて説明しているのですが、それを自力で追っているかどうか分かれ目のようです。自力で追う気のない学生に学ばせるにはどうすればいいのか…正直言ってどうすればよいかわかりません。
例9	質問を時々投げかけて、講義への関心を促すこともできればとも思ったが、内容が多彩なので話すので一杯だと言う状況は理解できる。	学生に質問を投げかけることを心がけてはいるが、あまりに反応が無いために、時間の無駄なような気がして、あまりしなくなった。
例10	遅刻者がいる、遅刻者が多い。	いつも授業の最後に出席を取る事の結果であることは重々承知しております。かといって純然たる選択授業、いちわるして授業中のランダムな時刻に出席を取るようになれば受講者が減るのは目に見えています。そんな事に腐心・工夫するくらいなら、遅刻者や早退者に「話が聞かれなくて損した」と思わせるような内容の授業なり話術なりにする方向で工夫したいと考えております。

医学部FD活動報告

平成20年度の医学部FD委員会の活動について、医学科部会と保健学科部会に分けて以下に報告する。

平成20年度 医学部FD委員会医学科部会活動報告

平成20年度に医学部FD委員会医学科部会では、以下に記す計2回の「FD講演会」を主催し、また医歯学総合研究科FD委員会主催の「FD講演会（平成21年1月26日、詳細な報告は医歯学総合研究科FD委員会の活動報告参照）」を共催した。さらに、学生による授業評価を実施した。以下にこれらの活動の概略を述べる。

1. FD講演会

(文責 前医学科FD部会部会長 小片 守)

1) 第1回FD講演会

平成21年2月19日午後5時より、鹿児島大学鶴陵会館において、東京大学医学教育国際協力研究センター教授 北村 聖先生を講師として迎え、「日本の臨床教育のめざす方向－共用試験、国家試験、そして・・・」と題して講演会を開催した。

当医学科に於いては、卒前教育をいかに効果的に行い、医師国家試験の合格にいかにつけるかが重要な課題となっている。北村先生は、臨床教育の実情と理想を、東京大学の例も紹介しながら詳細に述べて下さり、併せて基礎教育、大学院教育、生涯教育についても触れて下さった。講演後、活発な質疑応答が行われた。

講演会には、41名の出席者（内訳：医学科32（うち教授8）、保健学科2（うち教授2）、歯学部4、学生3）があり、学生も参加したことは医学科教育の一環としても有意義であったといえる。

当日講演終了後にアンケートを実施し、36名から回答が得られた（回収率87.8%）。その結果は以下のように良好なものであった。

a. 企画に対する回答結果

(1) 講演内容は？

	人数	%
大変良い	25	69.4
良い	10	27.8
普通	1	2.8
やや悪い	0	0.0
悪い	0	0.0
その他	0	0.0
合計	46	100.0

(2) 講演の開催時期は？

	人数	%
大変良い	3	8.3
良い	24	66.7
普通	8	22.2
改善すべき	0	0.0
その他	0	0.0
記載なし	1	2.8
合計	46	100.0

(3) 講演時間は？

	人数	%
長い	3	8.3
やや長い	4	11.1
適切	27	75.0
やや短い	1	2.8
短い	0	0.0
その他	0	0.0
記載なし	1	2.8
合計	46	100.0

(4) 講演の開催場所は？

	人数	%
大変良い	6	16.7
良い	20	55.5
普通	9	25.0
改善すべき	1	2.8
その他	0	0.0
合計	46	100.0

(5) 講演の広報の方法は？

	人数	%
大変良い	1	2.8
良い	12	33.3
普通	17	47.2
改善すべき	6	16.7
その他	0	0.0
合計	46	100.0

b. 講演の感想（自由記載）

- ・わかりやすく現在の医学制度、教育制度の全体像を話して下さいました。大変有意義だと思います。
- ・自分の教育内容、臨床実習に対するスタンスを比較することが出来、今後に役立った。
- ・今後の資にしたいと思います。
- ・どのような医師を育てたいかを明確にし医学教育を受けさせるということはとても根本的で重要な点だと感じました。
- ・自分1人ではなかなか興味があっても調べきれないところを講演いただいたので、非常にためになりました。今後の教育活動に活かしていきたいと思います。
- ・問題点はよく提起されている。答えはいろいろということもわかった。
- ・大変良い講演でした。ただ教授の先生方の参加が少ないのに驚きました。
- ・学部教育から臨床研修、大学院教育まで話題提供いただきありがとうございます。
- ・卒前～卒後にかけて幅広く話をしていただきおもしろかった。大学院のあり方についてももう少し聞きたかった。
- ・医学教育から専門医の問題まで多岐に渡ってお話されてよかった。
- ・すべての分野で、FDに関したものの以外にも非常に参考になりました。
- ・Total（入試～卒後大学院まで）で考えるという視点が大変良かった。
- ・大学病院にいらっしゃる医師全員が医学教育に参加している一員であるという意識を持ってくださるとおのずと望まれる学生が育つのだと感じました。
- ・じょじょにだが確実に変革が進んでいることを実感できました。“シュミレーター”ではなく“シミュレーター”かと感じました。私も何かの形で貢献していけたらと考えています。
- ・非常にためになるお話をありがとうございました。しかし、大学の上層部の先生方、教授等にも多数出席していただいた方がよかったと思いますので、このような講演会には積極的に出席していただけるように呼びかけていただきたいと思いました。教育にあまり熱心でない教授の方々も多いです。

- ・実践にもとづく現状と提案が聞けて有意義だった。
- ・さまざまな問題を知ることができてよかった。
- ・大変勉強になりました。
- ・多くの情報が得られた。スライドの内容がもう少しまとまっていればよかった（多い?）。
- ・幅広く色々なことを伺えて大変面白かったです。ポリクリ中の臨床教育を充実させるためにもっと多くの人が議論しないといけないと思いました。
- ・有意義であった。

c. 今後のFD活動についての希望（自由記載）

- ・臨床をやっていたら17時からの開始は早い様な気がした。
- ・時間が合えばできる限り参加していきたいと思っています。
- ・最近活動が低下している印象があります。
- ・私どもは教えるという教育を受けていないのでそのようなFDもあってよいかと思っています。
- ・どういう基礎教育が望まれるか、役に立つかなどの統計があったら紹介してほしい。
- ・このような企画をまたして欲しいです。

2) 第2回FD講演会

平成21年3月18日午後5時より、鹿児島大学鶴陵会館において、Stanford大学医学部教授 Sara A. Michie先生を講師として迎え、「スタンフォード大学医学部における学部・大学院教育」と題して講演会を開催した。

Michie先生は、米国、特にスタンフォード大学の医学教育並びに大学院教育について詳細に述べて下さり、日本とかなり異なることが明らかになった。特にスタンフォード大学医学部の教育方針は「医学研究者の育成」にあるとのことで、米国では大学によって教育目標が異なることが示唆された。講演後、活発な質疑応答が行われた。

講演会には、39名の出席者（内訳：医学科30（うち教授6）、歯学部7、学生2）があり、学生も参加したことは医学科教育の一環としても有意義であったといえる。

当日講演終了後にアンケートを実施し、31名か

ら回答が得られた（回収率79.5%）。その結果は以下のように良好なものであった。

a. 企画に対する回答結果

(1) 講演内容は？

	人数	%
大変良い	12	38.7
良い	9	29.0
普通	8	25.8
やや悪い	2	6.5
悪い	0	0.0
その他	0	0.0
合計	31	100.0

(2) 講演の開催時期は？

	人数	%
大変良い	4	12.9
良い	14	45.2
普通	12	38.7
改善すべき	1	3.2
その他	0	0.0
合計	31	100.0

(3) 講演時間は？

	人数	%
長い	0	0.0
やや長い	0	0.0
適切	24	77.4
やや短い	6	19.4
短い	1	3.2
その他	0	0.0
合計	31	100.0

(4) 講演の開催場所は？

	人数	%
大変良い	1	3.2
良い	16	51.6
普通	14	45.2
改善すべき	0	0.0
その他	0	0.0
合計	31	100.0

(5) 講演の広報の方法は？

	人数	%
大変良い	2	6.5
良い	11	35.5
普通	14	45.2
改善すべき	4	12.8
その他	0	0.0
合計	31	100.0

b. 講演の感想（自由記載）

- ・スタンフォード大学医学部のFD活動そのものを聞いたかった。
- ・非常に興味深い内容でおもしろかったです。
- ・Stanfordの現状がよく理解できた。日本との違いは臨床実習のあり方が一番だと思うが、こちらの説明も聞いたかった。
- ・わかりやすい英語で講演して下さったが、私の英語力の不足により半分程度しか理解できなかった。少しでもよいので要約を日本語での説明があればよいと思いました。
- ・教育風景等の画像をもう少し見てみたかった。
- ・Stanford Univの情報の提供だけ。研究者を育てる教育なのでしょうか。
- ・日米の比較が面白いでした。
- ・Overviewすぎるのももう少し内容をしばって話していただくのがよいと思いました。
- ・大変興味深い内容であった。
- ・大学院生ですが、PhDをとるには6年程と聞いて安心しました。今後の参考にしたいと思います。
- ・もう少しゆっくり話していただけるとよかったです。
- ・日本と米国の違いの大きさを再認識した。

c. 今後のFD活動についての希望（自由記載）

- ・できれば日本語での講演を希望致します。
- ・年度末だけでなく、半期に一度実施して欲しい。
- ・今日はStanford Univ.という特殊な大学での教育プログラムだったので、よりclinicを重視する大学の教育内容を知りたい。
- ・大学院生なのですが、月1回、週1回でもnativeの先生の講演があれば参加したいと思います。（大学院セミナーはもう終了している年度です。）

2. 鹿児島大学医学部基礎臨床統合カリキュラムにおける学生による授業評価

(文責 医歯学教育開発センター 今中 啓之)

背景

鹿児島大学医学部では医学教育目標を達成するため、平成15年度から基礎臨床統合カリキュラムを導入した。このカリキュラムは従来の講座単位の授業から臓器別に編成し、すべての医学生が履修すべき必須の学習内容を精選した医学教育コア・カリキュラムに準じて教育することを主眼としている。

基礎臨床統合カリキュラムは2年後期から4年後期まで組まれており、2年生は基礎医学を中心とした系、その後は臓器別のカリキュラムを該当する複数の基礎医学系および臨床医学系が担当している。平成19年度は3年生、4年生の基礎臨床統合カリキュラムの一部について学生評価を検討したが、平成20年度2年生から4年生にわたり学生評価を実施することができた。

目的

現在のカリキュラムに対する学生による授業評価から、各カリキュラムの問題点を検討する。また昨年度の結果と比較する。

対象と方法

平成20年度前期に実施した基礎臨床統合カリキュラム2年生対象2系、3年生対象11系、4年生対象10系についてカリキュラム終了時に学生にアンケート配布、回答を集計した。このうち3年生対象の感染系は基礎系を主とした微生物分野、免疫分野と、臨床系が授業を担当する臨床分野のそれぞれでアンケートを行った。アンケートは「学生自身の自己評価」、「授業について」聞いた。

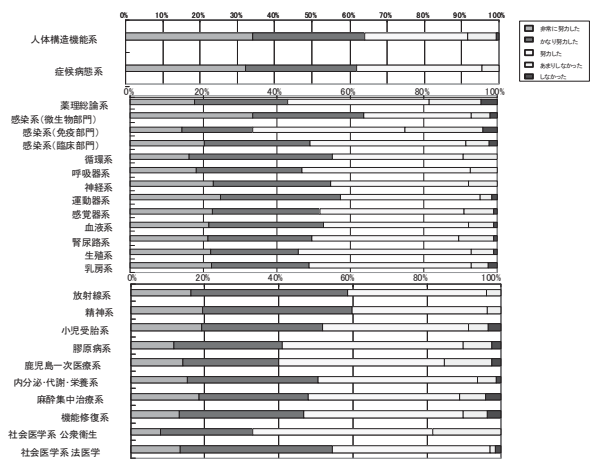
結果

I. カリキュラム評価

1. 学生の自己評価

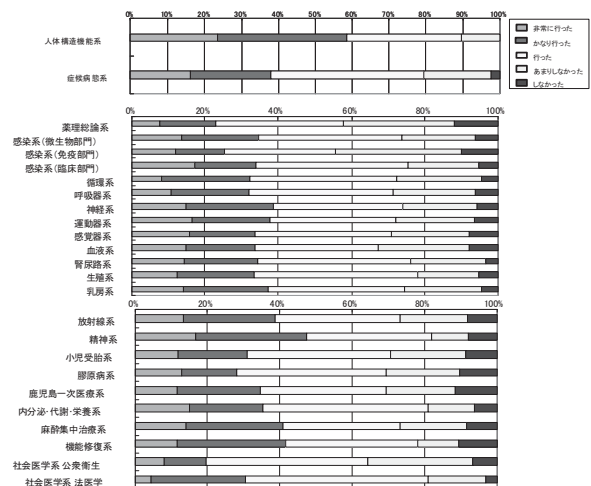
「授業に意欲的に取り組む努力をしたか」は、ほとんどの系で、非常に努力した、かなり努力した、努力した、と答える学生が大半を占めており、特に2年生で初めて専門課程となる人体構造機能系（主に解剖組織学）、症候病態系（主に病理学）では「非常に」、「かなり」が60%を越えており、

授業に積極的に取り組んでいる。逆に「非常に」、「かなり」が40%に満たない系（感染系免疫部門、社会医学系公衆衛生部門）がみられており、両部門は「あまり努力しなかった」の割合も多い。



授業に意欲的に取り組む努力をしたか

「授業の予習または復習を行ったか」では、概ね60%を越えていたが、「あまりしなかった」、「しなかった」の割合が40%を超える系は薬理総論系、感染系免疫部門であり、「授業に意欲的に取り組む努力」の回答と同様であった。

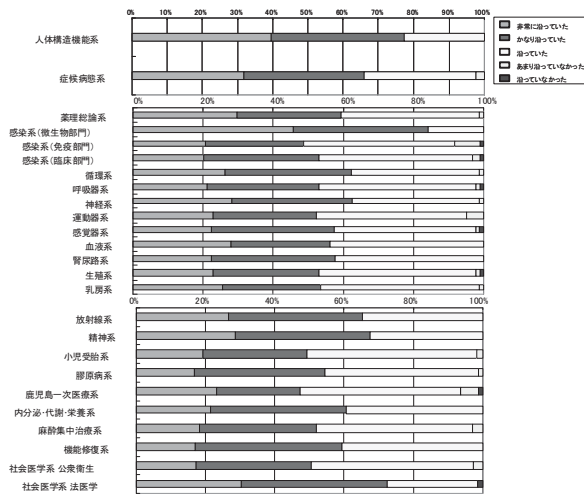


授業の予習または復習を行ったか

2. 授業内容

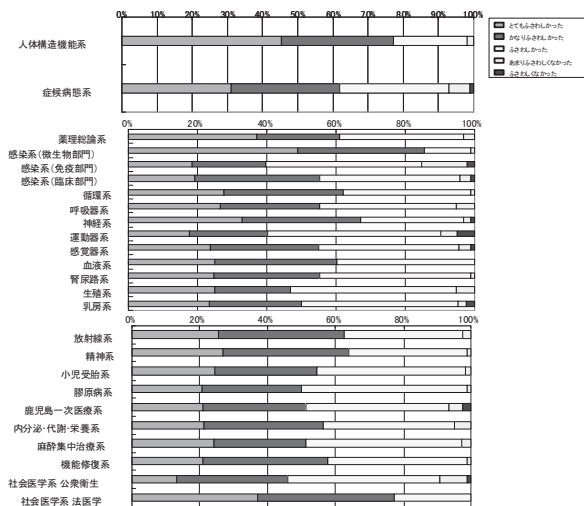
基礎臨床統合カリキュラムでは電子シラバスを導入しており、学生はそれぞれのカリキュラムの授業概要およびスケジュールを事前に知ることができる。そこで「授業はシラバスに沿った内容であったか」を聞いたところ、すべての系で肯定的

な感想であった。



シラバスに沿った内容であったか

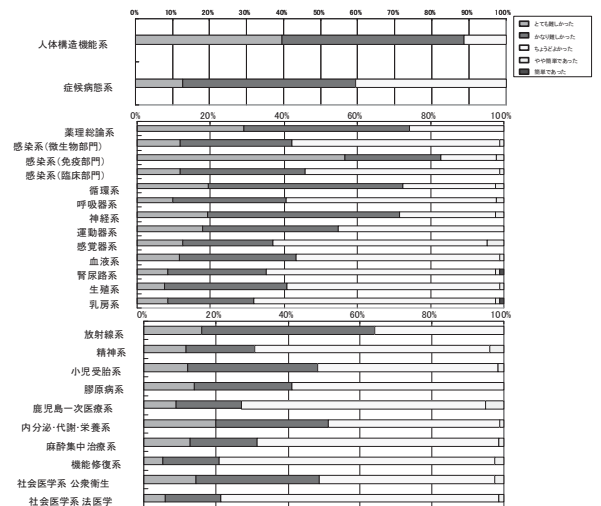
「コア・カリキュラムに沿った内容であったか」については、感染系臨床部門、運動器系が「とてもふさわしかった」「かなりふさわしかった」がやや少ないが、全体的にそれぞれの系で肯定的に回答されている。



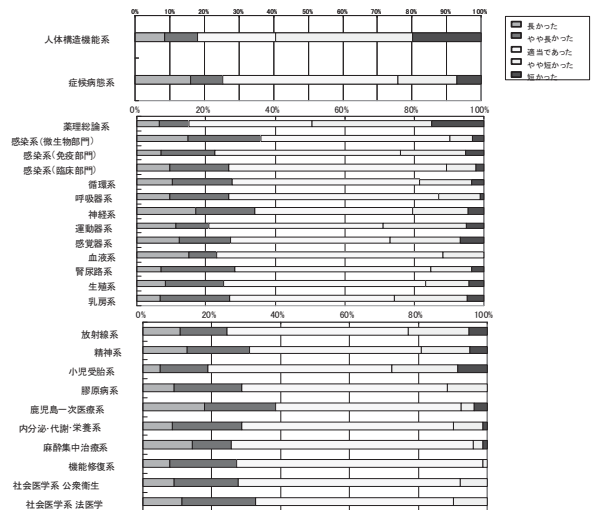
コア・カリキュラムにふさわしい内容だったか

「授業の難易度」については、「とても難しかった」、「かなり難しかった」が60%を超える系は人体構造機能系、薬理総論系、感染学免疫部門、循環系、神経系、放射線系であった。一方「とても難しかった」、「難しかった」が40%以下の系は感覚器系、腎尿路系、乳房系、精神系、鹿児島一次医療系、内分泌・代謝・栄養系、麻酔集中治療系、機能修復系、社会医学系法医学部門であった。

「授業の期間」について聞いたところ、概ね「適当であった」であり、「やや短かった」「短かった」が50%を超えたのは人体構造機能系と薬理総論系であった。



授業の難易度



授業の期間

結果のまとめ

学生の自己評価の「授業に意欲的に取り組む努力をしたか」「授業の予習・復習を行ったか」では系により学生の学習に取り組む意欲に差がみられた。昨年と同様の結果であり薬理総論系、感染系免疫部門など基礎的な内容の授業に対して学生の意欲・関心が低い傾向がみられた。3年生の前期にカリキュラムが組まれているため医学的知識が乏しいことに加え、薬理学、免疫学は基礎的な内容が主で、臨床的な要素が少ないと思われ、学

生に興味を持たせにくい面があるのかもしれない。一方、呼吸器系は「非常に努力した」「かなり努力した」が昨年の27%から47%に上昇していた。医学部は教員の異動が多く、授業内容に変更があったため向上した可能性がある。

「シラバスに沿った内容であったか」では、「非常に沿っていた」「かなり沿っていた」が60%を超える人体構造機能系、症候病態系、感染系微生物部門、放射線系、精神系、社会医学系法医学部門などでは「授業に意欲的に取り組む努力」も高くなっており、授業の前後で学ぶ内容を確認できることが授業への関心を高めている可能性がある。また、「非常に沿っていた」「かなり沿っていた」が40%以下であった薬理総論系、内分泌・代謝・栄養系は平成20年度にそれぞれ59%、61%に上昇しており、シラバスを授業に活用したと思われる。

「コア・カリキュラムにふさわしい内容」は昨年否定的な意見が多かった薬理総論系、内分泌・代謝・栄養系とも「非常に沿っていた」「かなり沿っていた」60%前後に上昇しており、授業内容にコア・カリキュラムを反映させていると思われる。感染系免疫部門は昨年同様40%であり、コア・カリキュラムの範疇を超える教育内容を含んでいると思われる。

「授業の難易度」は系により差がみられているが、その原因として基礎的な知識の蓄積が必要な系（人体構造機能系、薬理総論系など）、学習内容が検査、病態などより広範囲な系（循環系、神経系など）では難易度が高くなり、学ぶ範囲が比較的少ない系（感覚器系、乳房系など）、また4年生のカリキュラムは学年が進んで知識が増えており理解しやすいと考えられる。

「授業の期間」は適当であるとの回答が多かったが、「やや短かった」「短かった」が50%を超えたのは人体構造機能系と薬理総論系であった。この2系は授業の難易度が高いと回答している系であり、授業内容の理解が十分でなかったことが期間を短く思う理由かもしれない。ただし授業が難しかったと答えた循環系、神経系などでは授業期間が「適当であった」の割合が高く、また難易度が高くはなかった感覚器系、乳房系などでは「やや短かった」「短かった」の割合が他より高く、必ずしも授業の難易度と期間には一定の関係があ

るわけではない。

このように学生による基礎臨床統合カリキュラム授業評価は学生の学習に対する態度、理解度を知るために有用である。今後の医学部カリキュラム編成の一助としてこれらの結果が参考になると思われる。

平成20年度 医学部FD委員会保健学科部会活動報告

平成20年度の医学部FD委員会保健学科部会の活動として、①FD講演会、②学生による授業評価、③教員による授業公開・授業参観、④FD活動を契機とした授業方法・内容改善についてのアンケート調査を実施した。それぞれの活動について以下に概略を述べる。

1. FD講演会

平成21年1月19日、中島雪彦氏（熊本機能病院総合リハビリテーション部副部長）を講師として迎え、「臨床で教えるということ」をテーマに講演会を行った。この講演会は、平成20年度九州作業療法士学校連絡協議会教育講演会としても位置づけられており、実習指導者の教育能力を高めることを主な目的に、保健学科作業療法学専攻の臨床実習指導者会議に併せて開催した。

参加者は、臨床実習指導者17名、保健学科教員15名、学部・大学院学生41名、合計73名であった。講演会終了時にアンケートを実施し、61名から回答が得られた。その結果は以下のように良好なものであった。

1) 企画に対する回答結果

(1) 講演会のテーマは

	人数	%
非常に良い	42	68.9
良い	18	29.5
普通	1	1.6
あまり良くない	0	0
良くない	0	0
合計	61	100.0

(2) 講演会の開催時期は

	人数	%
非常に良い	32	52.5
良い	23	37.7
普通	4	6.6
あまり良くない	2	3.3
良くない	0	0
合計	61	100.0

(3) 講演会の開催時間帯は

	人数	%
非常に良い	30	49.2
良い	24	39.3
普通	4	6.6
あまり良くない	2	3.3
良くない	1	1.6
合計	61	100.0

(4) 講演会の開催場所は

	人数	%
非常に良い	33	55.9
良い	23	39.0
普通	3	5.1
あまり良くない	0	0
良くない	0	0
合計	59	100.0

2) 講演会の内容に対する回答結果

(1) 講演時間は適切だった。

	人数	%
強くそう思う	38	62.3
ややそう思う	23	37.7
どちらでもない	0	0
あまり思わない	0	0
全く思わない	0	0
合計	61	100.0

(2) 講演内容はわかりやすかった。

	人数	%
強くそう思う	43	70.5
ややそう思う	18	29.5
どちらでもない	0	0
あまり思わない	0	0
全く思わない	0	0
合計	61	100.0

(3) 講演内容は今後の参考になった。

	人数	%
強くそう思う	42	68.9
ややそう思う	19	31.2
どちらでもない	0	0
あまり思わない	0	0
全く思わない	0	0
合計	56	100.0

(4) 質疑応答の時間は適切だった。

	人数	%
強く思う	22	39.3
やや思う	18	32.1
どちらでもない	15	26.8
あまり思わない	1	1.8
全く思わない	0	0
合計	61	100.0

2) 研修会内容の今後の生かし方などの意見 (自由記載による回答結果の抜粋)

①実習指導者の意見

- ・ まず、自分の職場に戻り、実習指導者やそれ以外のスタッフに伝達しようと思う。
- ・ 今回の企画内容は大変勉強になった。
- ・ 日常業務と新人指導と学生指導において日々悩んでいたのが、参考になった。
- ・ 講演の中に“2つの教育モデル”の提示があった。実習指導者は“成人教育モデル”に基づき指導するが、学生さんは“小児教育モデル”にとどまっている方々が多いと思う。この2つの相違が臨床実習の心構えの違いとして表れてくる。そこをどう埋めて行くべきか考えていってみようと思う。
- ・ いかによれば、学生が流れに乗って実習を終了出来るか考えている。現在の実習指導者の置かれた状況、学生の特性を把握しながら、個人の能力に応じた適切な対応を実習指導者が実施することが重要であると感じた。当院の他スタッフとも対応について再度考慮してみたいと思う。
- ・ 学生への指導に対して、これで良いのだろうかという不安が強かったが、講義を聞いて、自分が不安に思っていた事が明確にまとまったように感じた。学生の相談役という関係の中で、互いに学んで行きたいと思った。
- ・ とても分かりやすく良かったと思う。あえて希望を言わせて頂くと、事例をもう少し挙げて話して頂ければすぐにでもリハスタッフに生かせよう。
- ・ 実習受け入れに対し、学生にどう指導すべきか悩むことは多々あるので、今回の中島先生の講演で、教員・臨床両面の立場からの意見を聞かせて頂き、勉強になった。また、こういうテーマでの講演があれば参加したいと思う。

- ・ 指導方法についての講演で、初めて学生を受け入れる立場としては、すごく参考になった。今後も続けて欲しい。
- ・ 実習を引き受けるにあたり、なるべくスタッフ間の人間関係等で気を遣うことのないよう配慮しているつもりだが、気付いていない面もやはり多々あると思われるので、なるべく実習生として対象者との関わりに集中できるよう更に気をつけて行きたいと感じた。

②学生の意見

- ・ 自分が臨床で学生を受けもった時や他のセラピストと協議する場合に生かしたい。
- ・ 自分が4年生になった時、実習へ行った場合、どの様な点に気を付けて実習を行えばよいのかが分かった。
- ・ 実習で指導して下さる先生方が、私達学生にどのような考え方や心構えで指導をして下さっているのか分かった。
- ・ 紹介されていた学生気質に当てはまる部分がたくさんあったので、実習に向けてもう一度考えてみようと思う。
- ・ 4年生の臨床実習で生かせたらと思う。
- ・ 臨床実習に向いた際に、実習指導者との間に自分から壁を作らないようにし、実習指導者との意見交換も積極的に行おうと思う
- ・ 私達学生は、4年生の感想でしか実習のことをイメージできないので、実習指導者の感想や意見を聞くことができ、よりイメージしやすくなった。
- ・ 臨床実習の現状について知ることができたので、とてもよかった。
- ・ 具体的な対応の仕方などをもう少し聞きたかった。
- ・ 将来の目標として良い実習指導者になりたいと考えていたので、とても参考になった。
- ・ 実習指導者になれるのは3年目以降ということだが、就職したら実習指導者になることを考えて、日々学んで行きたいと思った。
- ・ 生徒は「機転が利かない」とのことだが、実習生にそれを求めるのは無理だと思う。実習生は緊張しているし、そこまでの知識を持ってないというか、習っていない。できるだけ手取り足取り指導を指導するのが基本的に良いのでは

ないか。

- ・ 「実習生を追い込まない」との指摘があったが、これは本当に大切だ。私も厳しすぎて何度も挫折しそうになった。こういう時、バイザーの暖かい配慮があれば本当に助かるのだが…。
- ・ 作業療法4年の学生だが、実習を終えた後という事もあり、非常に興味深く拝聴できた。
- ・ この様な機会が定期的に行われると良いと思う。

③教員の意見

- ・ 専攻は異なるが、臨床という場での実習は同じだと思うので、学生の気質や実際の教育のあり方などを考える機会になった。
- ・ 臨床実習の基本的な在り方を再確認することのできる内容だった。
- ・ 実習指導者への教育のあり方を再学習できたと思う。

2. 学生による授業評価

実習、演習を除く総ての授業科目を対象に学生による授業評価を実施した。実際に授業評価が行われた科目は、前期64科目（実施率98.5%）、後期66科目（実施率85.7%）であった。評価方法は、アンケート調査であり、学生自身の自己評価として「出席状況」「意欲的な取り組み」「予習・復習」、授業の内容として「内容のふさわしさ」「明確なシラバスの内容」「授業内容とシラバスの整合」「適切な難易度」「他学生への履修の勧め」「自分にとっての価値」、さらに教員の授業への取り組みとし

て「わかりやすい説明」「時間どおりの開講」「授業に対する熱意」「質問や相談への対応」の合計13の質問項目を設定し、それぞれに対して1点から5点の5段階（点が高いほど評価が良い）で回答してもらった。回収したアンケートは、当該科目と全科目の質問項目ごとの平均点を示した資料と共に担当教員にフィードバックした。平成20年度の評価結果（全科目の質問項目ごとの平均点）を平成17年度、平成18年度および平成19年度の結果と共に下の表に示した。平成20年度の結果は、これまでの平成17年度から平成19年度の評価と比較し、ほとんどの項目で平均点が高くなり、「予習・復習」を除く総ての質問項目の平均点が4点を超えていた。

3. 教員による授業公開・授業参観

教員による授業公開・授業参観を前期においては6月2日から同月27日まで、後期においては11月4日から同月28日までの期間に実施した。前期には、延べ51科目が公開され、延べ25人が参観し、後期には、延べ42科目が公開され、延べ21人が参観した。参観後は、授業参観報告書を参観した教員に提出してもらい、授業公開した担当教員にフィードバックした。

4. FD活動を契機とした教育方法・内容改善についてのアンケート調査

講演会、学生による授業評価、教員による授業公開・授業参観などのFD活動を契機として教育方法・内容等で改善された点を明らかにするため

学生による授業評価の結果（全科目の質問項目ごとの平均点）

質問項目	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度
出席状況	4.62	4.71	4.62	4.40
意欲的な取り組み	3.91	4.05	4.00	4.11
予習・復習	2.55	2.89	2.97	3.01
内容のふさわしさ	4.31	4.38	4.36	4.47
明確なシラバスの内容	4.02	4.15	4.11	4.38
授業内容とシラバスの整合	4.03	4.16	4.13	4.28
適切な難易度	4.31	4.36	4.34	4.39
他学生への履修の勧め	3.90	3.97	4.20	4.20
自分にとっての価値	項目の設定なし	4.20	4.22	4.35
わかりやすい説明	4.00	4.10	4.14	4.27
時間どおりの開講	4.19	4.30	4.26	4.38
授業に対する熱意	4.19	4.24	4.25	4.39
質問や相談への対応	3.92	4.05	4.05	4.22

各質問項目に対して1点から5点の5段階で評価

のアンケートを平成21年3月に実施した。報告された改善点の例を以下に示す。なお、改善点の内容は一部簡略化されたものもある。これらの内容から平成20年度に実施した一連のFD活動は、教育方法・内容の改善に関して大きな役割を果たしたと考えられる。

- ・授業終了直前に、当日の授業内容に沿った小テストを実施するようになった。
- ・当日の授業内容を簡単にまとめたものを授業前に配布し興味を促すようにした。
- ・全授業日程の日付、感想記入欄、教員コメント欄を表にした「授業感想ノート」を学生個々に作り毎回の授業終了時に感想・質問等を記入してもらい、回収した。次回授業開始時にコメントを記入したシートを配布し、毎回の授業ごとに学生と教員の一言を交換した。全体として感じた授業評価（例えば、資料が多すぎたか？説明が難しすぎたか？）と学生個々の受けとめ方や感想が違っていることもあり、学生個々の理解や反応を捉えるよい機会となった、出席確認もできた。
- ・グループディスカッションと発表、課題テーマごとのグループプレゼン、ディベートなど、できるだけ学生参加の授業を多くした。学生同士のさまざまな意見の相違や考え方の多様性に気づく機会となり、視野を広めることができたこと、プレゼン方法の練習になり、見易さ、わかりやすさ、インパクトなど、自然に評価し合う機会となった。感想としても、面白かった、達成感、勉強になったなどが多かった。
- ・助産師としての教育・指導方法の授業をベースに、グループごとに、目的・対象・場所・指導内容・方法を設定し集団指導方法の指導案を作成し、グループごとの発表を行い、全員で発表内容、方法、発表者の態度、表現、資料、わかりやすさ、創意工夫などについて相互評価した。他のグループの評価をすることで、教育・指導方法の基本に戻り、客観的に他のグループ発表から学ぶことができるようになった。
- ・授業参観して感じることは、学生を導くのは自己流かどうかには関係ない。つまり教育方法はさほど関係ないように感じる。本質的なところではないとしても、ちょっとした技（振り向かせる発話、わざと小さな声で話す、等）は勉強

になり、応用している。

- ・研修会の中島氏の講演を参照し、臨床実習施設訪問時の臨床実習指導者との指導打合せに際して、指導タイプの型に応じて対応することとした。
- ・毎時間シラバスに記載してある授業内容を説明し、学生の到達目標について説明を行った。
- ・小テストを実施し、学生の習熟度を確認した。
- ・教科書以外の資料などを配付したり、ビデオ・スライドを多用した。
- ・私の聴講した研修会では臨床実習にあたり施設側、教育施設側からの話が聞けて大変参考になった。今後の学生指導に役に立てていきたいと思う。
- ・授業参観では、他の教員の先生方が日々の講義でどのような工夫をされているかがわかり刺激をうけた。
- ・学生による授業評価では項目そのものが年次ごとの講義そのもの次年度の講義の組み立て、進め方の参考になるもので自身の目標となっている。
- ・一方的な授業にならないよう、できるだけ学生自身も考えながら授業に参加できるように心がけています。
- ・他専攻の授業を参観することで、職種の違う考え方や新たな知識を知ることができ参考になります。
- ・「身体機能評価学Ⅰ」において、すでに「人体構造学」で学習した筋の起始、付着、神経支配、髄節の知識が必要で、復習を課していたが行っていない学生もいた。これまで学生からは毎回小テストを行った欲しいとの要望が出ていたが、必要な授業時間の関係でそれは無理であった。今回、授業の開始時に数名の学生を指名し、前回の授業行った範囲の筋について白板に書かせることを行ったら、期末試験の該当部分の成績が不十分な学生が減少した。

（文責 前保健学科FD部会長 築瀬 誠）

歯学部FD活動報告

はじめに

歯学部では昨年度から学生による授業評価票を改善し、OCRによる機械処理をより効率化し、事務処理の効率化を図っている。本年度もアンケートの回収とOCR処理は学務係（歯学）とともにに行った。本年度もまた、卒業時アンケートに加えて、既卒者を対象とした全学的なアンケートの一部として、歯学部教育に関する満足度や意見を聴取するためのアンケートを実施した。更に、全学的な授業公開・授業参観の活動を歯学部でも実施月間について要項を定め実施したが、未だ、その実施体制については試行段階であり、その実効性とも併せて今後の課題である。

高等教育の質の保証については、欧州のボローニャプロセスに始まり、OECDによるLearning Outcome（学習成果）の試験（AHELO、2011年）の導入へと続き、わが国の中央教育審議会大学分科会制度・教育部会においても論議されている（「学士課程教育の構築に向けて」（審議のまとめ）、平成20年3月25日）。高等教育の質の保証と継続的向上をはかるには、Faculty Development（FD）による教育の改善がかかせない。FDには、大きく分けて、個人を重視した教職員の能力開発活動（狭義のFD）、学習者や学習を重視したカリキュラムデザインや評価・実施の改善活動（ID: Institutional Development）、機関などの組織構造の改善活動（OD: Organizational Development）がある。歯学部では、狭義のFDに対し、広義のFDを実施するように努め、今後の授業や教育の改善に結びつく具体的な方略を探る事を目的としたFD研修会、講演会等を開催した（鹿児島大学病院歯科医師臨床研修、CBT問題作成FD研修会（第1回-CBT作問のコツ-、第2回-CBT問題のブラッシュアップ-、第3回-ブラッシュアップへの参加-）、「-歯内療法教育と臨床への顕微鏡導入-」、「岡山大学の医療系大学院高度臨床専門医養成コースの試み -魅力ある大学院を創生するために-」）。いずれも、歯学部教員にとっては満足のいく結果となった。

第1節 授業評価

1.1 学生による授業評価

■ 歯学部における学生による授業評価の概要

- (1) 体制：歯学部FD委員会が年間のFD活動計画の一環として行っている。
- (2) 評価を受ける（実施する）時期：授業評価は各科目の授業終了時に適宜行っているが、本年度も複数回の実施も試みた。集計時期は前期終了時の10月頃と、後期終了時の2月頃で、年度末に全ての集計結果を取りまとめる。
- (3) 方法：歯学部で作成した「授業に対する学生評価表」を用い、15項目に亘って5段階評価をし、かつ、改善点や長所、短所についての自由記載をする。対象者は、その授業科目の担当教員であり、教授、准教授、講師である。無記名の評価表は学生クラス委員が集め、学務係へ提出し、OCR集計処理後、さらにFD委員会委員によって、内容の点検を行った後、当該教員へ戻される。教員は所見、感想などを記載し、より良い授業に向けての改善策を記入し、FD委員へ提出後、報告書として取りまとめる。
- (4) 結果の公開：教員の各項目の評価集計結果と所見、感想などのまとめを教育センターの報告書に掲載するとともに、学部内向けに詳細なデータを掲載した報告書を作成し、学生、教職員に配布するとともに、学務係に常備し、また、ネットワーク上でも掲載し、学部内に公開する。
- (5) 評価結果をどのようにして反映させているか：各教員が評価結果について真摯に受けとめた上で、所見、感想などを明記し、さらに、これらをより良い授業のための改善策として公表することによって、授業に対する教員の自覚と自己効力感の醸成に役立てている。各教員のまとめは匿名にしてWebにも掲載し、公開した。

■ 学生による授業評価のまとめ

各教員による自己評価と改善に関するまとめに

各学部のFD活動報告

は、評点からクラス全体の傾向と個々のコメントから具体的な問題点を読み取った結果が記載され、この授業評価が一方向的なものではなく、双方向的な教員の授業改善の手法として機能していることが伺える。各教員による改善に関するコメントには、他の教員も参考になる具体的な改善方法が示されていることから、全文を歯学部教員に公開している。さらに、複数回の評価を実施し、改善方略の効果について検証している教員も増え

ている。

一方、学生のコメント数が少なく、全員の意見の反映には及ばないことも、継続して見られ、今後、さらに方法や内容を検討する必要がある。また、今回も予習復習の自己評価が低く、課外学習の在り方について対策を講じる必要がある。今後、e-learningシステムの充実を図り、より簡便で、双方向的な授業の組み立てが出来る様に教員を支援すべきであろう。

学生による授業評価集計結果

【学生による授業評価実施数 33】

学年平均

■記入学生に関する事項

記入者の学年	1年	2年	3年	4年	5年	全平均
この授業の予習・復習を行ったか	2.8	2.9 ± 0.4	2.4 ± 0.3	2.8 ± 0.4	2.5 ± 0.1	2.7 ± 0.4

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.8	3.9 ± 0.2	3.6 ± 0.2	4.0 ± 0.2	3.9 ± 0.2	3.9 ± 0.3
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.6	4.0 ± 0.3	3.6 ± 0.4	4.1 ± 0.2	3.9 ± 0.2	3.9 ± 0.3
授業の準備がよくなされているか	3.8	4.2 ± 0.3	3.9 ± 0.3	4.1 ± 0.2	4.0 ± 0.3	4.1 ± 0.3
教材（プリント、スライド、教科書、参考書、板書等）は適切であったか	3.9	3.9 ± 0.3	3.8 ± 0.2	4.0 ± 0.2	3.9 ± 0.4	3.9 ± 0.3
実習器具・材料は適切であったか	3.8	4.3 ± 0.7	3.7 ± 0.2	3.8 ± 0.1	3.9 ± 0.3	4.0 ± 0.5
実習は授業内容の理解に役立ったか	3.8	4.4 ± 0.7	3.8 ± 0.3	3.9 ± 0.1	4.1 ± 0.3	4.1 ± 0.5
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.7	3.9 ± 0.3	3.7 ± 0.5	4.0 ± 0.4	3.9 ± 0.4	3.9 ± 0.4
質問や学生による発表の機会を与えられたか	4.3	3.9 ± 0.4	3.7 ± 0.4	4.0 ± 0.3	4.0 ± 0.4	3.9 ± 0.4
質問をしやすい雰囲気であったか	3.7	4.0 ± 0.4	3.5 ± 0.3	3.7 ± 0.4	3.9 ± 0.3	3.8 ± 0.4
学生にとって適切な難易度であったか	3.7	3.8 ± 0.3	3.6 ± 0.4	3.8 ± 0.3	4.0 ± 0.3	3.8 ± 0.3
学習意欲が刺激されたか	3.6	3.8 ± 0.3	3.6 ± 0.4	3.7 ± 0.3	3.9 ± 0.4	3.8 ± 0.4
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	3.8	4.2 ± 0.4	4.0 ± 0.3	4.1 ± 0.2	4.1 ± 0.5	4.1 ± 0.3
教育に対する熱意が感じられたか	4.4	4.1 ± 0.3	3.9 ± 0.4	4.2 ± 0.1	4.1 ± 0.3	4.1 ± 0.3
総合的な評価	3.9	4.0 ± 0.3	3.9 ± 0.3	4.0 ± 0.2	4.0 ± 0.3	4.0 ± 0.3

1.2 教員による相互評価

授業公開・授業参観レポートまとめ

	レポート数:1	レポート数:2	レポート数:5	レポート数:1	全平均
公開・参観日	2008/12/9	2008/12/16	2008/12/19	2008/12/22	
科目番号	(1)	(2)	(3)	(4)	
授業に関する事項					
シラバスに沿った授業がなされたか	5	3.5 ± 0.7	4.4 ± 0.5	5	4.3 ± 0.7
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3	4.0 ± 0.0	4.0 ± 0.7	4	3.9 ± 0.6
授業の準備がよくなされていたか	5	4.5 ± 0.7	4.8 ± 0.4	5	4.8 ± 0.4
教材は適切であったか	5	4.0 ± 0.0	4.8 ± 0.4	5	4.7 ± 0.5
実習器具・材料は適切であったか		4.0 ± 0.0	5		4.3 ± 0.6
実習は授業内容の理解に役立ったか		3.5 ± 0.7	5		4.0 ± 1.0
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	5	4.5 ± 0.7	4.8 ± 0.4	5	4.8 ± 0.4
質問や学生による発表の機会を与えたか	4	4.0 ± 0.0	4.0 ± 1.2	5	4.1 ± 0.9
質問をしやすい雰囲気であったか	4	3.5 ± 0.7	4.2 ± 0.8		4.0 ± 0.8
適切な難易度であったか	5	4.5 ± 0.7	4.2 ± 0.4	4	4.3 ± 0.5
学習意欲が刺激されたか	5	4.0 ± 0.0	3.8 ± 0.4	5	4.1 ± 0.6
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	5	5.0 ± 0.0	5.0 ± 0.0	5	5.0 ± 0.0
教育に対する熱意が感じられたか	5	4.5 ± 0.7	4.8 ± 0.4	5	4.8 ± 0.4
上記項目以外の観点も含めた「総合的な評価」	5	4.0 ± 0.0	4.8 ± 0.4	5	4.7 ± 0.5

第2節 歯学部FD講演・研修会

平成20年度の歯学部FD講演・研修会は下記の要領で行われた。

2.1. 鹿児島大学病院歯科医師臨床研修

FD研修会 「鹿児島大学病院歯科医師臨床研修」

実施責任者：歯学部FD委員会委員長

馬嶋 秀行

日 時：平成20年5月12日（月）

18：00～20：30

場 所：歯学部第4講義室

内 容：

（司会） 篠原 直幸

（挨拶） 伴 清治 副学部長

鳥居 光男 副病院長

（講演1） 歯科医師臨床研修とは？

山崎 要一 教授

（講演2） 平成18～19年度の臨床研修について

吉田 礼子

（講演3） 平成20年度鹿児島大学病院

歯科医師臨床研修について

篠原 直幸

（講演4） 平成21年度鹿児島大学病院

歯科医師臨床研修について

篠原 直幸

（グループ討論）「良い指導歯科医とは」：

5グループに分け討論、発表

（レクチャー）「指導歯科医の役割」：

吉田 礼子

（講演・実習） 評価について：諏訪 素子

（挨拶） 馬嶋 秀行 FD委員長

参 加 者：歯学部・大学病院の臨床研修医54名

4. 質問・意見

・我々は教員免許を持っているわけではないので、指導医が研修医に対して効率よく教える方法についての研修プログラム（指導医向け）も必要ではないかと思います。 ・①将来の専門についても研修医時代から研修できる体制を充実してほしい②大学院への進学についても考慮できるような体制を充実してほしい。 ・歯科医師臨床研修においては先ず指導歯科医の側の努力、資質の向上が重要であると感じられた。さらにより具体的な改善の方法について今後検討していけたら良いと感じられた。 ・Dグループのまとめに出てきた「研修医に夢を与えられる指導医」という文言にぐっときた。目先の事より大きな視点で指導することもまた重要だと改めて感じました。ポートフォリオの実物が見れて「ポートフォリオ」が何なのかがよくわかり収穫だった。 ・今回の有意義なFD研修会が是非生かされるような研修医制度になるように努力していかなければならないと思う。 ・臨床研修をより有効に行うには実際の患者を診ることが一番近道。病院の診療システムの中の一部に組み込み指導することがよいと思う本日の説明で「急性疾患の治療ができない」との事であったので初診時の治療を担当するように組み込むことで可能になるのではないかと思います。 ・今回ポストイットに書いた内容は昨年私自身ができなかったこと。今年の目標を挙げてみました。（研修医のための時間を作る。たくさん処置研修をする。研修医が自分で判断して処置できるようにするの3つです）今回のFDを受けてみてspiritsとか親身とか積極性を出させるなど、メンタルな面にも目を向けていかなければならないと思いました。（でもそこまで入るのは正直怖いです）総合診療部で総診の先生方が行う評価の負担の軽減というのは可能でしょうか？ ・初診患者（配当患者以外の患者）のカルテ作成（主訴 ・現病歴 ・既往歴等）を行うのも研修になるのではないかと考えられますが如何でしょうか。

事後アンケート集計結果：

	よく理解できた	理解できた	普通	あまり理解できなかった	理解できなかった
1. 制度	17	32	5	0	0
2. プログラム	20	28	5	1	0
3. 役割	15	28	10	0	1

・歯学部7年生という話があったが、本日のようなFD研修会の存在自体が歯学部生と研修医をいい意味で区別する機会となるので本日不参加者に参加を促すべき

・研修医が大きな夢をみられる施設であってほしい。(研修医が将来のビジョンを描けるような指導を心がけていきたい)

・初めて参加して勉強になりました。

・指導歯科医のあり方について理想とする点はグループワークの中で論じられているとおりで十分に理解できます。しかし問題点は実際に指導する場では理想とは少しかけ離れた感を受けます。各指導医が身勝手にならず指導する立場の重要性を認識することが必要と思います。

・研修医または研修医になる学生の希望に従ったプログラムを作ることが多く(人員数も含めて)、希望者を集める基本だと思います。

・歯科医師臨床研修指導医のskill upが必要になると痛感しています。

・症例をもっともっと増やしてあげてください。

・お疲れ様でした。

・一般的な技量を持った歯科医師を育成することは重要であるが、個々の研修医の興味を伸ばせるように指導していくことも必要と考える。

・いろいろ仕事が多くて大変だと思いますが、その後に大学に残すような指導をお願いします。

・研修については現在年に半日の参加ですが、もう少し参加する機会があってもいいのではないのでしょうか。そのことで問題点も把握、見えてくると思います。

・本研修会の終了時間が遅いと思います。2回に分けるなど少し配慮頂けるといいと思います。

・何故鹿大(母校)に研修医が残らないのか、(アンケートでは90%以上が勧められるとしているにもかかわらず)それを論議して頂きたい。

・グループワークの企画が良かったと思います。研修医に接するときの参考になりました。また実施してください。

・研修医に歯科医師としてだけでなく社会人としての基本的なマナー、あり方等を教育する必要があります。例えば一般企業の新入社員教育のセミナー等を取り入れてみるというのはいかがでしょうか。

2.2平成20年度CBT問題作成FD研修会

歯学部共用試験委員会 CBT 作問作業部会
歯学部 FD 委員会
共用試験 CBT 問題作成を通じたFD活動につい

て

■ 教員の組織化

歯学教育コア・カリキュラムに準拠するCBT用の問題作成を通じて、コア・カリキュラムが教育の場面でも生かされる様になることを目指して、本年度も継続して、学部教育委員会共用試験実施部会とともに、CBT問題作成過程を歯学部FD活動の一環と捉え、教員を組織化して活動を行った。

各分野から1名の作問委員(計21名)を選出し、グループを作り、全教員を対象とするFD講演会と各グループ作業を行いながら、問題作成とそのブラッシュアップを行った。本年度は取りまとめ役となるコアメンバーを6名とした。

■ CBT作問活動と成果

詳細な実施経過は省略するが、本年度は約6か月間に及ぶ作業期間中、各グループでは毎週のミーティングとともに、日々、電子メールを用いた意見交換やファイルの転送を行い、スムーズに作業を進めた。FD活動として教員を組織化する際には、明確な目標をもち、また、集中的に活動する方が、達成感が得られやすいと考えられ、今後もこの様な目的指向型の短期組織化を継続、充実させたいと考えている。また、その成果として採択率は昨年を引き続き高いものとなり、一定の成果もあげたと言える。さらに、この共用試験に対応した基礎歯学特別講義を本年度も継続して設け、実質的なカリキュラム改善にもつながったといえる。

2.2.1 平成20年度第1回CBT問題作成FD研修会

実施責任者：歯学部FD委員会委員長 馬嶋 秀行
日時：平成20年12月25日(木)18:30~20:30
場所：歯学部第3講義室
内容：(司会)小松澤 均
(挨拶)植村 正憲 馬嶋 秀行
(講演)CBT作問のコツ：梶山 加綱
参加者：歯学部・大学病院の教員

2.2.2 平成20年度第2回CBT問題作成FD研修会

実施責任者：歯学部FD委員会委員長 馬嶋 秀行
日時：平成21年1月22日(木)18:00~20:00

場所：歯学部第3講義室

内容：(司会) 小松澤 均

(挨拶) 植村 正憲 馬嶋 秀行

(講演) CBT問題のブラッシュアップ：

梶山 加綱

参加者：歯学部・大学病院の教員

員の参加希望者

B班： 日時：平成21年3月10日(火)

18:00～20:00

場所：歯学部9階示説室

参加者：CBT作問グループB班と教

員の参加希望者

C班： 日時：平成21年3月11日(木)

18:00～20:00

場所：歯学部9階会議室

参加者：CBT作問グループC班と教

員の参加希望者

2.2.3 平成20年度の第3回CBT問題作成FD 研修会

実施責任者：歯学部FD委員会委員長 馬嶋 秀行
各CBT作問グループ(A,B,C班)で行われるブラッ
ッシュアップに参加する形式をとった。

1回目

A班： 日時：平成21年1月30日(金)

17:00～19:00

場所：歯学部9階会議室

参加者：CBT作問グループA班と教

員の参加希望者

B班： 日時：平成21年1月28日(水)

17:00～19:00

場所：歯学部9階会議室

参加者：CBT作問グループB班と教

員の参加希望者

C班： 日時：平成21年2月4日(木)

18:00～20:00

場所：歯学部9階示説室

参加者：CBT作問グループC班と教

員の参加希望者

2回目

A班： 日時：平成21年3月2日(月)

18:00～20:00

場所：歯学部9階会議室

参加者：CBT作問グループA班と教

2.3 歯内療法教育と臨床への顕微鏡導入 辻 本恭久先生講演

実施責任者：歯学部FD委員会委員長 馬嶋 秀行

日時：平成20年10月7日(火) 17:30～18:30

場所：歯学部第1示説室

講師：日本大学松戸歯学部・歯内療法学講座

准教授 辻本恭久先生

概要：

歯内療法の教育において困難を極め、学生が困
惑するのは根管の中が肉眼で見えないことにあり
ます。15年程前から歯科領域に手術用顕微鏡が
導入され、われわれは根管を確認させながら教育
ができるようになりました。3年前から歯科医師
国家試験の出題基準ともなり、実際に出題されて
いますが、われわれは8年前から学部学生、大学
院生、研修医に対して歯内療法の基礎教育、臨床
教育に顕微鏡を用いています。今回は、われわれ
がどのように顕微鏡を使用した教育を行っている
のか、臨床でどのように活用しているのかを解説
させていただきます。また、近隣の歯科医院から
依頼される症例の診査、診断、治療法を動画を交
えて解説させていただきます。

事後アンケート集計結果：

<そう思わない・・・そう思う>

	1	2	3	4	計
1-1 組織的活動として有意義であったか	0	3	19	12	34
2 企画内容は適切であったか	0	2	16	16	34
3 時間、場所等は適切であったか	0	5	13	16	34
4 個人的に成果は得られたか	0	2	9	23	34
5 今後もこのような活動は必要か	0	0	11	23	34

6 自由記述欄

- ・マクロスコープの講習会を受講したことはあったが、実際の症例をたくさん見せて頂いて非常に勉強になった
- ・従来の教育内容との違い(利点)がよくわかりました。とても勉強になりました
- ・講演だけでなく、業者などもまじえ、実際に機器に触れることができたならよりよいと思われる
- ・このような企画をどんどん計画してほしいです

<そう思わない・・・そう思う>

	1	2	3	4	計
2-1 この様な講演は好ましい	0	1	11	22	34

2.4 岡山大学の医療系大学院高度臨床専門医養成コースの試みー魅力ある大学院を創生するためにー窪木拓男先生講演

実施責任者：歯学部FD委員会委員長 馬嶋 秀行
 日時：平成21年2月24日（火）18：30～19：30
 場所：歯学部第1示説室
 講師：岡山大学医歯薬学総合研究科・インプラント再生補綴学分野 教授 窪木拓男 先生
 概要：

医療系大学院は、複数の大きなミッションを背負っている。

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科では、平成19年度より、4年生の博士課程一般コースを、臨床技術や臨床決断能力を教育し、臨床を真剣に科学する「臨床専門医コース」と、優れた世界的な業績を上げうる基礎研究者を養成する「一般コース」に分割し、各々のコースの目的にしたがって大学院の実質化を進めることとなった。このうち、臨床専門医コースは、各学会の専門医制度と同調

しながら、学生の臨床能力（知識、技術、態度）を博士（医学・歯学）にふさわしいレベルにまで向上させ、国民が求める医療の質を担保することが目的である。また、現在の医療の限界を明らかにし、この限界を打破する新たな方策を開拓し、その有効性を明らかにすることも更なる目的であろう。このためには、臨床疫学的な観点から臨床を科学し直す必要があるのはもちろんのこと、基礎研究部門と共同し、病態の解明や戦略的治療法の開発を進める必要がある。これらは、全世界的に進んでいる医療のグローバル化に伴って、世界的なスタンダードに則って進められる必要があり、教官・大学院生レベルでの国際交流が不可欠である。幸い、本取り組みの内容が大学院GPとして認められ、これらに費やすことができる経済的なサポートを頂いたことは本学にとって大変な幸運である。本公演では、岡山大学の取り組みの内容や苦心した点についてご紹介し、皆様のご批判を仰ぎたい。

事後アンケート集計結果：

		＜そう思わない・・・・・・・・・・そう思う＞				
		1	2	3	4	計
1-1	組織的活動として有意義であったか	1	2	15	20	38
2	企画内容は適切であったか	2	0	12	24	38
3	時間、場所等は適切であったか	1	0	19	18	38
4	個人的に成果は得られたか	1	1	15	21	38
5	今後もこの様な活動は必要か	1	1	14	22	38
6	自由記述欄					
	・とても良かった。・鹿大の教育による学内FDが必要である。我々1人1人の教育をどの方向に変えるべきか。学部ー臨床研修医ー大学院教育をうまくリンクさせる為に、皆でどう変わって行くべきかを、スタッフ1人1人が認識出来るよう（合宿形式の）FDの開催を望みます。 ・年度末でない方が良いと思います。・若手の研究者や臨床医を養成するために短期留学制度は非常に良い制度であった。若いうちに外国の研究、臨床と触れるのは刺激的で良いことである。また、業績を上げる人への補償制度も良いのではないか。・とにかく、講師の先生がとてもすぐれていたと思います。					
		＜そう思わない・・・・・・・・・・そう思う＞				
		1	2	3	4	計
2-1	この様な講演は好ましい	1	2	6	15	24

第3節 卒業時アンケート

3.1 卒業時アンケートの実施方法と結果

卒業時アンケートは昨年と同様に歯学部卒業式会場においてアンケート用紙を配布し、20年度卒業生全員、48名を対象に実施し、30名分の回答を得た。以下の18項目について歯科医師になる立場で、「5点：極めて有効、4点：どちらかといえは有効、3点：どちらとも言えない、2点：どちらかと言えば無意味、1点：全く無意味であった。」の評価を集計した。

項目（結果）：合宿オリエンテーション（3.80）、

共通教育（3.34）、専門・導入系科目（3.27）、専門・基礎系科目（4.20）、専門・臨床系科目（4.43）、専門・医系科目（4.03）、専門・臨床実習（4.10）、専門・選択科目（3.93）、共用試験CBT（3.73）、共用試験OSCE（3.73）、卒業試験（3.87）、チューター制度（3.27）、課外活動サークル等（4.03）、学術情報基盤センター（3.97）、図書館（4.23）、学習室（1、2示説室等）（3.90）、学生控室（3.77）、学務事務室（3.97）。

各項目の評価においては、昨年とほぼ同じ傾向である。すなわち、直接関係する事項である専門

・基礎系科目、専門・臨床系科目、専門・医系科目、専門・臨床実習、図書館に、高い評価が得られている。また、課外活動（サークル等）は精神的な支えとして重要な活動であることがわかる。昨年、4点台の評価であった、卒業試験が3点台になっており関係者としては残念である。一方、1、2年生時の経験となる合宿オリエンテーション、共通教育、学術情報基盤センターは依然3点台の低い評価となっている。また、共用試験（CBT、OSCE）およびチューター制度など、教職員が苦勞して実施している行為に対する評価も比較的低い。臨床系科目、臨床実習に対する高評価より歯科医師としての臨床に対する意識の向上がうかがえた。

3.2 平成20年度卒業時アンケート集計結果

歯学部教育委員会・歯学部FD委員会

実施日：平成21年3月25日（水）

場 所：卒業式会場（第3講義室）

対象者：平成20年度卒業生全員（48名）

回収数：30名分

	鹿児島県	鹿児島以外の九州	左記以外
出身	5名	5名	20名
研修先	9名	6名	15名

結果

以下の18項目について歯科医師になる立場で、「5点：極めて有効、4点：どちらかといえば有効、3点：どちらとも言えない、2点：どちらかと言えば無意味、1点：全く無意味であった。」の評価を集計した。

項 目	平均評価点	
	2009.3.25	2008.3.25
合宿オリエンテーション	3.8	3.79
共通教育	3.34	3.59
導入系科目	3.27	3.79
基礎系科目	4.20	3.98
臨床系科目	4.43	4.23
医系科目	4.03	3.94
臨床実習	4.10	4.24
選択科目（水曜日）	3.93	4.11
共用試験（CBT）	3.73	3.95
共用試験（OSCE）	3.73	3.98
卒業試験	3.87	4.07
チューター制度	3.27	3.45
課外活動（サークル等）	4.03	4.30
学術情報基盤センター	3.97	3.73
図書館	4.23	4.31
学習室（1、2示説室等）	3.90	4.27
学生控室	3.77	4.16
学務事務室	3.97	3.78

第4節 今後の展望

これまで継続して来た活動を、より実質的な授業改善に繋がる様な活動に進化させ、また、現在進行中の歯学部カリキュラム再編とも併せて、シラバスの充実や教育スキルの向上とともに、教員による教育改善を支援する組織的な活動を一層、進展させなければならないと考えている。

（文責 歯学部FD委員会）

工学部FD報告

工学部FD委員会では、学生による授業評価アンケートとその結果の分析、中間授業アンケートの実施の推進、授業計画改善書の提出とその活用方法の調査検討、5年目を向かえたGPA制度の現状分析、そして、理工学研究科のFD委員会等との共催の形でFD講演会を実施した。授業評価アンケートは、平成16年度から質問項目を継続して前期および後期の授業終了時期に行っている。アンケートの集計結果は各授業担当教員にフィードバックし、教員は科目ごとに授業計画改善書を作成して、工学部長（FD委員会）に提出する。提出された授業計画改善書は、各学科長の管理保管の基に学科の教育プログラム点検委員会などで必要に応じて公開できることになっている。このような授業評価アンケートの実施とその利用はPDCAサイクルとして定着してきている。

なお、工学部では、中期目標・中期計画に掲げたJABEE認証による教育を推進してきている。したがって、教育・学習目標の社会・学生への周知、その目的を達成するための教育課程（カリキュラム）編成、成績評価規準の明確化、これらを公表するシラバスの見直しとこれらに基づく厳格な教育の実施を図ることが要求され、加えて、

教育力のスパイラルアップを目指したFD活動などのPDCAサイクルのためのシステムを整えていることは重要な認証要件の一つである。

本報告では、以下に1.授業評価アンケートの結果および授業計画改善書、2.GPA制度の現状、3.JABEE認証プログラムとFD活動、4.活動のまとめ、として簡単に報告し、また、授業公開・授業参観は、【工学部授業公開・授業参観報告】として総括する。

これらの詳細は、「平成20年度鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会報告」を参照願えれば幸甚である。

1. 授業評価アンケートの結果および授業計画改善書

平成16年度から自由記述を含めて16項目の設問で実施した。ほとんどの科目が学期ごとに行われているため、学期ごとの平均値を各学科および学部単位で集計し、授業改善の状況を考察する一つの指標とした。図1-1に、各15項目の学部平均値の平成16年度からの推移を示す。

各設問項目は簡略して表記しているが、詳細を以下に示す。

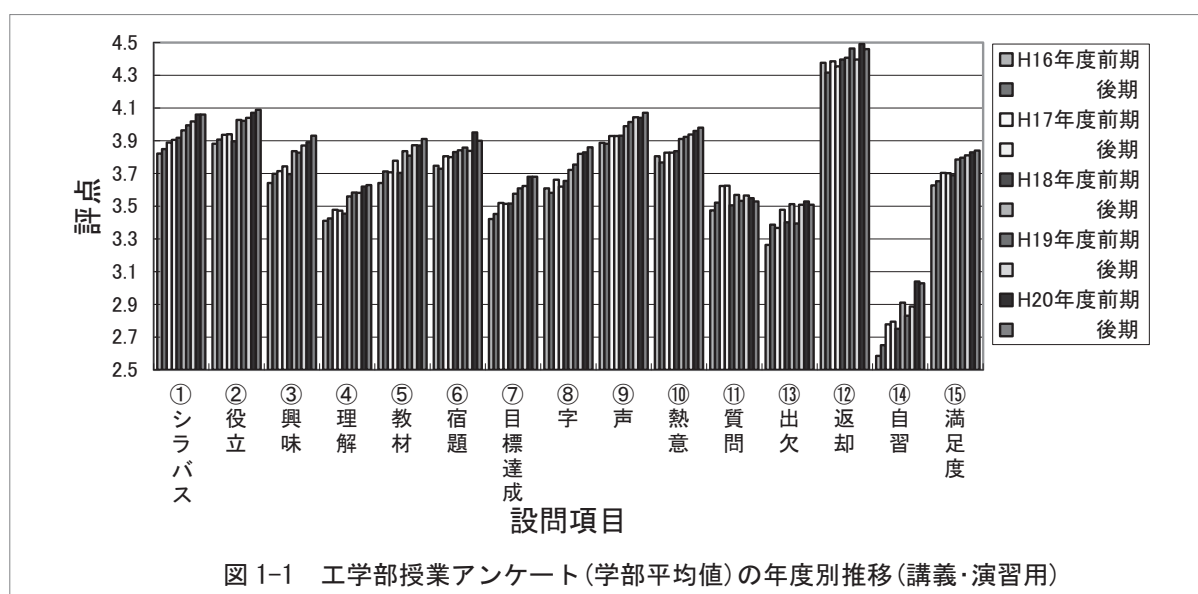


図 1-1 工学部授業アンケート(学部平均値)の年度別推移(講義・演習用)

- ①シラバス (シラバスに記載どおりの授業内容であったか。)
- ②役立 (授業の内容はこれから役に立つと思うか。)
- ③興味 (この授業は興味深いものであった。)
- ④理解 (授業は理解できた。)
- ⑤教材 (使用した教科書や教材は授業の理解に役立った。)
- ⑥宿題 (宿題・レポート・小テストなどの準備は授業の理解に役立った。)
- ⑦目標達成 (シラバスに記載された授業(学習)目標を達成できそう。)
- ⑧字 (黒板やOHPなどの字は明瞭だった。)
- ⑨声 (教員の声は良く聞こえた。)
- ⑩熱意 (学生に理解させようとする教員の熱意が感じられた。)
- ⑪質問 (講義中やオフィスアワーで、質問などに対する教員の対応に満足した。)
- ⑫返却 (中間試験・レポート・小テストなどに付いて解答例の開示や説明、あるいは採点後の返却に満足している。)
- ⑬出欠 (授業の出欠状況を教えてください。)
- ⑭自習 (1コマ(90分)の授業に対して、予習と復習に合わせてどれ位時間をかけましたか。)
- ⑮満足度 (この授業は総合的に見て満足できるものでしたか。)

これらに対する評点は、最大評価5(大いにそう思う)、4(そう思う)、3(どちらとも言えない)、2(そう思わない)、最低評価を1(全くそう思わない)として5段階で表した数値である。ただし、設問⑬の出欠は、全て出席を5、欠席1回を4、欠席2回を3、欠席3回を2、欠席4回以上を1とした数値である。また、設問⑭の自習は、一コマの授業に対する予習・復習の時間が、3時間以上を5、2～3時間を4、1～2時間を3、30分から1時間を2、30分未満は1とした数

値である。

殆どの項目について、押しなべてみれば年次的に右肩上がりの推移であり、特に①から⑩および⑮は、年次的にほぼ類似な傾きの増加傾向にある。また、絶対値としてはまだまだ不十分だが⑭自習時間の継続した増加が目立っている。しかし、まだまだ、満点の目標に到達するには、改善の余地を残している。

前期および後期の授業終了時期に、個々の授業に対する前述のアンケートの結果を踏まえて、教員は個々の授業に対して授業計画改善書を提出している。この授業計画改善書では、アンケート項目④(授業の理解)、⑤(教科書や教材等の適切さ)、⑥(宿題・レポート・小テストなどは授業の理解に役立ったか)、⑦(授業(学習)目標の達成度合い)、⑧(板書やプロジェクターなどの明確な文字)、⑨(教員の明瞭な声)、⑭(予習・復習の時間)、⑮(総合的な満足度)について、過去2年分の評価結果を参考にして改善計画と自己評価、単位取得状況などを記載して提出する。その後、冒頭でも述べたように、学科長の管理保の基に各学科の教育プログラム点検や検討委員会などで必要に応じて公開されている。

図1-2～図1-4は、項目④(授業の理解)、⑭(予習・復習の時間)、⑮(総合的な満足度)について各学科および学部平均値を示したもので、殆どの学科で授業の理解、満足度が上昇しているのが見て取れる。この傾向は、学生の自習時間の増加が著しい学科ほど顕著といえるのではなからうか。図は割愛したが、最も重要な⑦(授業(学習)目標の達成度合い)においても同様の結果である。また、後述するようにJABEE教育プログラム等の趣旨が学生によく理解され、彼らに共感を持って受け入れられつつある効果も間接的に大きく影響していると思われる。

なお、昨年度より、学生の率直で正確な回答が個々の教員の資料として使用されるだけでなくより良い授業に繋がることを目的として、授業評価アンケートの主要な項目に対する結果を学生に周知することになっている。本年度は、過去5ヵ年の結果と併せて工学部のホームページ上などで公表する。

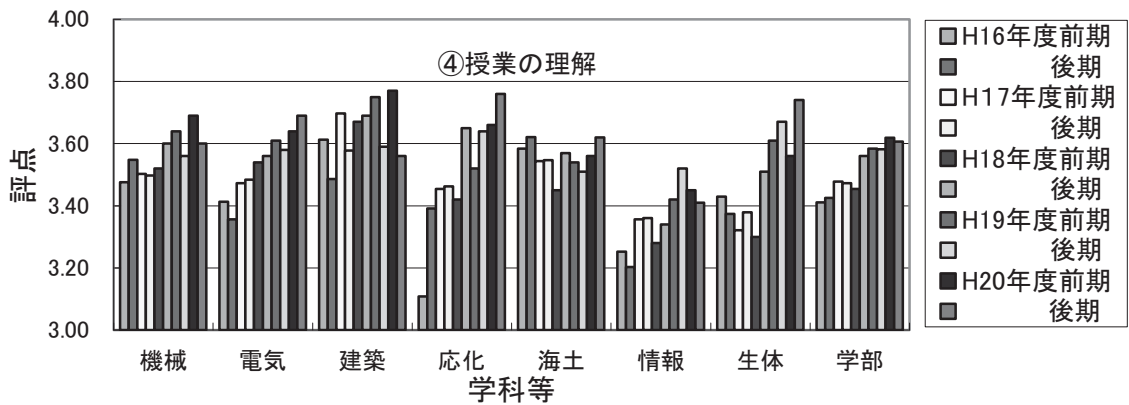


図 1-2 アンケート項目④(授業の理解)の各学科および学部平均値の年度別推移

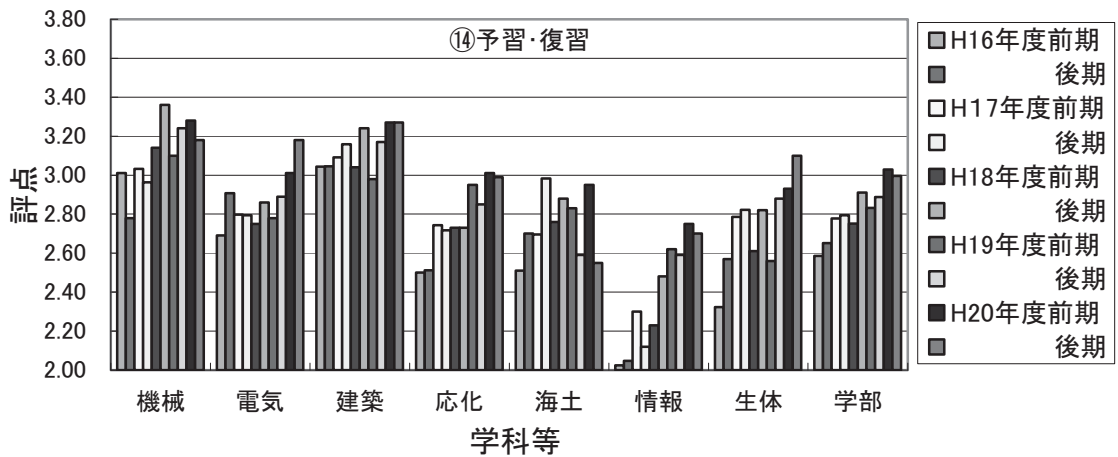


図 1-3 アンケート項目⑭ (予習・復習の時間) の各学科および学部平均値の年度別推移

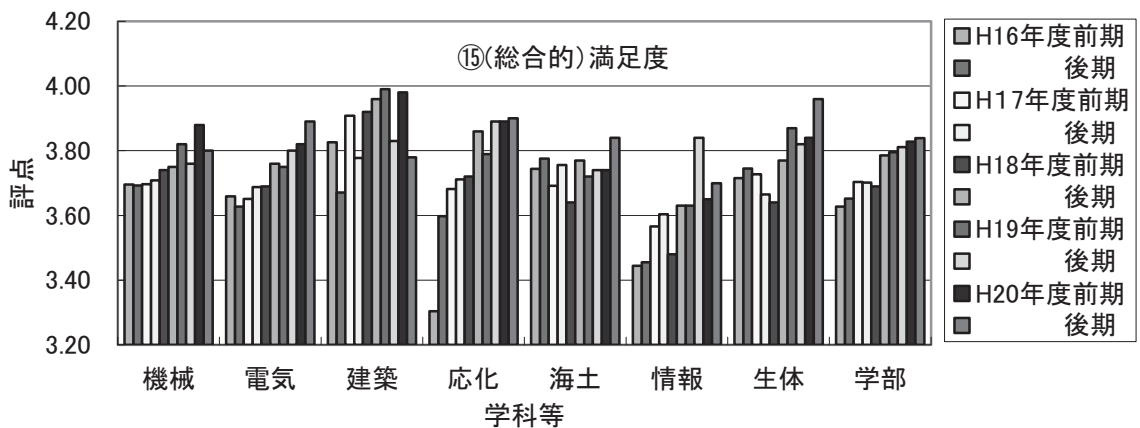


図 1-4 アンケート項目⑮ (総合的な満足度) の各学科および学部平均値の年度別推移

2. GPA制度の現状

工学部では、平成15年度入学生からGPA制度を導入しており、本年度で5年が経過した。GPA制度は、各科目の成績評価レベルであるA(90～100)、B(80～89)、C(70～79)、D(60～69)、F(60点未満:不合格)を、それぞれ4、3、2、1、0の数値(GP, Grade Point)に置き換え、受講登録科目のGPの平均値(GPA, Grade Point Average)によって、学生の修学レベルを評価しようとするもので、実習や卒業実験など評点化になじまない科目はP(Pass、認定)として平均値算定から除外されている。本制度の特徴は、(1)不合格科目もGPAの対象になるので、受講すると定めた科目を真剣に履修しやすくなる、(2)工学部の専門科目では、取得成績を放棄した上で再履修による成績更新が可能であり、外国留学や進学、就職などに有利な学習成績が大学に残る、(3)進級要件などの教育過程の編成において、取得単位数だけでなくGPAによる成績基準値を設定するなど、きめ細かな指導により卒業時の学力保証に役立つ、などである。詳細は平成20年度工学部FD報告書を参照してもらうことにして、以下に若干の統計データとその考察を紹介させていただく。

図3-1に、2003年～2008年度入学生の年間GPAの平均値を学年別に示す。本図より、いずれの入学年度についても、在学1年目の年間GPAは2.41から2.53であり多少、増加する傾向が見られる。在学2年目のそれは2.1から2.2程度に一旦低下し、在学3年目に至って2.4前後に回復するという傾向が見られる。1年目は入学直後の学生自身の緊張感や高揚感、各種オリエンテーションやフ

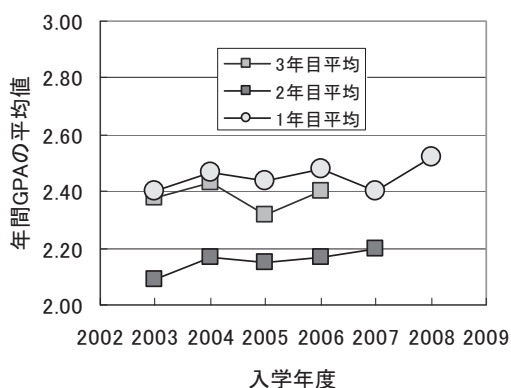
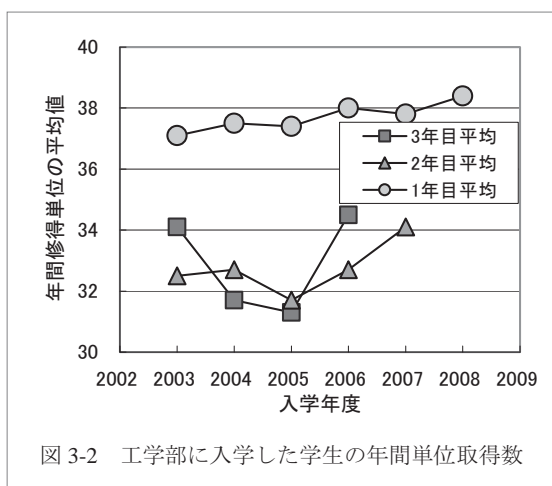


図3-1 工学部に入学した学生の年間GPAの推移

レッシュマンセミナーの影響などに加え、受講対象の多くが共通教育科目であること等のため、年間GPAが高くなっていると考えられる。2年目は、大学生活に慣れる一方で関心が多様化し、緊張感と勉強意欲がやや希薄になること、専門科目の割合が高くなり講義内容が高度化すること、レポート等が課される専門の学生実験等が必須であることなどのために、低い成績で合格あるいは不合格となる学生が増加し、年間GPAの一時的な低下を招いていると考えられる。3年目には、専門科目を学習していく自覚や将来の進路への目標等が徐々に確立していくこと、2年次に不合格となった科目の単位を再履修により取得することなどによって、年間GPAが回復したものと考えられる。

入学年度毎の比較では、全般的に2003年度入学生の年間GPAが2004年度以降入学生のそれと比べて低い傾向がある。2003年度は工学部でGPAが導入された年であり、この年度の入学生に対しては教員側も試行錯誤的状況にあったためと考えられる。2004年度以降入学生に対しては、2005年度入学生の3年目平均年間GPAが他年度入学生のそれと比べて低めであることを除き、年間GPAの推移には特に大きな変動が見られない。これは、2004年度以降入学生に対しては、GPA制度下における各教員の教育方法がある程度確立していったためと考えられる。2005年度入学生の3年目平均年間GPAが低下した原因は現時点では定かでないが、2006年度入学生で2004年度の程度に回復している。同入学年度の入学生の資質が特異なものであったかは、今後も年間GPAの入学年度別推移をもとにその傾向を監視し、大きな異変等が見られないか検証していく必要があると思われる。

図3-2に1年から3年までの各学年における年間修得単位数の入学年度による相違を示す。現状で定量的な評価が下せるだけの情報にはなっていないが、つぎの特徴がある。いずれの入学年度においても1年目の修得単位数が最も多く、2004年度入学以降では2年目、3年目の順になっている。2005年度入学は、2年目と3年目が他の入学年度に比べて年間修得単位数が最も少なくなっているが、2006年度で回復してこれまでの中で最も多くなっている。2006年度入学の1年目と2年目の年間修



得単位数が上昇していたので、同入学年度の3年目の結果は妥当な結果といえる。2005年度入学の3年目は特異な結果と考えられる。

3. JABEE認証プログラムとFD活動

平成16年度にJABEE認定申請した機械工学科、応用化学工学科化学工学コース、海洋土木工学科は、2年後の中間審査を経過して平成20年に5年間の認証を終え、再び継続認証請求の予定である。平成17年度に開始した電気電子工学科は本年度中間審査を経て平成21年度までの正式認証を得ることになっている。建築工学科・応用化学工学科応

用化学コースは平成18年度の認定申請を行い本年度（平成20年度）に中間審査を経て平成22年に5年間の認証を終了する。これらの年次経緯を表3-1に示した。

なお、平成21年からの工学部改組により、応用化学工学科(化学工学コース・応用化学コース)は、情報工学科および生体工学科（生体電子コース・生体機能材料コース）は、環境化学プロセス工学科、情報生体システム工学科および化学生命工学科として新生を迎える。化学工学コースおよび応用化学コースのJABEEプログラムは、それぞれ環境化学プロセス工学科および化学生命工学科の教育に継承され、情報生体システム工学科は新規に認定申請の計画である。

これらの各学科におけるJABEE教育と表裏一体となったFD活動が、工学部全体のFD活動の大きな原動力となっている。より詳細なFD活動記録、現地審査における講評やPDCAに向けての対策等については、各教育プログラムの正式な審査結果を参照していただきたい。また、教員数が少ないプログラム内のPDCAにおいては、FDに関して外部委員の意味で学科(他の教育プログラム)間の相互チェックあるいは工学部そして全学FD委員会の活用もより効果的であろう。

表 3-1 鹿児島大学工学部の JABEE への取り組み状況等

学 科	JABEE 教育プログラム名	16 年	17 年	18 年	19 年	20 年	21 年	22 年
機械工学	機械および機械関連分野	暫定		中間		終了	継続予定	
応用化学工学	化学および科学関連分野「化学工学コース」	暫定		中間		終了	継続予定	
海洋土木工学	土木および土木関連分野	暫定		中間		終了	継続予定	
電気電子工学	電気・電子・情報通信およびその関連分野		暫定		中間		終了	継続予定
建築学科	建築学および建築学関連分野			暫定		中間		終了
応用化学工学	化学および科学関連分野「応用化学コース」			暫定		中間		終了
情報工学	電気・電子・情報通信およびその関連分野					申請中止		
生体工学	・生物工学および生物工学関連分野・電気・電子・情報通信およびその関連分野					準備申請中止		
環境化学プロセス工学(H21年4月)	化学および科学関連分野「化学工学コース」						継続母体	
情報生体システム工学(H21年4月)	電気・電子・情報通信およびその関連分野							申請予定
化学生命工学(H21年4月)	化学および科学関連分野「応用化学コース」						維持母体	

暫定：暫定認定のこと 中間：中間審査のこと 終了：認定期間の終了する年度のこと

4. まとめ

昨年度より、理工学研究科FD委員会が組織され、工学部のFD委員会の学科選出委員は、研究科FD委員会の博士前期課程専攻及び後期課程専攻選出委員を兼務となった。そのため、活動が学部と研究科で重複する部分がある一方で、委員としての活動の煩雑さも増した。従って、工学部のFD活動としては新たな企画を計画せず、従来からの活動を継続し、各教育プログラムのPDCAを側面からサポートするにとどまった。しかし、JABEE基準の教育の実践を通じて、学習目標と到達度の明示やこれに沿った厳格な成績評価やプログラム内のPDCAサイクルシステムの構築とその実践など、着実に一步一步教育改善を行ってきていると思われる。なお、平成21年度4月からの理工学研究科が博士前期課程11専攻、博士後期課程が3専攻に改編成され、工学部も7学科に改編成される。同時に、工学部及び理学部の教員は理工学研究科の専任となり、それぞれ工学部および理学部を兼担することになる。しかし、工学部の教育においては、改組後も各教育プログラムにおいてJABEE基準の教育とPDCAは継続して発展される方針である。

大学とは何か、そして「大学教員とは何か」が自明でなくなりつつあり、さらには「FDは普及したが教育力の向上に十分つながっていない」とも酷評されている今日、FD活動のPDCAサイクルとしては、狭義のFD「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組み」活動は勿論であるが、「どのような学位を出すか」そのため「どのような教育課程を編成するのか」そのため「どのような学生を入学させるのか」を再認識し、「卒業時の学力」だけでなく「生涯に亘って自己研鑽できる能力の保証」に向けて、施設や修学環境をも含めた総合的かつ組織的な教育力向上への取り組みが理想ではなからうか。

(文責： 松本)

【工学部授業公開・授業参観報告】

本学部では、平成18年度工学部FD委員会において、「前期あるいは後期の授業の中から一科目一コマを授業公開リストに公表し、6月と12月中に実施する。」こととされている。平成20年度も、平成19年度同様に、公開授業の予定表リ

ストを全学FD委員会に報告するとともに、工学部ホームページ等に公表して実施した。

公開授業科目数および授業参観者等を昨年度の結果と併せて表4-1に示す。公開授業の科目数は、ほぼ全員の担当教員数に匹敵し、昨年度より僅かに増加した。しかし、授業参観者および参加報告書の提出は、残念ながら昨年並みか参観報告書については僅かに減少してしまった。教授会等や各学科のFD委員を通じて授業参観への参加要請は行ったが、自発的授業参観の増大と慣習化に向けた仕組み作りを大きな課題として次年度以降の活動に残した。

授業参観報告書は、学科のFD委員を通じて学科および教育プログラムのPDCAに活かされる仕組みにしているが、貴重な記載事例を、表4-2、表4-3、表4-4、表4-5、表4-6および表4-7に集合して紹介する。これらのなかから、いくつかをピックアップしてみよう。

大人数授業に共通の悩みと思えます。「学生の勉強姿勢の改善は、本科目に限らず多くの科目に共通の問題と考えられます。」逆に少しずつで教育システムの改善効果が現れつつあるのではないのでしょうか。「選択科目であるために、興味があり単位を取りたい学生だけが受講しているので、(参観者が講義している必修科目に比べ)ほとんどの学生が真面目に受講しているようである。工学部で取り入れた「単位上限を含むGPA制度」が定着しプラスの効果が現れているのかもしれないと感じた。」学習の到達水準は教育プログラム全体の枠組みの中でCheckし、改善するのが最善のFDでしょう。「中間授業アンケート調査結果に基づき課題の量を減らすことを宣言していたが、減らす必要があるか否かを再検討する必要があるのではないか。」また、プロジェクターと黒板の位置関係、マイク等の教室設備に対する改善コメント、また、受講人数に適切な教室の広さへの指摘も目立ちます。設備を含めて組織的な改善が望まれます。なお、個々の授業・教員に対しては、講義の進め方の速さ、学生への熱意の伝え方など、参観者のほうが他山の石としてより勉強になったのではないかとと思われる。

このような積極的な意識の教員が多い学科においては、「工学部FD報告」の第1項に述べた「学生による授業評価アンケート」結果の年次推移

各学部のFD活動報告

グラフにおいて、「堅実かつ顕著な向上・改善が認められる。」と言っても過言でないだろう。

表 4-1 平成 18、19 および 20 年度 工学部公開授業科目数および参観報告者数

学 科	公開授業科目数			参観報告者数 (参観出席者数)		
	H18 年度	H19 年度	H20 年度	H18 年度	H19 年度	H20 年度
機械工学科	16	20	17	8 (8)	5 (8)	3 (3)
電気電子工学科	19	17	17	4 (4)	4 (4)	5 (5)
建築学科	15	12	15	1 (1)	1 (2)	* (*)
応用化学工学科	16	12	16	0 (4)	2 (3)	4 (6)
海洋土木工学科	12	14	12	3 (5)	1 (1)	1 (1)
情報工学科	15	15	14	4 (5)	1 (1)	* (*)
生体工学科	17	12	11	1 (1)	2 (2)	2 (2)

* 記録紛失 () 未報告 3 月 31 日現在

表 4-2 平成 20 年度 授業参観報告書に記載事例の集合 (その 1)

提出月日	平成 19 年 12 月 XX 日 / 平成 20 年 1 月 XX 日
授業公開・参観科目： (学科名)	〇〇機関 (ME 工学科) / □□セミナー (ME 工学科) / 圧縮生〇△力学 (ME 工学科)
授業公開実施日： 平成 年 月 日	2008/7/v / 平成 19 年 12 月 S 日 / 平成 20 年 12 月 W 日 (F 曜) S 時限
授業参観者名： (学部学科名)	鹿大 学 (工学部 ME 工学科) / 韓国 岳雄 (工学部 ME 工学科) 坊津 航唐 (工学部 ME 工学科)
本授業の改善に参考となるご意見など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員が熱意をもって講義しているにもかかわらず、教室後方の一部の学生は講義開始後から携帯電話を操作したり、居眠りしたりしていた。このような学生に学習意欲を持たせるのは困難だと感じた。 ・ 授業の進め方は現行のままで良いと考えます。 ・ 壁に掛けてあった柱時計の音がやや気になったが、学生は講義に集中すれば気にならないのだろうと感じた。
本授業に対するご感想など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 黒板の文字が大きく、最後列からもよく見えた。また、声もよく聞こえていた。 ・ 授業で取り扱っているテーマ (歯車ポンプの構造と設計) に含まれる工学を学生に理解させる工夫が認められた。 ・ また、学生各人が授業テーマに関して学習した内容を発表する際に、発表方法と内容について、改善点を的確に指摘していたと考える。 ・ 受講生が 5 名ということで研究室のゼミ室で講義が行われていた。教員と学生の物理的な距離が近いので、学生は緊張感をもって講義を受けていたのが印象的であった。講義の合間に和やかな話題もあり、大変参考になった。
その他	特になし

表 4-3 平成 20 年度 授業参観報告書に記載の集合事例 (その 2)

提出月日	平成 20 年 1 月 yy 日
授業公開・参観科目： (学科名)	応用△□Ⅱ及び演習 (EEE 工学科) / ○△○△設計製図
授業公開実施日： 平成 年 月 日	2008/12/F / 2008/12/S
授業参観者名： (学部学科名)	敬天 愛人 (工学部 EEE 工学科) / 南西 経典 (工学部 EEE 工学科)
本授業の改善に参考となるご意見など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 講義終了間際までの遅刻者による頻繁な入室、私語、携帯電話の使用など、学生の勉強姿勢の改善は、本科目に限らず多くの科目に共通の問題と考えられます。 ・ プロジェクターを使用されるとき、ノートをとるには少し早すぎると感じました。ただし、前回までの授業でノートを取っている内容ならば、支障はないと思います。 ・ 学生の授業中の出入りは無いが、後方で数名居眠りをしている学生が見受けられた。
本授業に対するご感想など	<ul style="list-style-type: none"> ・ パワーポイントを併用することにより、数式的導出のみならず図的にその意味等を表現し、専門分野との関連付けも含めてわかりやすく解説されていたと思います。 ・ 今回はこれまで学んだ内容を復習する時間でした。はじめの方では、直交系、フーリエ級数、複素フーリエ級数、フーリエ変換までを系統だて、これらの関係について丁寧に説明されており、学生の理解に役立っていると感じました。後半部分の、スライドを使用した視覚的な説明では、Gibbs の現象をわかりやすく説明されていました。 ・ 授業を通して、質問があるか確認しながら、また質問が出たら丁寧に説明されて、双方向の授業を実践されていると感じました。授業の組み立て、説明のやり方、学生への対応など非常に参考になりました。 ・ 講義室は受講人数に対して適度な広さで、学生との距離が近いので、適度な緊張感のもとで後方の学生まで集中して受講していたことが印象に残った。製図の演習時間も静かであった。 ・ アニメーションを効果的に使用したパワーポイントによる授業内容の説明が行われており、受講学生に授業のポイントがわかるように配慮されていた。
その他	特になし

表 4-4 平成 20 年度 授業参観報告書に記載事例の集合 (その3)

提出月日	平成 20 年 1 月 yy 日
授業公開・参観科目： (学科名)	エネルギー〇〇Ⅱ (EEE 工学科) / 熱・統計□△ (EEE 工学科) 〇△回路学Ⅱ及び演習 (EEE 工学科)
授業公開実施日： 平成 年 月 日	2008/6/F / 2008/12/F
授業参観者名： (学部学科名)	大隈 斉彬 (工学部 EEE 工学科) / 郡元 電停 (工学部 EEE 工学科)
本授業の改善に参考と なるご意見など	<ul style="list-style-type: none"> ・工学部の専門科目の講義としては難しいだろうが、文系の先生方のように、話し方がもう少し軽くても良いのではないだろうか (学生から見て教員が身近に感じられるよう、また講義に飽きないように)。授業参観者がいたので真面目な話し方に終始したのかもしれないが・・・。 ・取り扱う内容を極力少なくし、ゆっくりわかりやすく進められていて参考になった。 ・講義の最後に出席も兼ねて講義に関連した問題を解かせた紙を提出させている。講義をちゃんと聞いていない学生は書けない訳なので、良く工夫されている。しかし、残念ながら白紙で出している学生が散見される。 ・講義中にレポート写しなどのほかのことをやっている学生が3分の1、ノートもとらずに漫然と聞いている学生が3分の1ほどおり、そのような学生が白紙で出しているようである。 ・教科書はなく、(1)板書と(2)教科書をコピーしたプリント、(3)講義の内容をまとめたプリントが配られている。(3)は良くまとまってはいるが、それだけでは内容は理解できず、板書を写しながら先生の話をもとにノートをとることによって、理解しながら講義の記録ができる。ところが、板書を写している学生は全体の3分の1程度しかおらず、後での自己学習や試験勉強の時に苦労するであろうことが容易に予想できた。 ・ノートをうまくとることのできないのは学生の技量不足によるものではあるが、学生に講義ノートをきちんととらせる工夫も必要であるように思う。仮に講義で先生の話聞き逃しても(2)をあとで読み返すことによって理解が得られるかもしれないが、それすらも学生にとってはハードルが高いように感じられる。 ・(1)(2)(3)の3つを後で見直したときに互いがリンクされて理解できるように、講義中に工夫する必要があるように思えた。たとえば、章や節の番号、式の番号などを共通にするとか、詳細は「(2)のどこを見よ」と言った記述を入れることで、多少は後で見直したときにとっかかりになるように思う。 ・取り扱う内容を極力少なくし、ゆっくりわかりやすく進められていて参考になった。
本授業に対するご感想 など	<ul style="list-style-type: none"> ・選択科目であるために、興味があり単位を取りたい学生だけが受講しているので、(参観者の大隈が講義している必修科目に比べ)ほとんどの学生が真面目に受講しているようである。 ・工学部で取り入れた「単位上限を含むGPA制度」が定着しプラスの効果が現れているのかもしれないと感じた。 ・教員は情熱を持って教えているが、残念ながらそれが伝わっているのは前に座っている数名のみであるように見受けられた。数学の基礎学力や先生の話を理解する力のない学生にとっては、とっかかりからハードルが高く、難解であるように思えたので、そこを補完するような工夫をすれば、理解度が向上するようになった。(初回あたりに予備知識に関する講義はしているとの話ではあった) ・また、宿題は出しているとの話であったが、多くの学生は講義であまり理解できないまま、放りっぱなしになってしまう危険性があるように感じた。この講義に限った話ではないが、それに対してどう対策するかが課題であるように感じた。 ・本授業が行われていた工学部建築棟01号教室は、黒板の面がたくさんあり、板書がやりやすそうだった。 ・授業そのものは、少ない分量をゆっくりわかりやすく進められていてよかったが、一部の学生がレポートを書くなど授業と関係ないことをやっており、学生の側にももう少し真剣さが必要と感じた。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・共通棟 201 号教室のマイク設備の調子はノイズが入り聞き取り難い。修理あるいは交換をすべきである。この講義では受講生が多くないのでさほど必要ではないが、広い教室の後ろの方まで教員が移動してもマイクオフにならないような設備に替えるべきである。

表 4-5 平成 20 年度 授業参観報告書に記載事例の集合 (その4)

提出月日	平成 20 年 1 月 ww 日
授業公開・参観科目: (学科名)	○△化学基礎 (ACCE 工学科) / △□化学基礎 (ACCE 工学科) △△化学 I (ACCE 工学科) / ○□化学 (ACCE 工学科)
授業公開実施日: 平成 年 月 日	平成 20 年 12 月 T 日 / 平成 20 年 6 月 E 日 平成 20 年 6 月 S 日 / 平成 20 年 6 月 T 日
授業参観者名: (学部学科名)	桜島 太郎 (ACCE 工学科) / 南西 海陸 (ACCE 工学科) 霧島 昇山 / 錦江湾 泳 (理工学研究科 NSAM 専攻、工学部 ACCE 工学科)
本授業の改善に参考となるご意見など	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな 51 号教室であるが、後から良く見える大きな字であり、声もよく聞こえた。ただ、説明に専念するあまり、学生の側を向いて説明がなされておらず、せっかくの熱意が通じていないように思われた。 ・講義とは無関係な○○化学基礎の演習の準備をしている学生が数人おり注意をした。 ・学生を講義に集中させることは難しいが、指名して質問したり、また教室を巡回しながら講義すると、注意が行き届くのではないだろうか。 ・微分積分などの数学が多出する難しい内容です。 ・説明が非常にテンポよく進行してすばらしいのですが、少し速度が速いのではと感じました。 ・また、学生に配布するプリントには、もう少し記載を減らし、わざと学生に書かせることをしてはいかがでしょうか。 ・授業をわかりやすくするため、化学実験の実例を挙げて説明するなどの工夫がみられ、全般的に理解しやすい講義であった。 ・板書も大事なところをメモしない学生が散見され、重要な部分をアピールするためチョークの色を変えての説明あったが、もう少しこの方法を増やすとさらに理解しやすくなると思われた。 ・板書で重要部分を色づけするのは効果的であるが、最後部座席からは見にくく、識別しやすい色を用いるとさらによいと思われた。 ・受講人数が多いため部屋が広く、また学生は後方に座りたがるため、プロジェクター画面が見えにくいかもしれない。人数が入れば横に広い○△号のような教室がよいと思った。
本授業に対するご感想など	<ul style="list-style-type: none"> ・朝一番の講義であったが、必修でありまた宿題のレポートを講義前に提出することになっていたので、遅刻者は一名であった。 ・二重結合を持つ有機化合物の命名法と反応性に関する基礎的内容であり、丁寧な説明がなされ学生にとっては理解しやすい講義であったと思う。 ・後部座席の学生に簡単な質問をして答えさせるなど、講義に集中させる工夫がなされていた。 ・講義の主題は自由エネルギーと相平衡であった。パソコンとプロジェクター投影での説明で、学生にも同じ内容のプリントが配布され、説明に集中できるよう配慮されていた。 ・文字や図も後方からでも良く見え、声量も十分であった。 ・講義説明の途中で例題も挿入され、アクセントがつけられていた。説明後、練習問題 (3-6問) がプリントで配られ、解答の時間が与えられ、ほぼ全員が問題に向かっていた。1問についての解説があった後、残りは課題とされた。その練習問題プリントには、前回の練習問題及びレポートの解答が記載されていた。練習問題が多く理解を助けると感じた。 ・非常に良く計画され実施されているすばらしい講義と感じた。 ・出席は63名でほぼ全員であり、高い出席率であった。盛んに鉛筆を動かしてプリントに書き込みなどしているものが5,6名、前方を向いて説明に耳を傾けているもの15-20名、居眠りが数名あった ・微分積分などの数学が他出する難しい内容のためか、学生の反応が乏しいように感じた。プロジェクターによる説明のため、非常にテンポ良く進行、練習問題などの余裕が生まれていると感じた。 ・本授業は有機化学の基本事項が多い科目の一つであり、丁寧な講義を行うと時間が不足気味になることは仕方ないことと思う。 ・限られた時間を有効に使い、課題や中間試験を課し、有機化学の内容を理解させるための努力が感じられた。 ・授業冒頭で小テストをするのは、遅刻防止によい。また、答案の採点を学生同士にさせるのも、勉強になってよい。
その他	特になし

表 4-6 平成 20 年度 授業参観報告書に記載事例の集合 (その5)

提出月日	平成 20 年 1 月 zz 日
授業公開・参観科目： (学科名)	○△□工学実験 I (OCE 工学科)
授業公開実施日： 平成 年 月 日	平成 20 年 6 月 T 日
授業参観者名： (学部学科名)	錦江 公望 (OCE 工学科)
本授業の改善に参考と なるご意見など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今まで「○△□工学実験 I」は 3 年前期に開講されていたが、エアコンが効かないので夏は作業環境がよくなかった。今回 2 年後期に移したのでかなり作業環境が向上したと思われる。 ・ また、土質力学 I が 2 年前期の授業なので、3 年前期よりも 2 年後期に開講した方が教育効果も向上したと思われる。 ・ 作業台のスペースは広くした方がよい。 ・ 今回のテーマ (△○実験) の指導は 3 限、4 限の時間を有効に使っていて参考になった。
本授業に対するご感想 など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 適切な指導がなされていた。
その他	特になし

表 4-7 平成 20 年度 授業参観報告書に記載事例の集合 (その6)

提出月日	平成 20 年 1 月 zz 日
授業公開・参観科目： (学科名)	○化学 (BIO 工学科) / △□○学工学 (BIO 工学科)
授業公開実施日： 平成 年 月 日	平成 20 年 6 月 T 日 / 平成 20 年 6 月 E 日
授業参観者名： (学部学科名)	佐多 美咲 (BIO 工学科) / 北辰 帯刀 (BIO 工学科)
本授業の改善に参考と なるご意見など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教科書の図などを OHP に映写しながら、かつ黒板を使用し説明するのは大変わかりやすいと感じた。 ・ しかし、スクリーンを下ろすと黒板が隠れてしまうので、OHP を壁に映さざるを得ず、黒板を使用しつつ、映写もできるように教室を改造すべきと感じた。 ・ 中間授業アンケート調査結果に基づき課題の量を減らすことを宣言していたが、減らす必要があるか否かを再検討する必要があるのではないか。 ・ 学生に課題が多いかと尋ねれば多いと答えがちと考えられる。
本授業に対するご感想 など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 次回に中間テストを行なうせいもあるが、かなりの学生が、授業後積極的に教員に質問をしていた。 ・ 講義開始時に、前回の講義の復習を簡単に行うことによって、講義の継続性を持たせている点が参考となった。
その他	特になし

(以上)

農学部のFD活動

農学部では平成20年度に以下の活動を行った。

I. 授業公開と授業参観の取り組み

農学部では、平成15年度後期より公開授業および授業参観の取り組みを実施している。平成17年度前期までは、農学部の全ての教育コースで1科目以上の公開授業を実施した。その際、各教育コースで公開授業世話役と公開授業担当者を決め、FD委員会は公開授業の案内をメールで全教職員に連絡し、授業参観者を募ることにした。一方、平成17年度後期からは、公開授業と授業参観が教員による教育の質の向上に果たす役割を認め、毎年度前期と後期それぞれに1週間FDウィークを設定し、全教員による授業公開と、1教員1科目以上の授業参観を行うことを義務づけている。

平成20年度は、平成20年4月17日に開催された平成20年度第1回農学部FD委員会において、例年通り、前期と後期に各1週間のFDウィークを設け、原則としてその期間中開講されている全授業科目（集中講義や特別な実習は除く）を授業公開の対象とすること、農学部の全ての教員に対し前期、後期あわせて1科目以上の授業参観を義務づけることを確認し、FDウィークの開催時期と期間について議論し、前期は7月7日（月）～11日（金）、後期は11月25日（火）～12月1日（月）とすることにした。その後、補習授業等の実施などにより、後期の授業公開は、12月1日（月）～12月5日（金）までに変更した。

公開授業科目の決定、授業参観科目の決定は、これまでの手順に則り、以下のようにして行うことを確認した。まず、学生係で授業科目一覧を作成し、それを各学科のFD委員へ配布する。学科FD委員は、公開できない授業科目（公開できない場合はその理由を明記）を調査し、公開授業科目一覧を作成し、学生係へ送付する。学生係はそれを基に公開授業一覧総表を作成し、全教員へ配布する。教員は公開授業一覧総表をもとに授業参観希望科目を学科FD委員まで届ける。そして、それぞれの授業科目担当者に授業参観者名簿を配布する。

今年度も、授業公開は農学部教職員に対しての

みならず、全学の教職員も対象にすることとし、鹿児島大学教育センターのホームページを通して、全学の教職員に公開授業科目を周知した。また、FDウィークにどうしても希望した授業を参観が出来ない場合は、授業担当者に事前に連絡し、FDウィーク以外でも授業参観が出来るように配慮した。

授業参観者と授業担当者は、授業終了後可能な限り授業参観で感じたこと、授業に対する感想などについてディスカッションを行うこととした。授業参観者に対して、授業参観後授業参観報告書の提出を義務づけ、それらは今後の授業改善に役立てるように、授業担当者に手渡された。

授業公開と授業参観のスケジュールは以下の通りであった。

前期

- 5月16日：公開授業の実施についてのお知らせを配布。
- 6月10日：公開不可能な授業科目の申し出で締め切り。公開授業科目の決定。
- 6月24日：授業参観希望科目の提出締め切り。授業参観科目の決定。
- 7月7日～11日：授業公開（農学部FDウィーク）

後期

- 9月29日：公開授業の実施についてのお知らせを配布。
- 10月24日：公開不可能な授業科目の申し出で締め切り。公開授業科目の決定。
- 11月7日：授業参観希望科目の提出締め切り。授業参観科目の決定。
- 12月1日～12月5日：授業公開（農学部FDウィーク）

本年度の授業公開科目は、前期182科目、後期178科目で、授業参観者数は、前期が53科目にのべ99人、後期が55科目にのべ88人であった。授業参観者数は前年度と同様の高いレベルを示し、教員による相互の授業参観が定着しつつあることが伺える。ただ今年度も、全学に向けて授業を公開

したにも係わらず、他学部からの授業参観者がいなかったのは、残念であった。

また、学外者に向けて授業のオープン化を検討するよう学部長から依頼があり、その目的やメリット、ディメリットについて第3回から第5回農学部FD委員会まで委員会で議論するとともに、各学科に持ち帰り意見を聴取した。その結果、メリットがさほど認められないことや授業参観者がほとんど無いのではないかとといった理由で反対する意見が多く、実施を見送ることにした。



学生と一緒に授業参観

II. 授業アンケートの改善

平成20年度から正式にPDCAサイクルが農学部でも導入され、授業アンケート結果を授業改善にどのように利用すべきか検討を重ねた。

(1) 授業の満足度と成績の関係の解析

授業アンケート実施後、授業に対する満足度は高くなっていることは、毎年のFD報告書に記載されている。しかしながら、これが学生の能力アップの結果なのか、アンケート慣れの結果なのか不明である。そこで、学生の授業への満足度が本当に成績アップに繋がっているのか解析を行った。

解析には、アンケートを取り始めた平成16年度から平成19年度までに開講された授業科目のうち、授業担当教員の変更がない生物生産学科30科目、生物資源化学科13科目、生物環境学科15科目、獣医学科5科目の講義について、満足度とGPAにのっとり指数化した成績の関係について解析した。

4年間の両者の経年変化から、今回解析に用いた63科目の授業のうち10科目でのみ、授業の満足度が増すにつれて成績も良くなる傾向が見られた。残りの授業科目では、両者の間に一定の傾向

が見られない、授業の満足度はあまり変わらないが成績の年変動が激しい、満足度の変動は激しいにも関わらず成績の変動は小さいといった傾向が見られた。

それぞれの年度に各学科で開講されている全ての科目の授業満足度と成績の相関関係を見たところ、生物生産学科は平成19年度、生物環境学科は平成18年度と19年度に有意な正の相関が見られたが、生物資源科学科と獣医学科の全ての年度と、生物生産学科の平成16年度から18年度、生物環境学科の平成16年度と17年度では、有意な相関は認められなかった。有意な相関が見られた場合でも、満足度が同じ程度の授業間で、成績のばらつきが見られた。このことは、授業間で成績評価にばらつきが大きいことを示唆している。したがって、アンケートを生かした授業改善を評価する場合、科目ごとの経年変化を追跡する必要があり、今後も引き続きデータ収集に努めることになった。

(2) 授業アンケートの改善

現在実施している授業アンケートの問題点の洗い出しを行い、以下のような問題点が明らかになった。

1. 授業アンケートの「板書」の項目は、現在の授業実態を反映しているとは言えない。
2. 集中講義のアンケートは、用紙が間に合わないことが多く、HPからダウンロードできるようにするのが望ましい。
3. WEB入力すれば集計が速くすむ。(ただし、回答率が低下する可能性もある?)
4. 記名制を導入する方が、学生も責任を持って記入するので、むちゃくちゃなコメントは無くなる。
5. アンケートに基づいた「授業改善報告書」を学部長に提出しているが、これが授業改善に生かされているのか不明である。各コースや学科の授業改善委員会へ提出し、そこで授業改善に役立てる方向で検討できないか。

これらの議論を通して、以下のことを考慮して、アンケートの改善に取り組むことになった。

1. 現在実施しているアンケートが何を目的としているのか(授業の何を評価したいのか、そして学生はそれをどう評価したのか)が曖昧であ

るので、授業評価の目的を明らかにし、それに対する設問を再構築する必要がある。

2. 設問に合った回答の選択肢作る必要がある。
3. 現在行っている手入力では集計に時間がかかりすぎ、職員の負担も大きいので、時間を短縮する方法を考える必要がある。
4. 講義、実験、実習、演習の全てが同じ設問でいいのか？それぞれに対応した設問を設ける必要がある。

そして、平成20年11月27日開催の第7回農学部FD委員会で修正案を決定し、これを各学科に紹介し、意見を聴取することになった。12月24日開催の第8回FD委員会で修正を行い、最終案を各学科に周知するとともに、平成20年度後期授業から実施した。

農学部授業アンケートの改正にあたっての基本姿勢

1. 質問の意図の明確化とそれに沿った設問にする。

質問の意図

学生のモチベーションを把握する＝授業に対する取り組み

学生の習熟度や達成度を把握する＝授業内容の検討や教え方の改善に生かす

授業の進め方に対する満足度を把握する＝授業方法の改善に生かす

2. アンケートを授業の種類により異なったものにする。

講義・演習と実験・実習の2種類のアンケートを用意する。

3. 回答にあたっては、「わからない」という選択肢は設けない。

4. 卒論と修論についてはアンケートを実施しない。

その理由：講座・コースにより事情が異なる。

他で同様のアンケートを実施している。(卒業生、修了生に対するアンケート)

5. 自由記入欄は従来通り。

自由記入欄は切り離し、各授業担当者に渡す。それらを授業改善に役立てる。

講義・演習に対する質問事項

学生のモチベーションを把握する＝授業に対する取り組み

1. この授業の予習・復習を毎回どれくらいしましたか？

(1) 90分以上 (2) 60分－90分
(3) 60分未満 (4) しなかった

2. 授業に関連ある参考書、論文、雑誌などを読みましたか？

(1) はい (2) いいえ

3. この授業にどの位の割合で出席しましたか(公欠を除く)？

(1) 全て出席 (2) 1回欠席
(3) 2回欠席 (4) 3回以上欠席

学生の習熟度や達成度を把握する＝授業内容の検討や教え方の改善に生かす

4. この授業から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか？

5. この授業の内容のレベルは適正だと思えましたか？

6. この授業の分量は適正だと思えましたか？

7. この授業は知力や学力の向上に役立ちましたか？

8. この授業の学習目標は達成できたと思いますか？

9. この授業は総合的にみて満足できるものでしたか？

回答は全て

(1) そう思う (2) まあそう思う

(3) あまりそう思わない

(4) そう思わない

の4つからの選択

授業の進め方に対する満足度を把握する＝授業方法の改善に生かす

10. この授業はシラバスに沿って進められましたか？

11. 板書、配付資料、パワーポイントなどは授業の理解に役立つものでしたか？

12. 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明はわかりやすいと思えましたか？

13. 教員の準備は十分で、授業に対する熱意が感じられましたか？

14. 授業中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？

回答は全て

- (1) そう思う (2) まあそう思う
(3) あまりそう思わない
(4) そう思わない

の4つからの選択

実験・実習についての質問事項

学生のモチベーションを把握する＝授業に対する取り組み

- レポートや課題提出のため、時間外にどれくらい勉強しましたか？
(1) 90分以上 (2) 60分－90分
(3) 60分未満 (4) しなかった
- 授業に関連ある参考書、論文、雑誌などを読みましたか？
(1) はい (2) いいえ
- この授業にどの位の割合で出席しましたか(公欠を除く)？
(1) 全て出席 (2) 1回欠席
(3) 2回欠席 (4) 3回以上欠席
- この実験実習を理解するための基礎学力はあったと思いますか？
(1) そう思う (2) まあそう思う
(3) あまりそう思わない
(4) そう思わない

学生の習熟度や達成度を把握する＝授業内容の検討や教え方の改善に生かす

- この授業から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか？
- この授業の内容のレベルは適正だと思いましたか？
- この授業の分量は適正だと思いましたか？
- この授業は知力や学力の向上に役立ちましたか？
- この授業の学習目標は達成できたと思いますか？
- この授業は総合的にみて満足できるものでしたか？

回答は全て

- (1) そう思う (2) まあそう思う

(3) あまりそう思わない

(4) そう思わない

の4つからの選択

授業の進め方に対する満足度を把握する＝授業方法の改善に生かす

- この実験・実習はシラバスに沿って進められましたか？
- 板書、配付資料、実験マニュアルなどは実験・実習の内容理解と実施に役立ちましたか？
- 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明はわかりやすいと思えましたか？
- 教員の準備は十分で、授業に対する熱意が感じられましたか？
- 授業中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？

回答は全て

- (1) そう思う (2) まあそう思う
(3) あまりそう思わない
(4) そう思わない

の4つからの選択

アンケートの様式は、共通教育で実施しているものをもとに作成している。それにより、機械による読みとりが可能になり、アンケートの集計がこれまでに比べ格段に省力化されることが期待できる。さらに、今年度の検討事項の一つである授業アンケートを授業改善に役立てる点については、PDCAサイクルのWeb上に授業アンケートの結果と授業改善報告書を同一ページに掲載し、それらを講座、教育コース、学科の授業改善検討委員会が管理し、授業改善検討の資料として利用できるようにFD-Webシステムのプログラムを改善した。

Ⅲ. 農学部FDワークショップ

(1) 学生・教員による農学部の教育に関する意見交換会

5月22日開催の第2回農学部FD委員会、9月25日開催の第5回農学部FD委員会、農学部FD委員会の審議を経て、FDワークショップを11月26日14時30分から実施することを決定した。また、鹿児島大学教育学部附属中学校の今井誠先生に講演会の講師をお願いすることもあわせて決定した。

当日は32名の学生と11名の教員のほかに、講師としてお招きした今井先生にも参加していただいた。まず、曾根晃一農学部FD委員長から、教育実習事後指導と農学部FD講演会・FDワークショップを共催した目的と当日のスケジュールの説明があった。つぎに、佐々木修農学部教務委員長から教育実習事後指導が成された。次いで講演に移り、最初に鹿児島大学教育学部附属中学校教頭今井誠先生から『教師という職業』と題する講演があった。その後、参加者全員が5つの班に分かれ、教育実習の体験をもとにした魅力的な授業とは？大学の授業についてどのように感じるか、改善点は何かについてディスカッションを行った。約1時間のディスカッションの後、各グループの代表がグループで出された意見を発表し、最後に曾根晃一農学部FD委員長が全体を総括して、17時過ぎに終了した。



今井 誠先生による講演



学生と教員によるグループ討論・意見交換



学生と教員によるグループ討論・意見交換



グループでの討議内容の紹介

(2) コースでの教育カリキュラムの見直しの実施例の紹介

今年度から本格的にPDCAサイクルを導入し、教育の改善にあたっているが、PDCAサイクルに対する理解度に講座間でばらつきがあり、その手始めとしてお願いしているシラバスの共有化、すなわち講座、教育コース、または学科での構成メンバーによるシラバスの検討の実施状況や差があることが委員会で問題となった。そこで、委員会として、農学セミナーと共同でFDワークショップを開催し、最近カリキュラムの大幅な見直しを行った生物環境学科環境システム学講座と2つの教育コースを一つにまとめた森林科学コースの授業科目とそれに伴うシラバスの見直し例を紹介してもらい、講座や教育コースの教育改善の参考にしてもらうことにした。

平成21年2月18日の第13回教授会（定例）終了後、教員56名が出席して第40回農学セミナー・平成20年度第2回FDワークショップ「コースでの教育カリキュラムの見直し」を開催した。最初に

環境システム学講座の岩崎浩一教授から、平成18年度の農林工学講座から環境システム学講座への名称変更とそれに伴うカリキュラムの見直しについて説明があった。質疑応答の後、森林管理学講座の枚田邦宏准教授から、平成15年度のJ A B E E 試行審査、平成22年度に予定している本審査へ向けて、森林管理学コースと地域資源環境学コースを合体させて、新たに森林科学コースを立ち上げた経過と、そこでの取り組み（教育目標の設定、個々の授業科目の教育目標への張り付けとバランスの調整、各授業内容のチェックと変更など）について説明が成された。

今回紹介した2つの事例を参考に、それぞれの講座でも、構成員全員による授業科目の見直しやシラバスの検討が成されることを願うという学部長の言葉を、重く受け止めたい。

IV. 全学FD活動への参加

全学の各種FD活動に積極的に参加した。

(1) 鹿児島大学FD委員会への出席

農学部FD委員長が、鹿児島大学FD委員会に出席し、鹿児島大学の教育改善の一翼を担った。

(2) 平成19年度鹿児島大学新任教員FD研修会への参加

平成20年11月18日（火）に開催された平成20年度の鹿児島大学新任教員FD研修会に、獣医学科の三浦直樹准教授が、タスクフォースとして曾根晃一農学部FD委員長が参加した。

(3) 平成20年度「教養セミナー」ワークショップへの参加

平成20年11月8日（土）13時から17時まで、共通教育棟1号館第1会議室ほかにおいて、平成20年度「教養セミナー」ワークショップが開催された。スタッフとして現在教養セミナーを担当している畑邦彦准教授と坂巻祥孝准教授が参加した。

(4) 平成20年度学生・教職員ワークショップへの参加

平成21年2月16日（月）12時～16時に共通教育棟1号館で開催された平成20年度学生・教職員ワークショップ（今年度のテーマは、「自学自習の方策について～自ら学ぶ意欲をどう引き出すか～」）、に教員3名学生8名、事務職員1名の計11名が参加した。

(5) 平成20年度教育（FD）講演会への参加

平成20年12月19日（金）の14時から16時50分まで、稲盛会館において開催された、平成20年度教育（FD）講演会（講師：お茶の水女子大学学長の郷通子氏、講演題名：学士課程と大学院の教育をめぐって）に、農学部からは前田学部長をはじめ18名が参加した。

(6) 平成21年度新入生クラス担任等教員FD講習会への参加

平成21年3月23日（月）13時30分～16時30分まで、総合教育研究棟102号教室で開催された平成21年度新入生クラス担任等教員FD講習会に、津田勝男教授、山本雅史准教授、大塚彰准教授、望月博昭准教授、桃井康行教授の5名が参加した。

水産学部FD活動報告

水産学部FD委員会では、ISO教育システム運用マニュアルで規定している「学生による授業アンケートシステム」と水産学部独自の活動として教育訓練計画に則った「FD講習会」を実施したので、これらの取り組みについて報告する。

1. 学生による授業アンケート

平成18年度から、授業アンケートの年度末結果の取りまとめを、前年度の後期と本年度の前期を合わせて行ってきた。従って平成19年度後期分は講義演習56科目、実験14科目、実習3科目、乗船実習16科目において、また、平成20年度前期分では講義演習50科目、実験14科目、実習8科目、乗船実習6科目において実施された。授業アンケート結果については、講義・演習科目、実験科目、実習科目、乗船実習科目別に集計した。沿岸域乗船実習B、E、Tに関しては、同じ科目でも乗船日によって担当教員や実習内容が異なるため区別せずに扱った。実験科目も受講科目群別に扱った。

(1) 授業アンケート集計結果の有効利用と今後の取り組み

これまで、授業アンケートの分析は各教員の授

業改善努力に対するモニタリング材料として利用されてきた。そのため、授業アンケート結果は他科目と比較するように集計されてはいなかった。そこで、各科目のモニタリングデータとして管理しやすくするだけでなく、他科目と結果を容易に比較できるようにするため、本年度は授業アンケート結果について全科目名を示し、電子媒体を配布する方式にした。これにより、授業アンケート結果を参照しながら、授業参観する科目を選ぶことができる。

水産学部における授業改善の主な取り組みは、各教員によるシラバス作成 (Plan)、授業 (Do)、授業アンケート集計結果 (Check)、シラバス・テキストなどの修正 (Act) のサイクルで行われている。このPDCAサイクルを円滑に回すため、FD委員会では授業アンケートの集計と分析を行ってきた。しかし、これまでは集計結果を各教員に配布するのみであり、学部全体の取り組みに必要な情報分析が十分ではなかった。そこで、本年度は授業アンケート結果からより詳細なデータ解析を行い、学部全体として取り組むべき授業改善のありかたについて報告する。

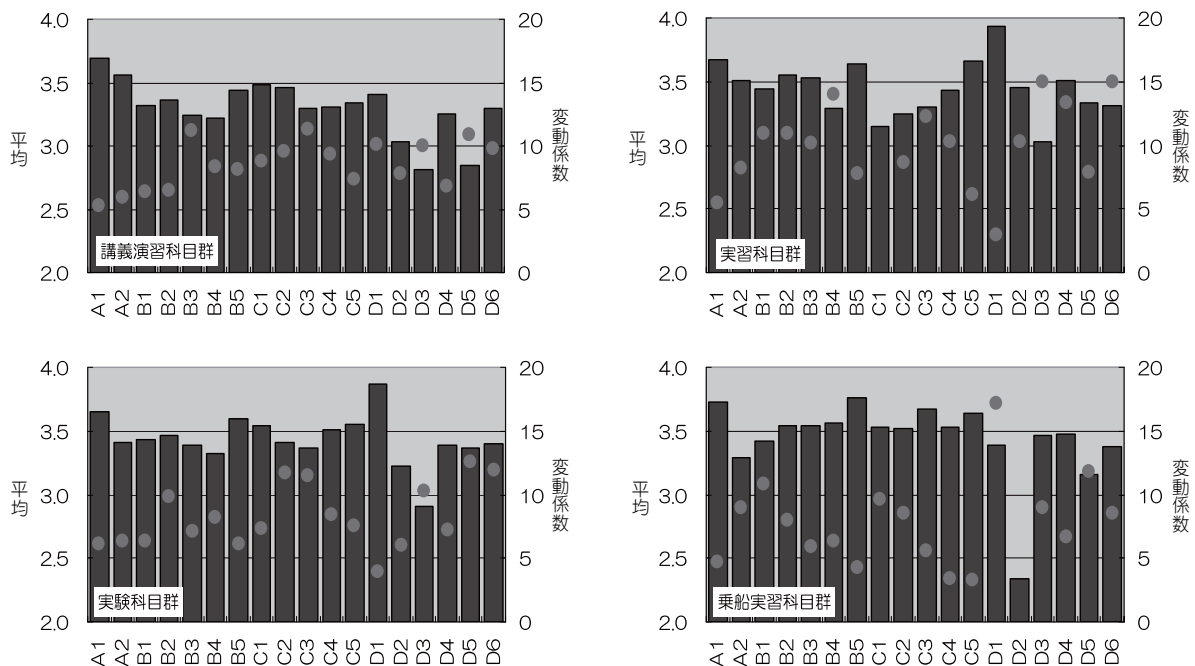


図1. 平成20年度前期の講義演習、実験、実習、乗船実習科目群で実施されたアンケート結果における、各項目の平均値と変動係数。変動係数は各科目群における科目間でのばらつきを示す。

(2) 授業アンケートはこのようにみるとおもしろい

図1は、平成20年度前期の授業科目で実施された授業アンケートにおける各項目のポイント平均と変動係数を示している。変動係数は、科目間における受講生の評価のばらつきを示し、これが高いほど科目によって評価が高かったものと低かったものがあることを意味している。アンケート項目において、A群は授業環境、B群は授業内容、C群は授業の進めかたに対する学生の評価、D群は授業に対する学生の意欲を示している。全体的には、講義演習科目群よりも実験や実習科目群で平均が高く、特に乗船実習科目群ではこの傾向が顕著であった。実践的科目群ほど、学生の評価や意欲が高いことを意味している。また、乗船実習科目群を除くとD3はいずれも3前後であり、授業内容とそれを理解するための基礎学力との間にギャップがあることが分かる。今後は、学部全体でこのギャップを埋めるための何らかの方策が必要となる。講義演習科目群においてはD3やD5のポイント平均が低く、これら2つの相関係数は0.52であることから、時間外での勉強が基礎学力の向上に役立つ可能性がある。また、B3やC3のポイントでは科目間でばらつきがあり、相関係数が0.86であることから、授業を進める際にできるだけ分かり易く説明すると受講生の理解度が向上できるとおもわれる。実験および実習科目群においては、D3のポイントが低くばらつきも大きいことが特徴的である。この項目において3ポイントより低かった科目では、講義演習での授業内容

との連携を強化する必要がある。乗船実習科目群においては、C2のポイントがかなり低くばらつきも大きい。履修にあたってシラバスを参照していないようなので、分野説明会などで周知する必要がある。

(3) 努力はむくわれる！：授業アンケートの大切さ

図2は、平成18年度前期以降の講義演習科目で実施された授業アンケートにおける各項目のポイント平均と変動係数を示している。平成17年度以前ではフォーマットが異なるため、この図からは除いている。変動係数は、科目間における評価のばらつきを意味している。B群は授業内容、C群は授業の進めかたに対する学生の評価、D群は授業に対する受講生の意欲を示している。D3を除けば、B群、C群、D群いずれも増加傾向にあることが分かる。これは、学部全体として授業に対する学生の評価が向上していることを意味しており、授業アンケート結果や授業参観によるフィードバックがうまく機能しているものとおもわれる。特に、受講生が意欲的に学ぼうとしていること、時間外での勉強が増えていることは、学部全体でのこのような取り組みが本質的に機能していることを示唆している。しかし、C4やD4を除くと変動係数に時間的な傾向は認められず、授業に対する評価や受講生の意欲が科目間で未だばらついていることも示されている。今後このばらつきを減らすためには、より活発に教員間で授業参観が行われるべきであろう。

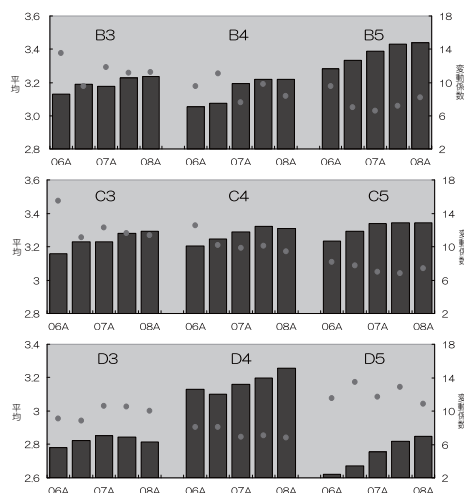


図2. 講義演習で実施された授業アンケートのB3～B5、C3～C5、D3～D5における平均値とその変動係数の経年変化。変動係数は各科目群における科目間でのばらつきを示す。

2. FD活動

教育システム運用マニュアル（第8版）では、教員の教授法の力量向上を目的として教育訓練を実施することになっている（IV-2.2.2）。水産学部・研究科FD委員会が主催した講演会等においては、「実施報告書」と「評価報告書」を作成して取りまとめている。

（1）ノートテーカー養成講座

聴覚障害学生の修学支援のひとつとして、前期および後期のノートテーカー養成講座を平成20年4月7日（月）～9日（水）、および平成20年9月26日（金）、29（月）、30日（火）に行った。前期および後期受講学生は、それぞれ14名と6名であった。受講生名や講座の内容等の詳細については、教務係に資料を保管している。

（2）FD講習会「学生の勉学意欲を向上させる学習支援とは」

平成20年12月17日（水）、水産学部・研究科FD委員会主催のもとで、講師3名によるFD講習会を開催した。主な内容は、3分野における学習支援のための分野目標の作成過程と取り組みの経過報告であり、これにより教職員相互の共通認識を深めた。参加者は学部内の教職員30名で、事前・事後のアンケートから学習支援手法への理解が深まったことも確認できた。

（3）教職員・学生参加によるFDワークショップ「学生への就学支援体制について」

平成20年12月17日（水）・19日（金）、水産学部・研究科FD委員会主催のもとで、「学生への就学支援体制について」をテーマに、二日間合計3時間にわたって活発な意見が出され、今後の学生の就学支援体制に対して貴重な情報を得ることが出来た。参加者は学部内の教職員22名と学生33名で、事前・事後の教職員アンケートからワークショップの意義が確認できた。

（4）平成20年度鹿児島大学水産学部「授業公開・授業参観」

前期では12科目、後期では13科目の合計25科目において、授業公開・授業参観が実施された。前期については6科目、後期は5科目で実施報告書

の提出があり、のべ参観者数は12名であった。

おわりに

FD委員会では本年度の授業アンケートの取りまとめとあわせて、平成18年度以降の授業アンケート解析を行った。これらの解析結果については、FD講習会やFDワークショップで得られた改善策ともあわせて、「よりよい教育環境を創るために－学生の、学生と教職員による、学生のためのファカルティ・ディベロップメントの取り組み」のパンフレットで学部の構成員に周知した。また特にFDワークショップで得られた、学生からの修学、就職活動などへの疑問点に答えるための「水産学部生あるあるQ&A」のパンフレットを作成、次年度の新入生と2年生に配布準備した。

平成20年度水産学部FD委員会

委員長	不破	茂
副委員長	四宮	明彦
委員	安楽	和彦
	荒木	亨介
	佐久間	美明
	小針	統

医歯学総合研究科FD活動報告

(文責：前医歯学総合研究科FD委員長 米澤 傑)

平成20年度の医学部FD委員会医歯学総合研究科部会の活動として、①FD講演会（医歯学総合研究科FD委員会、医学部FD委員会との共催）、②学生による授業評価、③教員による授業公開・授業参観を実施した。それぞれの活動について以下に概略を述べる。

1. FD講演会

平成21年1月26日（月）午後6時より、鹿児島大学医学部基礎講義実習棟1階・第2講義室において、理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター分化転換研究チーム・チームリーダー近藤亨（こんどうとおる）先生を講師として迎え、「いかに研究を遂行するかー人工グリオーマ幹細胞を用いた新規グリオーマ治療標的の探索ーをモデルとして」という講演会を開催した。この講演会は、医歯学総合研究科FD委員会と医学部FD委員会との共催により、大学院の「医学研究講義」を兼ねて開催された。

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科にとっては「入学定員の充足」は最も重要な課題の一つであるが、一方、「入学者の順調な学位取得」も医歯学総合研究科の発展に欠かせない重要な課題である。

そこで、近藤先生には、ご自身の研究の概要のご紹介をいただきながら、日常臨床から問題点を抽出し、基礎的研究手法を有効に駆使してその解決点を見出す研究を行い、その成果を臨床に還元するという一連の研究を遂行し、そしていかにして「論文」という形にまとめてゆくか、ということについての講演をお願いした。

近藤先生は、大阪大学大学院医学研究科博士課程修了（細胞工学センター、故岡田善雄教授）後、大阪バイオサイエンス研究所、特別研究員（長田重一郎（現京大教授）、日本学術振興会海外特別研究員としてロンドン大学MRC分子細胞生物学研究所（Martin Raff教授）、熊本大学発生医学研究センター・助教授（田賀哲也教授）、ケンブリッジ大学脳修復センター・グループリーダーを経て、

上記の現職にあり、癌幹細胞研究等で広く知られている。

癌幹細胞の研究分野においては、様々な悪性腫瘍が自己複製能・腫瘍形成能に富む少数の幹細胞様癌細胞（癌幹細胞）を頂点とする細胞のヒエラルキーから構成されていることが明らかにされるとともに、癌幹細胞は抗癌剤や放射線療法に耐性であることも報告され、癌治療の重要な標的としてその性状解析と特異的因子の検索が精力的に進められている。そのような中で、今回の講演会では、近藤先生の研究チームが研究成果を挙げている「悪性脳腫瘍をモデルとした癌幹細胞研究」についての世界最先端の研究内容の解説のみならず、その研究過程を紹介しながら論文を仕上げるといふ最終目標をいかに達成するかということにも詳細に言及がなされ、研究内容の紹介の中に研究達成のためのFDを絡ませるといふ特徴ある講演を聞くことができた。

講演会には、普段の「医学研究講義」の優に3倍の63名という出席者があり、医歯学総合研究科の大学院生はもちろんのこと、キャンパスの離れた工学部や、鹿児島市立病院からの聴講者もあり、医歯学総合研究科の主任教授も6名が出席した。午後6時より約1時間の講演の後、30分間にもわたる熱心な質疑応答があり、大変有意義なものであった。

医学部FD委員会医学科部会との共催による2回のFD講演会、「日本の臨床教育のめざす方向ー共用試験、国家試験、そして・・・」（講師：北村聖教授（東京大学医学教育国際協力研究センター）、日時：平成21年2月19日（木）午後5時～7時、会場：鶴陵会館中会議室）と、「スタンフォード大学医学部における学部・大学院教育（Medical and Graduate Education at Stanford Medical School）」（講師：Sara A. Michie教授（Stanford大学医学部）、日時：平成21年3月18日（水）午後5時～6時30分、会場：鶴陵会館中会議室）の詳細については、医学部FD委員会医学科部会長・小片守教授より報告される。

2. 学生による授業評価

前期と後期の年2回実施した。評価方法は、アンケート調査であり、“授業評価”について「シラバスに記載された学習目標が身に付いたか」「授業内容の質の高さ」「話し方の適切さ」「授業中の、教員の声の大きさ・明瞭さ」「授業の進行度合い」「教員の授業に対する熱意」「学生の質問に対する適切な対応」「テキスト・教材が授業の役に立っているか」「板書・視聴覚機器等が授業の役に立っているか」の9項目、“自己評価”について「この授業に取り組む姿勢（積極性）」「この授業の出席度合い」の2項目、そして、“総合評価”として「全体的な満足の度合い」の1項目、合計12の質問項目を設定し、それぞれに対して「評価 良

から「評価 悪」の5段階で回答してもらった。回収したアンケートは、担当教員にフィードバックした。

ただし、受講者数が少なく、アンケートに回答した学生が特定できるような場合には、無理に回答をさせない方式をとり、アンケート結果を報告するか否かは、授業担当教員に一任された。

前期においては、総ての授業科目を対象に実施した。実際のアンケート実施科目数及び実施率は47科目（実施率26.4%）、アンケート回収枚数及び回収率は391枚（回収率47.6%）であった。

平成20年度前期の評価結果を下の表に示す。概ね「評価3」以上の良好な結果であった。

学生による授業評価

項目	平成20年前期				
	178科目に対して、47科目で実施し計391名の回答				
	評価 良	評価 4	評価 3	評価 2	評価 悪
シラバスに記載された学習目標が身に付いたか	174	134	74	8	1
授業内容の質の高さ	219	136	36	0	0
話し方の適切さ	221	120	47	3	0
授業中の、教員の声の大きさ・明瞭さ	241	103	45	2	0
授業の進行度合い	214	125	48	4	0
教員の授業に対する熱意	239	119	32	1	0
学生の質問に対する適切な対応	233	101	57	0	0
テキスト・教材が授業の役に立っているか	190	109	87	4	1
板書・視聴覚機器等が授業の役に立っているか	202	127	62	0	0
この授業に取り組む姿勢（積極性）	146	152	85	7	1
この授業の出席度合い	227	90	63	8	3
全体的な満足の度合い	211	128	49	3	0

自由記述

- ・講義は、世界レベルのものも含まれとても興味深かった。
- ・社会人学生です。平日、日中（昼間）の出席はかなり困難です。夕、土、日ならば昼間の出席がどうか可能なのですが。
- ・回診に参加させていただきましたが、Dr.と自分との間にかかなりの病識の差があることを痛感し早く臨床の場で様々な疾患についての勉強に励みたいと思いました。
- ・自分の知識不足からついていくのが大変なところもありますが、内容については非常に満足しております。
- ・大変ためになる講義でした。
- ・今後の研究に参考となるような実験手技の習得ができた。
- ・良い環境に感謝しています。
- ・フィールドワークを通して具体的な実験方法やデータ処理について学ぶことができました。指導を受けた内容についての習得は自己の努力がますます必要となってきたことを感じています。
- ・社会人のため実験を継続するのが困難です。今後の課題です。
- ・概ね満足しています。
- ・明確で理解しやすく心遣いの感じられる講義でした。
- ・テキストは毎日持ち歩いて目を通してしています。
- ・懇切丁寧に指導していただいて感謝しております。
- ・とても興味深く今後も学んでいきたいと思います。
- ・実際に数字を使った例題がたくさんあるととても理解できると思います。
- ・講義スライドをアップしていただけたので予習、復習等に大変便利でした。
- ・説明だけでは理解するのは難しかったです。

- ・ 講義内容を毎回事前にネット上に出していただきっておりプリントアウトして講義に望めてとても役に立ちました。
- ・ シラバス上に提示された参考書が非常に古い本で本の内容も講義と少し差がありもっといい参考書があるように感じました。
- ・ とても難しかったです。もっとゆっくり授業が受けたかったです。
- ・ 授業はよかったのですが内容が難しかったので理解することが大変な内容だと感じました。
- ・ 復習を行わないと理解が難しかった。
- ・ 多数の資料が財産となり今後の利用価値が高い。
- ・ とても丁寧な授業だったと思います。
- ・ フィールド調査における計画実施の部分は身についたように思います。
- ・ フィールド調査は、昨年度と比べると私自身手際良くなったように思います。
- ・ 講義内容についてはもちろんの事それ以外の事にも資料等を提供していただき自分の研究内容に生かすことができました。
- ・ 研究分野に関する論文を様々な観点から紹介していただいて幅広い知識をうることができました。
- ・ 質問しやすい講義だったので大変ためになりました。
- ・ 時間的余裕があればもっと講義を聞きたかった。
- ・ 学生への指導に熱意を感じられた。
- ・ 実践的な内容であり論文作成にあたっても有用な内容であった。
- ・ 明快で分かりやすい講義でした、初心者にも興味がわいたと思います。講演の声がもう少し大きければさらに活気ある講義になると思います。
- ・ 非常に丁寧に授業をしていただいた。自分にとっては専門外の内容ではあったが、先生の専門の学会、学術誌などを紹介していただき新しい知見および自信の興味の幅が広がった。
- ・ 講義の順序が基礎から応用となっていればもっと理解できたのではなかったかと思う。
- ・ 全体的にとっても興味深い内容でした。しかし、専門的な内容がたくさん出てきたりして理解が難しい内容もありました。
- ・ 社会人学生ですが仕事の兼ね合いもあって極力遅刻しないようにと努力していますが、やはり遅刻する事が多いです。申し訳なく思っております。レジュメやプリントなどがありましたら助かります。また、先生方にマイクを使っていただけると幸いです。
- ・ 授業で使われたスライドのプリントがあれば一層理解がしやすかった。
- ・ 授業の進行のペースが早かったです。
- ・ 実際に離島医療の現状を学べて良かった。
- ・ 仕事が終わらず授業に出席することが困難であった。もっと出席したかった。
- ・ 後で見直せるようにレジュメ、資料が欲しかった。
- ・ 授業で学んだことが実習でさらに身につけてよかったです。
- ・ 基本的なことを勉強することができました。
- ・ 最新の情報を効率的にいただいて将来の研究に役立つと思っております。
- ・ 社会人の学生にとっては授業への出席自体が困難です。

教員による改善報告書への具体的な記載事項は以下のとおりである。

- ・ 今後とも分かりやすく具体例を示しながらの講義を行いたい。
- ・ すべての項目において、レベル5が100%であった。学生に高く評価されていることをしており今後もこの授業を続けていきたいと思う。
- ・ 演習は、アンケート対象者が1名なのでコメントできない。講義は、13名のアンケートが行われているがこれも統計的な意義は低い。
- ・ 対象が1人の時は、個人が識別できるのでアンケートの意味はないように思います。
- ・ アンケートに対する回答をもっと多くの人に頂きたい。
- ・ 自分では70%ぐらいと評価していますが、授業を受ける立場から正直に評価すればそれ以下の項目があっても仕方ないと思っています。従ってすべて100%評価はでき過ぎで遠慮などが働いていると考えざるを得ません。ただ大学院に関して最も重要な評価が問われるのは結局は学位を取得できるように指導して貰っているか否かでパワハラなど特別な状況がない限りこのようなアンケートでは実態が掴めないのではと思います。
- ・ 受講生の少ない講義ではアンケートを行う意味はないのではないかと思います。
- ・ 係で授業アンケートを行っていただけると正直な感想を得ることができると思います。

後期においては、演習、実験および実習科目や3人以下の授業は除いて実施した。実際のアンケート実施科目数22科目、アンケート回収枚数

及び回収率は64枚（回収率25%）であった。平成20年度後期の評価結果を下の表に示す。概ね「評価3」以上の良好な結果であった。

学生による授業評価

項目	平成 20 年後期				
	22 科目に対して、12 科目で実施し計 64 名の回答				
	評価 良	評価 4	評価 3	評価 2	評価 悪
シラバスに記載された学習目標が身に付いたか	28	24	11	0	1
授業内容の質の高さ	42	15	6	0	1
話し方の適切さ	43	11	9	0	1
授業中の、教員の声の大きさ・明瞭さ	42	14	5	1	2
授業の進行度合い	41	13	9	0	1
教員の授業に対する熱意	45	13	5	0	1
学生の質問に対する適切な対応	44	10	9	0	1
テキスト・教材が授業の役に立っているか	37	14	11	1	1
板書・視聴覚機器等が授業の役に立っているか	43	13	7	0	1
この授業に取り組む姿勢（積極性）	27	21	14	1	1
この授業の出席度合い	40	14	7	2	1
全体的な満足度合い	37	20	5	1	1

自由記述

- ・いいです。
- ・とても勉強になった。今後の研究のためになる講義があった。
- ・おもしろかったので良い経験になりました。
- ・実際に実験などの映像がありとてもおもしろかった。あまり実感として分からないことを少しでも知ることができた。
- ・とても熱心に講義していただき内容も興味深いものでした。また、講義を聴いてみたいと思いました。
- ・講義のスライドなどを頂けたらすごくありがたかったです。
- ・大変ためになる講義でした。
- ・前もって講義に関する資料が配付されていたので講義で判りづらい部分も後で資料を読み返すことができたので良かったと思う。
- ・今後の研究と仕事に役立てたいと思います。
- ・様々な先生方にご講義いただき基礎から学ぶことができました。また、授業の進行も段階的でありとても勉強になりました。
- ・様々な分野の先生のお話が聞けて有意義な時間となりました。
- ・臨床の現場での話や基礎の話まで聞けて良かったと思います。また専門以外の話も聞けて本当に為になりました。

教員による改善報告書への具体的な記載事項は以下のとおりである。

- ・項目分析で授業評価番号だけでなく設問内容を付記していただきたい。また、3次元グラフにして角柱（円）で表示すれば1ページで済むのではないのでしょうか。
- ・アンケートは対象者が1年生であった。最終的には4年生の時点でこの授業がどのように役だったかが問題になると思います。

3. 教員による授業公開・授業参観

教員による授業公開・授業参観を平成20年12月1日から12月22日までの期間に実施した。延べ10科目が授業公開されたが、今回は残念ながら

いずれの科目にも参観者が無かった。これまで毎年期間中40名前後の参観者がいたことを考えると、今年度は課題が残った。

保健学研究科FD委員会活動報告

平成20年度の保健学研究科FD委員会の活動として、①FD研修会、②学生による授業評価、③教員による修士論文発表の評価、④FD活動を契機とした授業方法・内容改善についてのアンケート調査を実施した。それぞれの活動について以下に概略を述べる。

1. FD研修会

平成21年3月8日、「病院と地域の連携における看護職の役割」をテーマに医学部保健学科との共催で研修会を実施した。研修会のプログラムは、以下に示すとおりであった。

I 基調講演 13:35～15:20

「在宅ケアの質を高める看護連携のあり方：病院看護師と地域看護職の役割」

講師：Elizabeth Mardigan, RN, PhD,
Associate Professor of Nursing and Associate
Dean for International Health, Frances Payne
Bolton School of Nursing, Case Western
Reserve University, Head of WHOCC for
Home Care Nursing

座長：鹿児島大学医学部保健学科
総合基礎看護学講座教授 八代利香

II シンポジウム 15:35～16:55

「看護職の地域連携－鹿児島の現状と課題」

- ・鹿児島大学医学部・歯学部附属病院地域医療連携センター
看護師長 川添 久子
- ・ナカノ訪問看護ステーション
所長 泊奈津美、看護師 富貴田景子
- ・鹿児島県大隅地区振興局
保健師 古川恵美子

座長 鹿児島大学医学部保健学科
地域看護・看護情報学講座教授
小林 奈美

研修会への参加者は118名であり、開催時にアンケート調査を行った。78名からアンケートの回答が得られ(回収率66.1%)、その結果を下に示す。回答者の内訳は、病院・診療所職員33名、訪問看

護ステーション職員17名、自治体職員5名、保健学科教員5名、学生11名、その他7名であった。

1) 企画および内容について(項目を設定しての質問)

(1) プログラム全般

1. テーマ・容は、

回答	人数	%
非常に良い	27	36.0
良い	42	56.0
普通	6	8.0
あまり良くない	0	0
良くない	0	0

2. 開催時期は、

回答	人数	%
非常に良い	18	24.0
良い	45	60.0
普通	10	13.3
あまり良くない	2	2.7
良くない	0	0

3. 開催時間は、

回答	人数	%
非常に良い	19	25.3
良い	39	52.0
普通	13	17.3
あまり良くない	4	5.3
良くない	0	0

4. 開催場所は、

回答	人数	%
非常に良い	22	29.7
良い	39	52.7
普通	11	14.9
あまり良くない	2	2.7
良くない	0	0

5. 運営は、

回答	人数	%
非常に良い	24	32.0
良い	43	57.3
普通	8	10.7
あまり良くない	0	0
良くない	0	0

(2) 基調講演

1. 講演時間は適切だった。

回答	人数	%
強くそう思う	29	37.2
ややそう思う	41	52.6
どちらでもない	5	6.4
あまり思わない	3	3.9
全く思わない	0	0

2. 講演内容はわかりやすかった。

回答	人数	%
強くそう思う	31	39.7
ややそう思う	34	43.6
どちらでもない	11	14.1
あまり思わない	2	2.6
全く思わない	0	0

3. 講演内容は今後の参考になった。

回答	人数	%
強くそう思う	30	38.5
ややそう思う	35	44.9
どちらでもない	10	12.8
あまり思わない	3	3.9
全く思わない	0	0

4. 質疑応答の時間は適切だった。

回答	人数	%
強くそう思う	29	37.7
ややそう思う	38	49.4
どちらでもない	9	11.7
あまり思わない	1	1.3
全く思わない	0	0

(3) シンポジウム

1. 発表時間は適切だった。

回答	人数	%
強くそう思う	29	37.7
ややそう思う	38	49.4
どちらでもない	9	11.7
あまり思わない	1	1.3
全く思わない	0	0

2. 発表内容はわかりやすかった。

回答	人数	%
強くそう思う	31	43.1
ややそう思う	36	50.0
どちらでもない	4	5.6
あまり思わない	1	1.4
全く思わない	0	0

3. 発表内容は今後の参考になった。

回答	人数	%
強くそう思う	31	43.1
ややそう思う	36	50.0
どちらでもない	4	5.6
あまり思わない	1	1.4
全く思わない	0	0

4. 質疑応答の時間は適切だった。

回答	人数	%
強くそう思う	23	32.4
ややそう思う	39	54.9
どちらでもない	6	8.5
あまり思わない	2	2.8
全く思わない	1	1.4

2) 研修会全般についての意見 (自由記載・抜粋)

- ・各部署 (病院、地域、保健師、訪問ステーション) から、他部署への具体的な要望などあげてもらい、お互いの気付きになり、自分の組織の見直し、お互いの協力面について、考えていければと思う。

- ・研修会開催の報告として、県内の病院など医療管轄へ情報を流して欲しい。看護師、保健師、医師、ST、etc・・・鹿児島の医療スタッフに今回の開催について知ってほしい。
- ・ガン看護を中心とした病院なので、地域連携、在宅ケアには興味があった。もう少し整理しなければいけないことがたくさんあると思った。
- ・患者さん、家族自身がマネージメントできるような声かけ、退院入院時の情報提供の仕方を検討しながら、シームレスな支援ができるようにしたいと思う。
- ・シンポジウムによって訪問看護のあり方がよく見えてきた。医療の現場から家庭に帰るための施設があることなど、きちんと説明していける気がする。
- ・地域医療支援病院としての役割を果たすことができるために、大いに役立てられる内容だった。スタッフへの伝達も含め現場に生かして行きたい。
- ・病院から訪問看護への連携、保健師への連携、今後は道が広がったと考え、共有させていただき、活用させていただきたいと思う。アメリカより恵まれている日本、いろんな面でまだ福祉も充実しているということがよく理解できた。
- ・看護職の連携により、さらに何ができるのか考えながら取り組んでいきたい。
- ・病院と地域との連携、主治医先と地域との連携が上手くできているところ、困難なところがある。一人の利用者を通じて、もっと連携がスムーズに行え、利用者を支え、日本の医療が元氣になれたらと感じた。
- ・米国のヘルスケアシステムの現状を知ることができたのは、とても重要だった。鹿児島にいるとなかなか国際的に視点を持たずに活動することが多いので、この様な機会をぜひお願いしたいと思う。地域連携、訪問看護、保健師の方々のそれぞれの活動を聞く事ができ、これからの活動につなげていきたいと思う。(同職でも相手が何をしているのか分からないことがある・・・と認識した。)
- ・大変参考になり、これからどう三者を結びつけるかということがわかってきた。それぞれが何をやるかでなく、患者、利用者さんがこうありたい、こうしたい、こう生きたいというところ

へ手を差し伸べて行くことを行っていくことが最も重要なことだ。そうすることで、おのずと三者が結びついていくのだ。

- ・地域の中での在宅での生活を維持していきたい。その人がその人らしく地域間の連携が必要なことを確認しておく・・・確認したい。世界にも目を向ける意識を気付かされた。
- ・現在1年生だが、これから多くのことを学んでいく中で、様々な「看護」について考えていきたいと思った。
- ・現在看護学専攻の1年なので、今日聞いたお話しは全て新鮮だった。今回、マディガン先生の話と八代先生の話の言葉が心に残っている。世界に目を向け、今後の授業に生かしたい。
- ・鹿児島で国際看護を考えることなどできると思っていなかった。ぜひ今後もあって欲しい。

2. 学生による授業評価

平成20年度は、前期16科目、後期5科目で学生による授業評価を実施した。評価方法は、アンケート調査であり、調査票には以下に示す質問項目と授業についての意見を述べる自由記載欄を設定した。質問項目5は、「0回」「1・2回」「3・4回」「5回以上」の選択肢から回答してもらい、その他の質問項目に対しては、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」「どちらかと言えばそう思わない」「そうは思わない」「判らない」の選択肢から選び、回答してもらった。

あなた自身について

- 1 この授業のシラバスを前もって読みましたか
- 2 この授業の予習又は復習をしましたか
- 3 この授業科目に関連する本(参考書や文献等)を読みましたか
- 4 授業中にノートをとりましたか
- 5 この授業を何回位欠席しましたか

授業に対する評価

- 6 授業はシラバスに沿った内容でしたか
- 7 配布資料は適切であり、授業に役立ちましたか
- 8 授業内容に興味がありましたか
- 9 授業の進め方は適切でしたか

- 10 教員は授業に対する熱意がありましたか
- 11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか
- 12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか
- 13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか
- 14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか

アンケート調査の結果を前期、後期ごとに以下の表に示す。この表では回答を、1:「そう思う」、2:「どちらかと言えばそう思う」、3:「どちらかと言えばそう思わない」、4:「そうは思わない」、5:「判らない」(質問項目5のみ、1:「0回」、2:「1・2回」、3:「3・4回」、3:「5回以上」)として表している。また、オムニバス方式で開講されている科目は、担当教官ごとに評価を行ったため分析対象とした調査票の数は、前期203、後期41となっている(質問項目によっては、未記入の場合もあり、合計がこの数に満たないものもある)。

「授業に対する評価」では、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答している者が多く、概ね良好な評価が得られたが、「あなた自身について」の回答結果からは、シラバスの利用、予習・復習、さらに関連する文献等での学習の不足がうかがわれた。

この学生による授業評価の結果は、当該科目の調査票と共に担当教員にフィードバックした。

平成20年度前期 学生による授業評価の結果

回答では、1:「そう思う」、2:「どちらかと言えばそう思う」、3:「どちらかと言えばそう思わない」、4:「そうは思わない」、5:「判らない」(質問項目5のみ、1:「0回」、2:「1・2回」、3:「3・4回」、3:「5回以上」)を表している。

質問項目	1 この授業のシラバスを前もって読みました				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	90	56	35	15	4
%	45.0	28.0	17.5	7.5	2.0
質問項目	2 この授業の予習又は復習をしましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	58	61	52	28	1
%	29.0	30.5	26.0	14.0	0.5
質問項目	3 この授業科目に関連する本(参考書や文献等)を読みましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	54	76	40	22	0
%	28.1	39.6	20.8	11.5	0
質問項目	4 授業中にノートをとりましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	111	54	25	8	0
%	56.1	27.3	12.6	4.0	0
質問項目	5 この授業を何回欠席しましたか				
回 答	1	2	3	4	-
人 数	150	36	4	1	-
%	78.5	18.9	2.1	0.5	-
質問項目	6 授業はシラバスに沿った内容でしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	130	50	6	3	9
%	65.7	25.3	3.0	1.5	4.6
質問項目	7 配布資料は適切であり、授業に役立ちましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	150	37	4	1	6
%	75.8	18.7	2.0	0.5	3.0
質問項目	8 授業内容に興味が持てましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	156	38	4	1	1
%	78.0	19.0	2.0	0.5	0.5
質問項目	9 授業の進め方は適切でしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	155	40	4	0	1
%	77.5	20.0	2.0	0	0.5
質問項目	10 教員は授業に対する熱意がありましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	159	40	1	0	0
%	79.5	20.0	0.5	0	0
質問項目	11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	163	26	4	2	0
%	84.0	13.0	2.0	1.0	0
質問項目	12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	172	26	3	0	0
%	85.6	12.9	1.5	0	0
質問項目	13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	162	33	2	1	2
%	81.0	16.5	1.0	0.5	1.0
質問項目	14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	158	38	4	1	0
%	78.6	18.9	2.0	0.5	0

平成20年度後期 学生による授業評価の結果

回答では、1:「そう思う」、2:「どちらかと言えばそう思う」、3:「どちらかと言えばそう思わない」、4:「そうは思わない」、5:「判らない」(質問項目5のみ、1:「0回」、2:「1・2回」、3:「3・4回」、3:「5回以上」)を表している。

質問項目	1 この授業のシラバスを前もって読みましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	15	16	3	7	0
%	36.6	39.0	7.3	17.1	0
質問項目	2 この授業の予習又は復習をしましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	7	16	14	4	0
%	17.1	39.0	34.2	9.8	0
質問項目	3 この授業科目に関連する本(参考書や文献等)を読みましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	7	17	12	5	0
%	17.1	41.5	29.3	12.2	0
質問項目	4 授業中にノートをとりましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	21	13	5	2	0
%	51.2	31.7	12.2	4.9	0
質問項目	5 この授業を何回欠席しましたか				
回 答	1	2	3	4	-
人 数	26	13	1	0	-
%	65.0	32.5	2.5	0	-
質問項目	6 授業はシラバスに沿った内容でしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	29	10	2	0	0
%	70.7	24.4	4.9	0	0
質問項目	7 配布資料は適切であり、授業に役立ちましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	36	4	1	0	0
%	87.8	9.8	2.4	0	0
質問項目	8 授業内容に興味を持っていましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	36	5	0	0	0
%	87.8	12.2	0	0	0
質問項目	9 授業の進め方は適切でしたか				
回 答	1	2	3	4	5
度 数	33	8	0	0	0
%	80.5	19.5	0	0	0
質問項目	10 教員は授業に対する熱意がありましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	34	7	0	0	0
%	82.9	17.1	0	0	0
質問項目	11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	39	2	0	0	0
%	95.1	4.9	0	0	0
質問項目	12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	37	4	0	0	0
%	90.2	9.8	0	0	0
質問項目	13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	36	5	0	0	0
%	87.8	12.2	0	0	0
質問項目	14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか				
回 答	1	2	3	4	5
人 数	34	6	1	0	0
%	82.9	14.6	2.4	0	0

3. 教員による修士論文内容の評価

修士論文発表会において発表内容について教員が評価を行った。対象となった学生は、12名であった。評価項目は、「発表の態度・仕方はよかったか」「発表の内容は良かったか」「スライド等はよく整理され分かりやすかったか」「質問に対して的確に答えていたか」「独自の発想で研究したことが感じられたか」であり、秀(5点)・優(4点)・良(3点)・可(2点)の4段階で評価した。結果は、各指導教員にフィードバックした。

4. FD活動を契機とした教育方法・内容改善についてのアンケート調査

研修会、学生による授業評価、教員による修士論文発表の評価などのFD活動を契機として教育方法・内容等で改善された点を明らかにするためにアンケート調査を平成21年3月に実施した。報告された改善点の例を以下に示す。

- ・授業終了後に、当日の授業内容のディスカッション時間を設けた。
- ・学生参加型の授業を多く取り入れて、興味を促すようにした。
- ・学生による授業評価をきっかけとして、基礎的な力が身につけていない学生が多いことに気づき、自主勉強会をサポートすることに繋がった。
- ・昨年度より開始した前期課程1年の研究計画発表会(昨年は2月開催)を、前期授業終了後の8月に前倒して実施し、研究計画立案指導の有効性を高めた。
- ・FD活動がきっかけとなって理学療法学専攻内で論文予備審査会を行うようになった。修士・博士論文の予備研究が終了した時点で学生が発表を行い、各教員がアドバイスをを行っている。この活動により論文のレベルが向上してきていると考える。
- ・論文作成にあたって必要な研究デザインやデータ処理の方法を授業の中で説明する機会を設けた。
- ・研究分野の関連する学会、研修会に参加した際にトピックとなる情報を大学院の授業に盛り込むように工夫を行った。

(文責 平成20年度保健学研究科FD委員長:築瀬 誠)

理工学研究科FD報告

本学大学院理工学研究科は、表1に示す博士前期課程工学系8専攻、理学系4専攻、および博士後期課程工学系3専攻、理学系1専攻で組織され、ナノ構造先端材料高専以外の博士前期課程の各専攻は、それぞれ工学部および理学部の同名の学科において学士課程の教育も行っている。

表1 理工学研究科の専攻

	博士前期課程	博士後期課程
工学系	機械工学	物質生産工学
	電気電子工学	
	建築学	
	応用化学工学	システム情報工学
	海洋土木工学	
	情報工学	
	生体工学	
ナノ構造先端材料工学	ナノ構造先端材料工学	
理学系	数理情報科学	生命物質システム
	物理学	
	生命物質化学	
	地球環境科学	

鹿児島大学大学院理工学研究科では、昨年（平成19年）5月に新しく「鹿児島大学大学院理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会規則」を制定し、「理工学研究科の理念・教育目標に基づき教育の内容及び方法の改善を図る。」ことを目的として組織的な活動を開始した。今年度（平成20年度）は2年目の活動になる。

本報告書では、1. 理工学研究科の教育目標の公表など、2. 平成19年度理工学研究科FD活動、3. 博士前期課程の授業評価結果、4. 今後FD活動への期待、について簡単に述べる。

詳細は「平成20年度鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメント委員会活動報告書」を参照願えれば幸いである。

1. 理工学研究科の教育目標の公表など

本理工学研究科においても、法制度化される以前から個々の専攻あるいは教員並びに学生が実質的に「世界に通用し活躍しうる人材」の「養成」とへの「成長」を目指して従前より教育改善に取り組んできた。なお、研究科の組織に関わる全ての教員と学生が目的・目標を共有する証として、

研究科教務委員会を中心とした検討により、平成20年度入学者用の博士前期課程並びに後期課程それぞれの履修要項には、各専攻の教育目標、あるいは前期課程（修士課程）のコースワーク、成績評価基準等について明示・公表しているため、これらを参照されたい。

2. 平成20年度理工学研究科FD活動の概要

平成20年度開催の理工学研究科FD委員会の主な議題を表2-1に示した。以下に活動の概要や結果を簡単に述べる。理工学研究科の博士前期課程各専攻のFD委員は、全員が学部の学科FD委員を兼務し一部の委員は博士後期課程の各専攻の委員をも兼務している。第1回理工学研究科FD委員会（平成20年5月22日開催）において、平成20年度の活動方針と計画を協議することから、本年度の委員会活動を開始した。昨年度（平成19年度）の本活動報告書に詳述されているように、昨年9月に開催された理工学研究科のFD委員会を経て実質的な組織的活動を開始してから、本年度は2年目の活動になる。そこで、基本方針としては昨年度の委員会における慎重な議論に基づく活動を継続し発展させることとし、活動としては、1) 「学生による授業評価アンケート」の実施と集計結果の分析、2) 継続課題となっている理学系専攻と工学系専攻で別々の記載様式であった「授業計画改善書」の統一記載様式の検討、3) FD講演会の開催、全学FD企画への参加推進、4) FD活動を記録総括する報告書の作成、5) その他、中期計画の平成20年度実施計画事項のうち本委員会が主導実行すべき事項、を行うことを計画した。なお、各活動は、表2-2に示した活動担当者を主体にして実行された。

2.1 学生による授業評価アンケートの実施、及び結果の集計と分析について

昨年度の委員会において、大学院における授業アンケートの意義・目的・方法・結果の分析、等々についての様々な議論や検討を踏まえて、授業評価のアンケートが昨年度後期の授業から実施された。大学院の授業形態は、受講人数の規模の大

表2-1 平成20年度理工学研究科FD委員会の主な議題等

回	開催年月日	議題等
第1回	平成20年5月22日	議題1 平成20年度年度計画について 1-1) 授業アンケートの実施 1-2) 授業計画改善書（昨年度委員会からの送り事項） 1-3) FD講演会 1-4) 活動報告書 1-5) 全学FD企画への参加等（学部FD委員会を基本に） 1-6) 中期計画平成20年度実施計画事項 1-7) 活動担当委員 1-8) その他 議題2 その他
第2回	平成20年6月26日	議題1 平成20年度前期授業アンケートと実施に伴う作業確認について 実施時期、用紙等の配布、回収作業、集計作業、その他 議題2 授業計画改善書について（継続審議事項） 議題3 その他、
第3回	平成21年1月22日	議題1 FD講演会について 講師等、催日時、準備と世話人、報告書作成者 議題2 授業アンケートの集計と分析、および授業計画改善書について 集計作業および集計結果の配信日程、分析および報告について 議題3 平成20年度活動報告書作成について 目次、執筆担当、編集作業日程 議題4 その他
第4回	平成21年3月10日	議題1 平成20年度の理工学研究科FD活動報告書作成要領の再確認 について（継続） 目次と執筆担当者の確認、原稿作成要領、原稿締め切りと提出先 議題2 次年度FD委員会への引継ぎ事項（案）等について 2-1) 継続委員と交代委員 2-2) 全学FD委員会へのH21年度本委員会活動経費の予算申請等 2-3) 新委員会への提言等 2-4) その他 議題3 その他

表2-2 平成20年度理工学研究科FD委員会の主な活動担当委員

番号	主たる活動	担当委員
1	授業評価アンケート 一部修正と集計 実施	二宮（情報）、三隅（海土）、永吉（物理） 各専攻委員、事務
2	授業改善計画書の記載様式の原案策定	松本（委員長）、宮嶋（副委員長）
3	FD講演会の企画および準備	宮嶋（副委員長）、片野田（機械） 伊地知（応化工）、門川（ナノ構造先端材料）
4	活動報告と総括（各専攻アンケート結果分析等）	正副委員長、各担当委員、各専攻委員

小、教科書や教材等の種類、輪講あるいは課題発表形式、演習あるいはゼミナール等々、非常に多様であり、加えて、一般論としては学生の学習意欲は旺盛であり専門的基礎学力等も十分精査の上入学しているはずである等の様々な議論を経てアンケート項目と回答様式が決定されている。本年度も、昨年度と同一の方法で学生による授業評価アンケート調査を実施した。ただし、設問の意味を分かりやすくするため、一部に修正を加えた。集計結果は教員へフィードバックし個々の科目の授業計画改善作成に資すると同時に、アンケート

項目に対する各専攻の平均値を算出し、各専攻の教育改善に資することとした。

なお、本報告では項を改め、第3項に博士前期課程の授業評価アンケートの結果を紹介する。

2.2 博士後期課程授業アンケート

本年度は、実質的な活動は行っていない。

2.3 授業評価アンケートの活用と授業改善計画等について

昨年度の委員会において、本学の中期計画にお

ける平成19年度計画に記載された事項、「学生による授業評価をもとに、教員による授業計画改善書の提出を求め、授業改善に努める。」に対して協議した結果、昨年度（平成19年度）は教員が所属する理学系及び工学系のそれぞれの様式で従前同様に授業計画改善書を提出することとし、本年度（平成20年度）から記載様式を統一することが申し送られていた。そこで、記載様式を協議し、前期および後期の授業アンケート結果の返却時に授業計画改善書の提出を依頼することとした。授業計画改善書の様式の詳細は「平成20年度鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメント委員会活動報告書」を参照されたい。

2.4 FD講演会について

FD講演会に関しては、昨年の報告書においても述べられているように、「大学院は、当該大学院の授業及び研究指導の方法及び内容並び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。」ことに対してFD活動としての意味を疑問視する意見もある。しかし、改善を図るためのPDCAサイクルのいずれの段階においても、私たちの大学院教育の長所や短所を分析したり、認識したり、新しく考えることが必要である。講演会により得られる知見がPDCAの一助となることは確かであり、FD活動における講演会の意義は色あせるものでないと思われる。

昨年度は、カナダのトロント大学の川路正裕教授に「欧米の大学・大学院における教育と研究の現状」と題した講演を依頼し、第1回のFD講演会を開催した。第2回FD講演会の開催に関して、日本学術振興会の競争的教育プログラムに採用され「鹿児島大学における大学院育の国際化—東南アジア地域との連携を考える（仮題）」のシンポジウムを研究科FD委員会と共催で開催したい旨提案があり了承された。しかし、同ITP (International Training Program) 国際シンポジウムは、鹿児島大学として開催されることになり見送られた。

ところで、本学の中期目標・中期計画にあって、(2)教育内容等に関する目標を達成するための措置において、大学院教育を中心としておいては、以下のような計画を掲げている。

○海外を含めた他の教育研究機関との有機的な

連携に努める。

- 16年度
 - ・海外を含む他大学、研究機関との間で単位認定や研究指導委託の制度を検討する。
 - ・大学院学生に海外を含む他大学・研究機関での研究が可能となる修学環境を整備する。
 - ・研究所等他機関との連携を図り、大学院での授業内容や研究指導の充実を図る。
- 17年度
 - ・連携大学院制度等を活用した教育および研究指導を進める。
 - ・研究所等他機関との連携を図り、大学院での授業内容や研究指導の充実を図る。
- 18年度
 - ・博士前期または後期課程の一学期を、海外を含めた他大学、他研究機関で研究や研修するプログラムを構築する。
 - ・連携大学院制度等を活用した教育および研究指導委託を引き続き推進する。
- 19年度
 - ・大学院在学中に、海外を含めた他大学、他研究機関で研究・研修する制度を推奨する。
- 20年度
 - ・単位互換制度を利用した大学院生等の研修をさらに推進する。

これらの計画に共通のキーワード「海外を含めた他大学、他研究機関で研究・研修する修学環境や教育プログラム」の学内における実施例について学習することがFD講演会実施担当グループで企画された。第3回の委員会において事前了承されていたとおり、理学部及び工学部そして全学のFD委員会の共催によりFD講演会を平成21年3月10日に開催した。

講演は、(1)「理工系学生にとっての海外ネットワークの活用」—地方大学におけるMOT (Management of Technology) 教育の観点から—と題して本学産学連携推進機構・石原田秀一先生、および(2)「若手研究者インターナショナル・トレーニングプログラム (International Training Program) による大学院教育の活性化」と題して本学理学部・鈴木英治先生に講演をしていただいた。

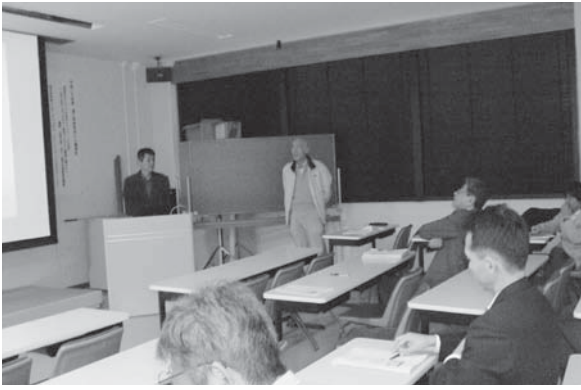


写真 2-1 平成 20 年度理工学研究科 FD 講演会

講演内容等の詳細は「平成20年度鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメント委員会活動報告書」を参照されたい。

なお、全学のFD委員会主催の教育（FD）講演会においては、「学士課程と大学院の教育をめぐって」と題して、お茶の水女子大学学長（中央教育審議会大学分科会制度・教育部会部会長）郷通子先生の御講演を拝聴する機会も平成20年12月19日に得ており、「日本の大学院教育の将来構想および俯瞰図」と「本学の実践現場」を対比して大いに勉強になったと思われる。

3. 博士前期課程授業評価アンケートの結果（平成19年後期－平成20後期）

昨年度（平成19年度）前期まで、工学系専攻と理学系専攻はそれぞれ独自の方法で博士前期課程の学生による授業評価アンケートを実施していたが、大学院の実情に合わせたアンケート項目を検討し、平成19年後期から博士前期課程全専攻を対象にしたアンケートを実施した。

アンケートの設問は以下に示すように15項目からなり、A授業内容、B授業方法およびC受講態度等に大別される。アンケート用紙および回答用紙は昨年度の本報告書を参照されたい。

（A授業内容等について）

- ① シラバス（この授業のシラバス記載内容は受講申請に役立ち、問題意識を持って授業に臨むことが出来た。）
- ② 理解度（授業はほぼ理解でき、学習目標は達成できそうだ。）
- ③ 研究に（役立つ）（授業の内容は自身の研究を進める上で役立つと思う。）
- ④ 仕事に（役立つ）（授業の内容は目指す（職

業上の）高度専門知識として役立つと思う。）

- ⑤ 教養に（役立つ）（授業の内容は自身の教養や学力を高める上で役立つと思う。）
- ⑥ 学部と（連続性・関連性）（学部で学習したこととの連続性・関連性が十分あった。）

【自由記述 A】 授業内容全般について感想・考えた点など、改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。特に、理解できない場合にはどこに原因があると考えますか。

（B授業方法等について）

- ⑦ 授業様式（授業はどのような様式ですか、担当教員の指示に従って回答してください。（専門書籍、原著論文には外国語によるものを含みます。））
- ⑧ 教材や授業方法（使用した教科書や教材は授業の理解に役立った。（使用しなかった場合には記入しなくて良い。）輪読形式等の場合は、授業方法と手段は適切であった。）
- ⑨ 宿題・レポート（宿題・レポート・小テストなどは授業の理解に役立った。（無かった場合には記入しなくて良い。））
- ⑩ 文字／量・専門性（板書やスクリーンなどは明瞭だった。（調査や発表形式の場合は、量・専門性に対する要求は適切だった。）
- ⑪ 声／適切な人数（教員の声はよく聞こえた。（輪読やゼミ形式の授業の場合には、受講者の人数は適当であった。）
- ⑫ 熱意（学生に理解させようとする教員の熱意が感じられた。）

【自由記述 B】 授業方法全般について感想・考えた点など、改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。

（C授業態度等について）

- ⑬ 質問（講義中やオフィスアワーで、質問しましたか。）
- ⑭ 出席（予習と復習は毎週どれくらいしましたか。）
- ⑮ 予習と復習（予習と復習は毎週どれくらい

しましたか。レポート作成の時間も含まれます。)

【自由記述C】 その他、受講態度等を含めて感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。

表2-3 アンケート項目に対する回答の評点

設問番号	評点				
	5	4	3	2	1
①～⑤	大いに思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全く相思わない
⑥	大いにあった	だいたいあった	どちらともいえない	あったと思わない	全く無かった
⑦ 授業形式	講義形式	書籍輪読のゼミ形式	論文輪読のゼミ形式	資料調査と内容発表	その他
⑧～⑫	大いに思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全く相思わない
⑬	大いにした	時々した	あまりしなかった	全くしなかった	質問が無かった
⑭	全て出席	1回欠席	2回欠席	3回欠席	4回以上欠席
⑮	3時間より多く	2～3時間	1～2時間	30分～1時間	30分未満

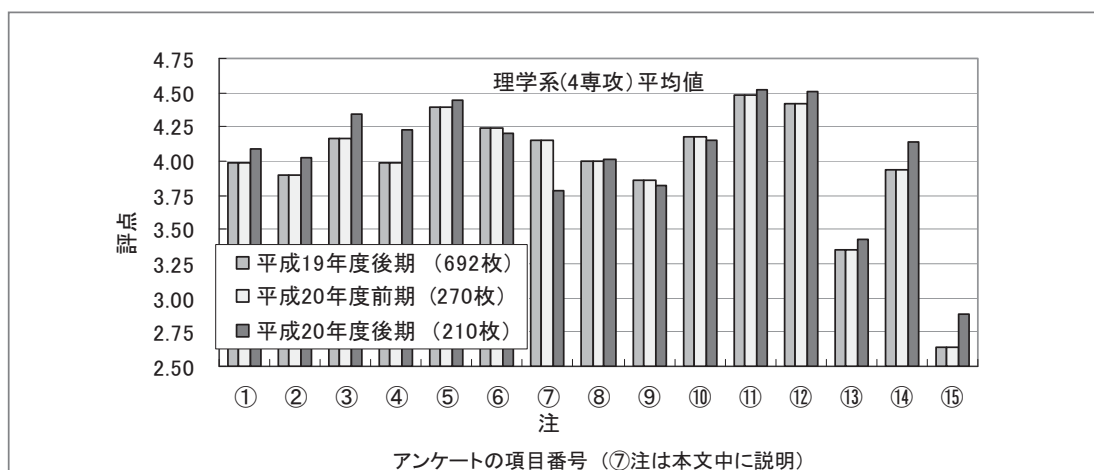


図 3-1 理学系専攻の授業評価アンケート結果の推移 (H19 年度後期—H20 年度後期)

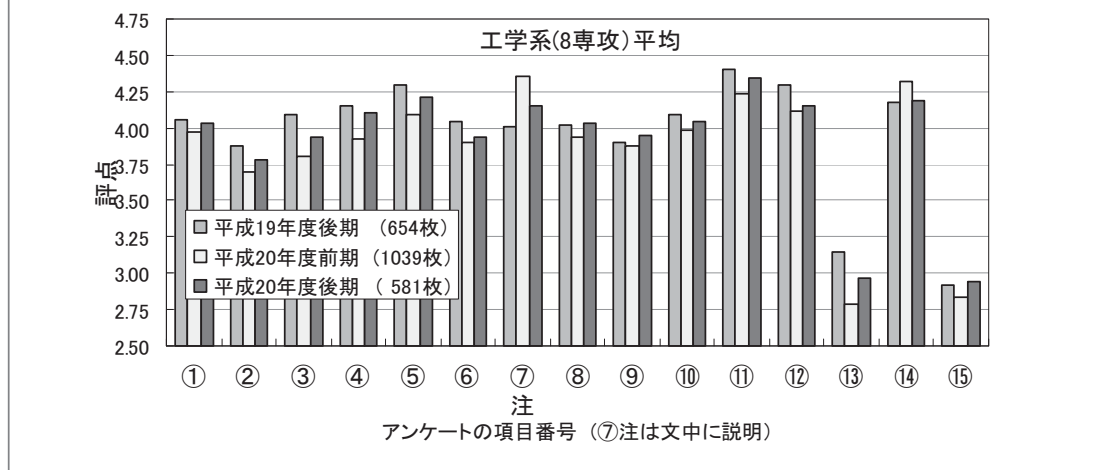


図 3-2 工学系専攻の授業評価アンケート結果の推移 (H19 年度後期—H20 年度後期)

アンケートの設問に対する回答は、表2-3に示すような選択肢にマークし、またABCの枠ごとの自由記述欄に筆記する様式である。選択された回答には、5、4、3、2、1の評点を付して集計を行った。図3-1および図3-2にそれぞれ理学系および工学系専攻の各項目に対する平均値を示す。なお、設問項目⑦は授業の形式を問うもので、評点は授業の評価とは無関係である。また、設問⑭および⑮の評点も、それぞれ対応する回数および時間を表している。

A 授業内容（設問①～⑥）やB 授業方法（設問⑧～⑫）に関する評価は、理学系専攻では概ね3.75～4.5、工学系専攻では概ね3.75～4.3の評点にある。設問③研究に（役立つ）、④仕事に（役立つ）～⑤教養に（役立つ）の間、すなわち授業がどのような視点から役立つと思うかとの間に対

し、理学系工学系とも、また、いずれの年次（期）においても、⑤教養に（役立つ）（授業の内容は自身の教養や学力を高める上で役立つと思う。）と答えた学生が多くなっている。

C 受講態度に関する評価では、設問⑬の質問（講義中やオフィスアワーで、質問しましたか。）が約3.3（理学系）、約2.9（工学系）および設問⑮予習・復習が、約2.75（理学系工学系とも）といずれも低い水準にあることが目立つ。

設問②理解度および設問⑮予習・復習に対する各専攻等の結果を、それぞれ図3-3および図3-4に示した。理解度が高い場合は、予習・復習も多いことが見て取れる。また、前述したように設問⑦は授業形式の（分類）指標の意味であるが、各専攻等の平均値を図3-5に示した。理学系専攻において生命化学専攻および地球環境科学専攻

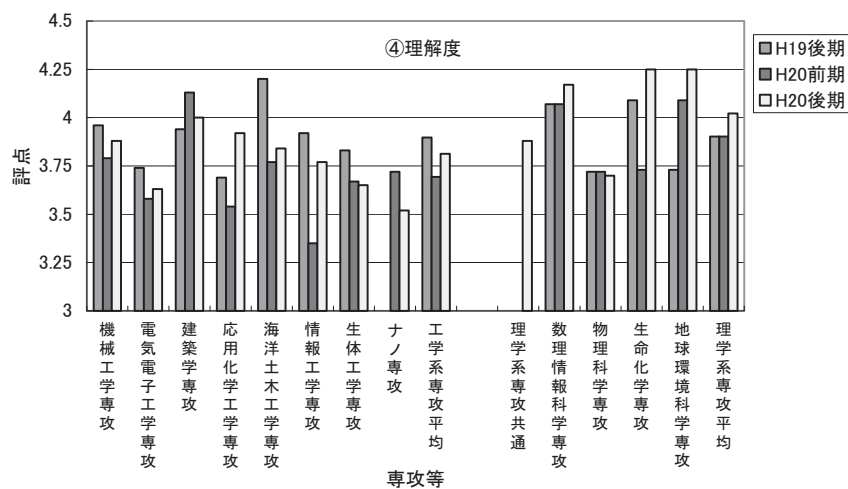


図3-3 専攻等における④理解度 (H19年度後期—H20年度後期)

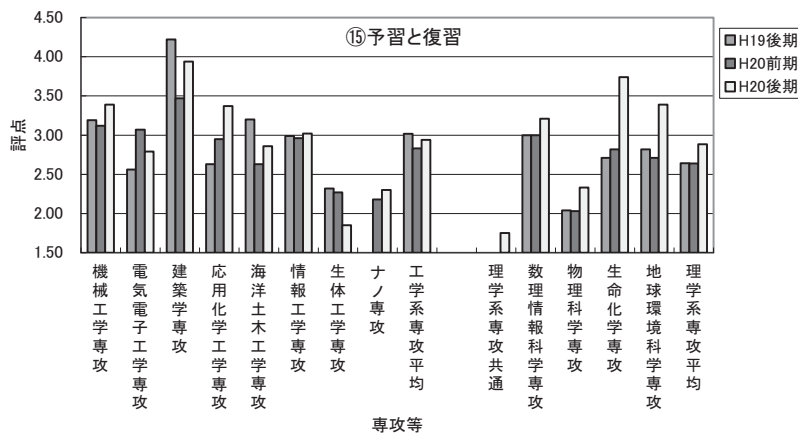


図3-4 専攻等における⑮予習・復習時間 (H19年度後期—H20年度後期)

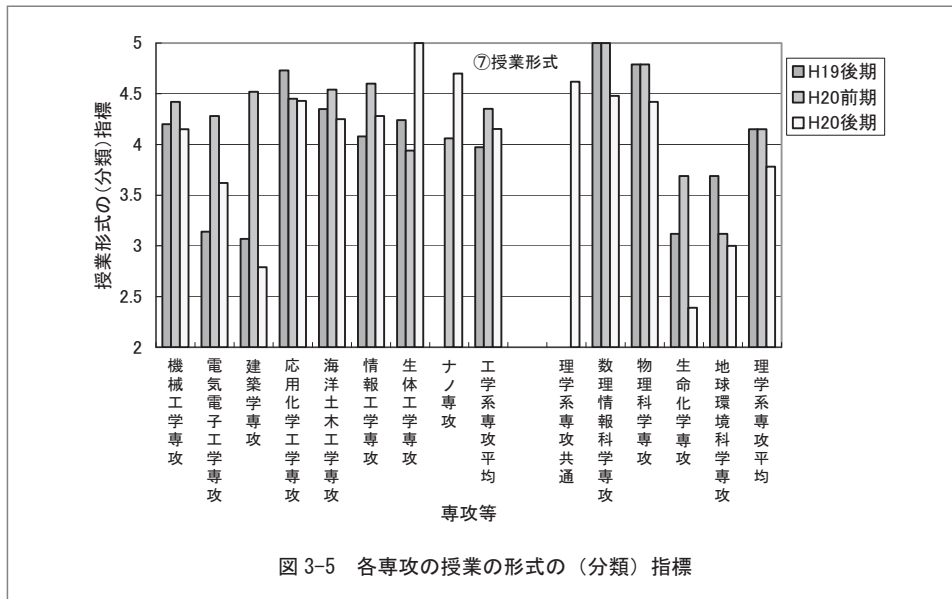


図 3-5 各専攻の授業の形式の（分類）指標

で、論文輪読のゼミ形式や資料調査の内容発表形式が幾分多めであり、数理情報科学専攻や物理科学専攻では講義形式や書籍輪読のゼミ形式の授業が多いことが分かる。工学系では、年次（期）によって授業形式の指標が大きく異なっている。しかし、この設問には教員が形式選択を指示することにもなっているので、あくまで参考指標である。今後、予習・復習の時間や理解度との関連や、コースワーク、受講者人数の大小そして専攻学問分野の教育方針の特徴などの多面的かつ精緻な分析も期待される。

以上、学生による授業評価は概ね良好な結果であるが、さらに修士論文作成のための研究やコースワークによる指導との相乗効果により、修了生の問題解決能力の更なる向上を目指すための次のPDCAへと繋げてゆくことが望まれる。ただし、学生による授業評価アンケートは、学生の生の声の一端にすぎないことも常に銘記すべきである。

4. 今後の活動への期待

理工学研究科は、新時代の大学院教育を視野に入れた改組により、次年度（平成 21 年度）から、新しい理工学研究科がスタートする。同時に部局化により、理学部および工学部に所属して理工学研究科を兼担していた教員は、新しく大学院理工学研究科を専任とし、理学部および工学部を兼担することになる。本報告書のまとめに代えて、また新研究科の発展を願って、今後のFD活動への期待を以下に述べる。

4.1 博士前期課程

大学院教育にあって、ファカルティ・ディベロップメント（FD）は「教員が授業および研究指導等の内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称」とされ、法制度上においても、昨年（平成 19 年）4 月 1 日から施行の大学院設置規準の中で明確に義務化が規定されている。学部教育においても設置規準の改正に義務化が盛り込まれ、本年（平成 20 年）4 月から施行されている。これら以前に、平成 18 年度に成立した教育基本法では、教員は「絶えず研究と修養に励み職務を遂行し」そして「養成と研修の充実が図られなければならないこと」とも規定されている。

ところで、法制度としてFDの義務が規定されたのは何故であろうか。一つには、大学院学生と大学院研究科に重点を置いた大学の増大とともに、各専攻等の学生数がかつての学科に匹敵する規模になったにもかかわらず、組織の共通認識として (A)「どのような学位を出すのか」、そのため (B)「どのような教育プログラム（カリキュラム）を組むのか」、そのため (C)「どのような人材を入学させるのか」の三つの要素が実質上共有されておらず、言葉が適切でないかも知れないが、修了生の質の保証や学位水準までもが個々の教員に委任しすぎていた側面もあったためではなかろうか。

釈迦に説法の引用で恐縮だが、「新時代の大学院教育」（平成 17 年 6 月中央教育審議会、以下「中間報告」と言う。）においても、「従来、多くの理

工農系大学院においては、学生に対する教育と教員の研究活動が渾然一体となって行われ、学生に対する教育が研究室の中で完結するような手法が中心となってきたが、この方法は、個々の教員の指導能力に大きく依拠するため、場合によっては、専門分野のみの閉鎖的な教育にとどまり、産業界等で求められる幅広い基礎知識や社会人として必要な素養が涵養されにくいなどの課題も多く、今後は、個々の教員による指導はもとより、各研究科・専攻における組織としての計画的な教育に力点を置いていくことがより効果的であると考えられる」とソフトな表現の指摘に続いて、「理工農系大学院においては、研究者養成を主たる目的とするのか、高度な研究能力を持って社会に貢献できる人材養成を主たる目的とするのか、おおよそ専攻単位程度で目的と教育内容を明確にすることが必要である。」と強く断言している。

新しい本学理工学研究科の教育プログラムにおいては、各専門分野／幅広い視野／自立した技術者・研究者／学術研究・産業経済活動（国際的に活躍する人材育成／語学教育の充実）を見据えた教育プログラムに加えて、倫理や法規制などの社会科学分野についても適切な教育が柔軟に展開できるよう配慮され、コースワークあるいはコア科目によるカリキュラム編成によって「大学院と学生の量的増大」の中で「学位プログラム等を通じた大学院教育の実質化」が図られることになる。しかしながら、新研究科においても、(1) 各専攻が培ってきた独自の教育・研究指導の実績と伝統がある。(2) コースワーク的あるいはコア科目カリキュラムによる教育プログラムではカバーできないくらい広範な領域が一つの専門分野となっている専攻もある。一方で、養成すべき人材像が比較的尖鋭であり必要な専門的知識・関連領域・自立に必要な能力や技能がコースワークとして比較的抽出しやすい専攻もある。(3) 学生数がかつての学部の学科に匹敵する規模の専攻もある。このような中、まさに多様な大学院教育が展開される。

FDに関しても、教育（授業）・研究指導についての技術論議の前に、教育組織（研究科・各専攻）が、(1) 前述の(A)、(B)、(C)の三つの要素を再確認し、(2) それを教員・学生が共有した上で、(3) 例えば個々の授業評価アンケー

トなどによる教育プログラムの要素チェックをし、(4) 次なる教育改善に向けた行動・計画・実施・検証サイクルの継続的展開が肝要ではなかろうか。

上述の観点に立脚すれば、学生による授業評価アンケートの実施は、前述したように学生の生の声のほんの一端を聞くものであって、授業評価としては、高度な研究能力の養成といった学習目標の設定（教育プログラムにおける・出したい学位における・入学時の学力に対する）に対する目標到達度の客観的評価も加味して、総合的な評価が理想であろう。さらには、修了後の追跡調査も必要である。

本報告書の刊行の時には、一騎当千の教員、優秀な学生、充実した設備と教育プログラムが一体となった理想的な教育が展開（Do）されている。ただし、PDCA サイクルにおいて「充実した設備」のCheckに対してどのようにActionとPlanを行うかは、全教員愁眉の課題である。創意と工夫以外にない。他方、中間報告の提言「大学院教育の組織的展開が有効に機能するためには、体系的な教育課程とそれを支える教員の教育・研究指導能力の向上が重要な課題となる。そのためには、在外研修や外国での研究に参加する機会等を活用しつつ、諸外国の大学院における実際の教育活動に関する知見を広げることも有効である。」に対しては、本学独自の海外研修制度も検討・計画中のことであり、その実行と充実に大きく期待しているところである。

最後に、昨年同様で恐縮だが、平成15年の工学部FD講演会において九州大学深野教授から紹介された「研究で一流であるばかりでなく教育においても一流を目指す」というカリフォルニア大学パークレイ校の例を再掲させていただいて、新理工学研究科博士前期課程の今後の発展を祈念させていただく。目標を高く掲げて、一步一步着実に、新しき年輪を重ねていただきたい。

4.2 博士後期課程

中間報告は、「優れた研究者を養成する観点から、前期・後期の5年間を通じて体系的な教育課程を編成し、その上で、後期過程にあつては、教員の研究活動に参画させるなどの工夫を講じることが必要である。」と指摘し、また、本報告の第

1章で概観したように本学の中期計画にも取り上げているように、「国際性を涵養する観点からは、サマー・インスティテュートや学会などを含め一定期間外国の大学等で教育やトレーニングを受ける機会を提供することが有効である。なお、このような機会は博士前期課程においても有効である。」と提言している。また、外国人学生や社会人学生の割合も多い。

後期課程のFD活動には、これらの提言や状況を踏まえた展開が望まれる。

(文責： 松本)

司法政策研究科FD報告

臨床心理学研究科 FD活動報告

1. 臨床心理学研究科の

Faculty Developmentについて

平成19年度より設置認可された臨床心理学研究科は、臨床心理学分野では日本初の独立研究科としての専門職大学院です。設置認可計画書においては、『XII 教員の資質の維持向上の方策』の中で、1. FD委員会の立ち上げ、2. 客観的で厳格な成績評価制度の導入、3. 学生による授業評価の導入、4. 授業研究・実務研修等を実施し、本研究科専任教員の教授技術の向上や学生の履修意欲の向上に努めることを明記しています。

設置初年度である平成19年度、平成20年度においては、本研究科全体が設置認可計画書遵守のための教育体制を履行することを最優先としてきました。この2年間の完成年度を迎えるにあたってFD委員会は、上記2の厳格な成績評価制度として受講生10名以上の講義・演習科目へのGPA導入、3の学生による授業評価としてWebStudyを活用したシステム構築、そして学長裁定である専任教員による授業公開・授業参観の三本柱を専門職学位課程にふさわしいFD活動として位置づけました。平成19年度に検討したことを踏まえ、平成20年度には上記三本柱のFD活動を実施しながら模索、検討を続けて参りました。FD活動をしていくなかで、大学院系の存在は大きく、学生による授業評価においては学術情報基盤センターのデータを各科目別と全科目一覧とにまとめて全教員へのフィードバック、そして報告書作成依頼と回収を担っていただきました。また、GPAと授業公開・授業参観においても大学院係が取りまとめを行い、FD委員長のチェック後に教授会報告や研究科内・全学への通知を担っていただくなど、大学院係との密なる連携・実働協力なしには研究科独自のFD活動は実施できなかったことは言うまでもありません。

また、FD活動そのものとしては、学生による授業評価は学生の協力なしには不可能ですが、1セメスター3回の実施についてその負担が大きく、学生のみならず毎回の報告書作成義務を課している教員にも負担がかかっていることが明らかになりました。このことを踏まえ来年度に

は、本来の教員の資質維持向上ならびによりよい教育環境作りが実体化できるようなFD活動にしていく必要があることが明確な課題として浮き彫りになりました。こうした課題は、来年度においても拡大FD委員会ならびにFD研修会の場で検討され、本研究科独自のよりよいFD活動の実施体制の整備につながるものと確信しております。

平成20年度の履行状況調査などの評価においても本研究科のFD活動は評価されており、専門職大学院の高度専門職業人養成に特化した教育課程にふさわしいFDのあり方について毎年、とどまることなく精選し、質の高い教育の維持向上につとめて参りたいと考えております。

FD委員長 服巻 豊

2. FD委員会、FD研修会

平成19年度4月よりFD委員会は、委員長；服巻豊、委員；平川忠敏の2人体制で発足し、平成20年度まで2年間の任期を全ういたしました。FD委員会としてFD活動にかかわる重要事項は、拡大FD委員会ならびにFD研修会のなかで検討し、教授会で承認を得る手続きを2年間通じて行いました。そうすることで専任教員全員がFD活動に関心を持ち、FD活動の必要性、周知の徹底が可能となりました。

また、平成20年度は平成19年度に十分検討し、学生による授業評価、GPA本格導入および授業公開・授業参観という三本柱の通年運用を基本とし、検討事項以外においては教員ならびに学生向けのFD通信をFD委員会において作成し、各イベント毎にFD活動が周知されるようにした。平成20年度のFD委員会としての重要案件は、受講生10名以上の講義・演習科目へのGPAの本格導入と学生へのフィードバックならびに学生による授業評価システムの安定化と恒常的運用でありました。

3. 厳格な成績評価制度について（平成20年度GPA本格導入）

(1) 平成20年度の取り組み

- 1) 成績評価方法についての開示について(表1)
- ・入学生オリエンテーション時に、講義、演習、実習について成績評価方法の資料を配布し、教務委員長ならびに実習担当教員より説明を行う。

- ・受講生10名以上の講義、演習科目においてはGPA評価対象科目であり、成績評価に一定の枠（A以上の評価を40%以内の学生にする枠）を設けることの解説を行う。

表1. 講義、演習科目の評価基準

	評価	評価得点	
合格	A+	90点以上	特に優れた成績を示した者
	A	80～89点	優れた成績を示した者
	B	70～79点	合格と十分認められる者
	C	60～69点	合格と認められる最低限度の成績を示した者
不合格	F	60点未満	

(2) 平成20年度の実績

- 1) 前期履修行動ならびに成績分布について(表2のみ代表事例として添付)

- (a) 1年GPA対象科目：5科目（受講生15～28名）；必修4科目、選択1科目
 - (b) 2年GPA対象科目：4科目（受講生13～28名）；必修2科目、選択2科目
 - (c) GPA非対象科目：2科目（受講生2、15名）
- ・教務・FD合同の検討ならびに教務・FD合同拡大委員会において、2年生必修科目「総合的事例研究Ⅰ」は、GPA対象科目外となった。

- (a) 1年GPA対象科目：11科目（受講生10～15名）；必修4科目、選択1科目
 - (b) 2年GPA対象科目：7科目（受講生10～15名）；必修2科目、選択2科目
 - (c) GPA非対象科目：2科目（受講生2、15名）
- ・教務・FD合同の検討ならびに教務・FD合同拡大委員会において、2年生必修科目「総合的事例研究Ⅱ」は、GPA対象科目外となった。

- 3) 前期・後期履修行動（受講生分布）について(表6、7)

- (a) 実習科目についての評価はA、B、C、Dの4段階評価とする。

- 2) 後期履修行動ならびに成績分布について

表2. 修士1年前期、科目別成績分布表【講義・演習科目（受講者10名以上）】

素点	評語	臨床心理学原論		臨床心理査定演習Ⅰ		臨床心理面接演習Ⅰ		臨床心理地域援助事例研究演習Ⅰ		医療心理臨床論	
		人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)
90-	A+	1	6.7%	0	0.0%	3	20.0%	1	6.7%	4	26.7%
80-89	A	5	33.3%	6	40.0%	3	20.0%	4	26.7%	3	20.0%
70-79	B	9	60.0%	7	46.7%	9	60.0%	10	66.7%	8	53.3%
60-69	C	0	0.0%	2	13.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
-59	F	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
合計		15		15		15		15		15	

【考察】

平成20年度は前期よりGPA本格導入とし、厳正な成績評価として大学院にはあまりなじみのない成績枠を設け、専任教員をはじめ、兼担、兼任の教員にも厳正な成績評価のための協力を求めた。

その結果、受講生10名以上の講義・演習科目においては、各科目担当教員の成績評価枠やGPAに対する理解が高く、すべての科目において成績評価枠の遵守がなされていた。また、A評価以上の成績評価については、割り切れる受講生数でない場合は、小数点以下を切り上げて対応した教員が多く、FD委員会としてもそれを了承し、拡大FD委員会、教授会で承認された。

GPAは、指導教員が指導学生の履修や学習指導の参考資料として用いることを主な目的としている。平成20年度においては、修士2年生の奨学金免除申請の成績順位付けの参考資料としても活用された。

4. 学生による授業評価の実施

(1) WebStudyを活用した授業評価のシステム構築

平成19年度において学術情報基盤センターの青木助教との連携のもと、WebStudyのシステム運用により安定したシステムの構築に成功した。

平成20年度においては安定したシステムの運用をベースに、1セメスター3回の実施を行った。なお、前期には評価対象としていたが、学外実習実施時期が学生により異なるため、「臨床心理地域援助実習科目は、その科目特殊性を考慮し、第2回の学生による授業評価より1セメスター終了後の1回のみの実施と変更した。

1) 実施要領

平成20年度の実施にあたっては、スムーズな運用を目指し、周知徹底にはFD通信（学生用、教員用）を作成し、学生には自ら通信によって実施時期を確認し、指導教員からも学生へ授業評価への協力依頼をしてもらう体制を整えた。

<対象科目>：専任教員の全授業科目

1セメスター3回実施科目：

講義、演習、学内実習科目

1セメスター1回実施科目：学外実習科目

<前期実施期間>：

第1回：5月20～27日（5コマ目ごろ）

第2回：6月24～7月1日（10コマ目ごろ）

第3回：7月22～29日（14コマ目ごろ）

<後期実施期間>：

第1回：11月4～12日（5コマ目ごろ）

第2回：12月16～24日（10コマ目ごろ）

第3回：2月3日以降を予定

（全講義終了後、かつ学外実習報告会后）

<実施方法>：学生がWebStudyにアクセスし、受講科目についての授業評価を実施する。

(2) 平成20年度学生による授業評価実施について

前期、後期ともに1セメスター3回の学生による授業評価について安定したシステムを用いて実施した。パソコン画面上の文字が小さいなどの不備はみられたものの、安定したシステムとして運用実施が可能であった。

1) 前期・後期にわたる学生による授業評価の実施結果については、以下の代表事例として前期3回実施結果について表3～5に示した。

各学部のFD活動報告

表3. 前期第1～3回目の講義科目における授業評価（3科目平均評価点）

	第1回目			第2回目			第3回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5	3.3	4.3	5	2.7	4	4.7	3	4.1
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか (テキスト・資料等を使用した場合のみ回答 してください)	5	3.3	4.3	5	2.7	4.1	4.7	2.7	4
3. 授業の内容は理解できましたか	5	3	4.2	4.7	3	4.1	4.3	3	3.9
4. 授業の内容に満足していますか	5	3.3	4.3	5	2.7	4.1	4.7	3	4.1
5. 授業を通して臨床心理学の理論に興味が増 しましたか	5	3	4.1	5	2.3	4	5	3.7	4.5
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5	4	4.5	5	2	4	4.7	3	4.1

表4. 前期第1～3回目の演習科目における授業評価（7科目平均評価点）

	第1回目			第2回目			第3回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5	1.7	4	5	2.9	4.1	5	2.6	4.1
2. 授業の内容は理解できましたか	5	1.9	3.8	5	2.4	4	5	2.6	4.1
3. 授業の内容に満足していますか	5	1.7	3.9	5	2.4	4	5	2.1	4.1
4. 授業を通して臨床心理学に興味が増しまし たか	5	1.7	4.1	5	2.7	4.2	5	2.6	4.1
5. 授業を通して講義（理論）の理解や実習体 験の理解につながりましたか	5	2.1	4.1	5	2.7	4.2	5	2.6	4.2
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5	2	4.2	5	2.7	4.2	5	2.4	4.2

表5. 前期第1～3回目の学内実習科目における授業評価（2科目平均）

	第1回目			第2回目			第3回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に5段階で評価してください	5	3.5	4.4	5	2	4.2	5	2.5	4.3
2. 学内（学外）実習での体験に満足していま すか	5	3.5	4.4	5	2	4.3	5	2	4.2
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務に イメージが増しましたか	5	3.5	4.5	5	2.5	4.4	5	2	4.4
4. 実習体験の中で講義や実習で学んだことが 役に立ちましたか	5	3	4.2	5	2	4.2	5	2.5	4.3
5. あなたは実習を熱心に取り組みましたか	5	3.5	4.6	5	2.5	4.4	5	2	4.5

5. 授業公開・授業参観

平成20年度（2008年度）全学的な取り組みを踏襲し、本研究科においても専門職学位課程として守秘義務を要する特殊な授業なども含めて考慮し、以下のような実施要領にて執り行うこととした。以下の実施要領に従い7科目6教員が授業公開を行った。

(1) 2008年度教員の授業公開・授業参観の実施要領

1) 全学的な動きに合わせて6月、12月に授業

公開・授業参観を実施する。

- 2) 授業公開科目は、全科目が対象とする。専任教員は、全学公開可能科目と研究科内公開科目とにわけて実施日をFD委員へ届ける。
- 3) 授業参観については、研究科内、他部局の授業公開科目を原則参観するものとする。
- 4) コラボレート科目の担当教員は、公開のみ可能とする。
- 5) 実施時期である6月、12月においてFD委員長より授業公開調査を書式に基づき実施す

る。

- 6) 授業公開を希望する科目担当教員は、あらかじめ大学院係（FD委員へも）報告し、授業公開については受講生の了解を得ておくこととする。
- 7) FD委員会は、大学院係を通じて授業公開一覧表を作成し、研究科内ならびに全学へと通知する（教育センターへの報告も兼ねる）。
- 8) 授業公開・授業参観を行った教員は、所定の報告書（書式あり；資料）を作成し、FD委員に提出する。
- 9) 大学院係は、提出された報告書を保管管理し、研究科教員の求めに応じて閲覧ができるようにしておく。

6. 平成21年度FD活動計画

本計画は、2009年3月18日の第12回研究科教授会にて承認され、第2回拡大FD委員会にて詳細が検討され、認められたものである。

1. 2009年度学生による授業評価について

＜実施体制＞WEBSTUDYを活用したシステムでの実施の継続

(1) 実施回数、時期案；1セメスター2回実施

- ・学外実習科目については、セメスター終了後とする（昨年度確認事項）

(新年度検討事項)

- ・2回のおおよその実施時期は、7～10コマ目と授業・試験終了後とする。

(2) WebStudyについて

(新年度検討事項)

- ・質問項目；項目内容は、科目の特性に合わせるかを検討（エスノ、司法・矯正等）
- ・学生よりアクセスや画面の見にくさが指摘されているが、院生室パソコン上の問題の可能性大とのこと。院生パソコン係と要対応。
- ・学術情報基盤センターの青木助教が移動。新担当者との打ち合わせ必要。

(3) 授業評価の対象；専任教員、兼担・兼任の取扱いについて

（平成20年度第1回拡大FD委員会確認事項）

- ・結果のフィードバックは、個別科目のみと

する（通知方法は専任と同様）。

- ・結果の公開は、専任教員に対して評価実施科目一覧を公開する。

(新年度検討事項)

- ・集中講義等、非常勤講師科目の実施時期

(4) 教務関連：3月中に、兼担・兼任への協力依頼と実施方法の連絡を実施

2. 2009年度GPA導入について

(1) 2009年度GPA（前期・後期・通年）の評価を実施

- ・昨年度合意事項：「総合的事例研究演習Ⅰ・Ⅱ」はGPA対象外科目とする。
- ・A以上（A+含む）は、40%とあるが、受講生数で割り切れない場合は、40%を超えることも認めることとする（例；14名の受講生A以上6名（42.8%））。

(新年度検討事項)

- ・厳正なる授業評価による学生のモチベーションを下げないための取り組みの検討

(2) 学生への成績通知について

- ①対象科目数とGPAのみを学生個人に通知（通知文書は大学院係作成）
- ②各学生へのGPA成績評価通知は、教務委員長・副委員長により行う。

3. 2009年度教員の授業公開・授業参観の実施要領

(1) 実施時期

- ・全学的な動きに合わせて6月、12月に授業公開・授業参観を実施する。

(2) 実施科目

- ・授業公開科目は、全科目対象とする。
- ・コラボレート科目の担当教員は、公開のみ可能とする。

(3) 実施手順

- ・授業参観については、研究科内、他部局の授業公開科目を原則参観するものとする。
- ・FD委員長は、全教員に対して実施時期前に授業公開実施調査を行う。
- ・専任教員は、全学公開可能科目と研究科内公開科目とにわけて実施日をFD委員・大学院係へ届ける。
- ・授業公開をする教員は、あらかじめ公開することを受講生に伝え、了解を取ること。

各学部のFD活動報告

- ・大学院係は、授業公開科目一覧を作成し、全教員ならびに全学に一覧表公開する。
- ・授業参観を希望する教員は、授業公開の教員に事前に申し入れをしておく。
- ・授業公開・授業参観の報告書（書式あり）を大学院係（FD委員）に提出する。

以上

連合農学研究科 FD活動報告

【平成20年度FD活動内容】

大学院連合農学研究科では、平成20年度にあつてはFD委員会を3回開催し、昨年度に引き続き下記項目に重点を置き、活動を行った。

1. 共通セミナーの改善
2. 共通セミナー（特別）授業評価調査の実施
3. TA活動実施報告書によるTA活動実態把握

◆共通セミナーの改善及び共通セミナー（特別）の授業評価調査の実施

本研究科では、単位制を採用しておらず、3年以上在籍し必要な研究指導を受けること、共通セミナー（一般、特別）をそれぞれ30時間受講すること、学位論文の主論文として査読付き学術雑誌に2報投稿することを、学位論文の提出要件としている。

研究指導については、博士後期課程であり極めて専門性が高く共通的なFDに該当しにくいことから、学部・研究科の授業に相当する共通セミナーの改善が、FD活動の第一の取り組みとなると考える。

このうち共通セミナー（一般）は、全学生を対象として、個人の専門に偏らない幅広い農林水産学分野の知識の習得を目的としており、当初より出席者を対象に実施したアンケートの結果を参考に、授業内容等の改善に取り組んできている。

平成20年度については、平成19年度に引き続き、以下の6項目を実施の際の努力目標に掲げたが、当番大学の琉球大学が交通の利便性等を考慮して那覇市の「沖縄県男女共同参画センター『ていある』」を会場としたことから、会場の閉館時間や地理的な関係（琉球大学と会場との距離がかなり離れている）から④と⑥は実現できなかった。

- ① 講義資料及びスライドの日英併記
- ② 英語による講義の増加
- ③ 外部講師の増加
- ④ 交流時間の延長
- ⑤ 1年生によるプレゼンテーションの実施
- ⑥ ポスターセッションの修士課程・学部学生

への開放

上記②に関し、共通セミナー（一般）においては、例年在学生の4割強を占める外国人学生から、セミナーの使用言語を英語としてほしい旨の強い要望があったため、19年度にあつては6セミナー中5セミナーについて英語で行い、20年度は6セミナーすべてが英語で行われ、外国人学生には非常に好評であった。日本人学生にとっては、専門性の異なるセミナーの内容の理解に苦勞した反面、新鮮な刺激となり、今後、研究者として活動していくにあたり、語学力の重要性を再認識する良い機会となった。

なお、共通セミナー（一般）参加学生から徴したアンケートの集計結果は次表のとおりであり、比較対象として平成19年度のアンケート結果も再掲した。

また、共通セミナー（特別）は、当該年度に主指導教員として学生を担当している教員がそれぞれ16時間の集中講義として開講しており、授業評価調査等のアンケートについては平成18年度のセミナー時から実施し、その結果について分析し、分析結果に対する対応等について教員からの回答を集め、セミナー担当教員に周知・フィードバックする形を取っている。

本研究科は学生が主体的に研究に取り組む意識をもって入学してきている後期博士課程であるためか、共通セミナー（特別）授業評価調査結果は、どの項目もかなり高い評価となっている。

また過去3年間の共通セミナー（特別）授業評価調査結果は別紙のとおりであるが、調査実施3年目の平成20年度は、すべての項目において「そう思う」の回答率が最も高い結果となった。

なお、それぞれの年度の受講者数、アンケート回答数並びに回答率は下記のとおりであった。

【平成18年度】 受講者数：320名 アンケート回答数：227名 回収率：70.9%

【平成19年度】 受講者数：253名 アンケート回答数：211名 回収率：83.4%

【平成20年度】 受講者数：258名 アンケート

各学部のFD活動報告

平成19年度共通セミナー（一般）アンケート調査結果（受講者：78名）

セミナーについて						
〔回答項目〕	セミナー A	セミナー B	セミナー C	セミナー D	セミナー E	セミナー F
ほぼ理解できた	21名 (27%)	36名 (46%)	28名 (36%)	22名 (28%)	51名 (65%)	65名 (83%)
半分程度	44名 (56%)	35名 (45%)	43名 (55%)	48名 (62%)	26名 (33%)	4名 (5%)
理解できなかった	13名 (17%)	7名 (9%)	7名 (9%)	8名 (10%)	1名 (1%)	9名 (12%)
企画・運営について						
〔回答項目〕	時期	日数	会場	グループの分け方		
良い	65名 (83%)	68名 (87%)	68名 (87%)	良い	56名 (72%)	
悪い	4名 (5%)	3名 (4%)	3名 (4%)	改善すべき	19名 (24%)	
その他	9名 (12%)	7名 (9%)	7名 (9%)	無回答	3名 (4%)	
〔回答項目〕	プレゼンテーション		ポスターセッション		交流会について	
意義がある	30名 (38%)		56名 (72%)		57名 (73%)	
少しは意義がある	34名 (44%)		16名 (21%)		14名 (18%)	
その他	12名 (15%)		5名 (6%)		6名 (8%)	
無回答	2名 (3%)		1名 (1%)		1名 (1%)	

平成20年度共通セミナー（一般）アンケート調査結果（受講者：68名）

セミナーの理解度について						
〔回答項目〕	セミナー A	セミナー B	セミナー C	セミナー D	セミナー E	セミナー F
ほぼ理解できた	39名 (57%)	24名 (35%)	33名 (49%)	18名 (27%)	31名 (46%)	39名 (57%)
半分程度理解できた	26名 (38%)	33名 (49%)	31名 (46%)	41名 (60%)	32名 (47%)	23名 (34%)
理解できなかった	2名 (3%)	10名 (15%)	3名 (4%)	7名 (10%)	3名 (4%)	2名 (3%)
無回答	1名 (2%)	1名 (1%)	1名 (1%)	2名 (3%)	2名 (3%)	3名 (6%)
セミナーの企画・運営等について						
〔回答項目〕	時期について	日数について	会場について	グループの分け方（専攻別）について		
良い	60名 (88%)	50名 (74%)	53名 (78%)	良い	55名 (81%)	
悪い	4名 (6%)	6名 (9%)	10名 (15%)	改善すべき	10名 (15%)	
その他	3名 (4%)	10名 (14%)	4名 (6%)	無回答	3名 (4%)	
無回答	1名 (2%)	2名 (3%)	1名 (1%)			
〔回答項目〕	プレゼンテーションについて		ポスターセッションについて		交流会について	
意義がある	42名 (62%)		46名 (68%)		32名 (47%)	
少しは意義がある	20名 (29%)		12名 (18%)		18名 (27%)	
その他	2名 (7%)		5名 (7%)		10名 (15%)	
無回答	2名 (7%)		5名 (7%)		8名 (11%)	

回答数：216名 回収率：83.7%

回答数：216名 回収率：83.7%

◆TA活動実施報告書によるTA活動実態把握

ティーチング・アシスタント（TA）は、大学院学生の処遇の改善とともに、指導者としてのトレーニングの機会提供を目的としているが、平成17年度まではTAに採用された学生の意見を聞く機会は設けていなかったため、平成18年度からTA業務に従事する連大生を対象に、アンケート形式の「TA活動実施報告書」を提出してもらい、TA活動の実態把握に努めている。その結果、実施報告書を提出した学生の9割以上から指導者としてのトレーニングとして有益であったとの回答を得ることができた。具体的には、1) 学生個々の個性及び理解度に応じた指導、2) コミュニケーション能力、3) 授業・実験の事前準備や安全管理指導、4) 時間・スケジュール管理、等の重要性を学んだとの回答があった。TA活動を学生にとってより実りのあるものとするため、平成19年度からはTAの指導を受けた学生からのTA活動評価調査を実施することとし、平成20年度も実施した。この結果をとりまとめ、平成20年度にTAに採用された学生及び平成21年度にTAに採用される学生に配付する予定である。

【まとめ】

本研究科のFD活動については、平成18年度まで規則及び委員会は整備されていなかったが、自己点検・評価委員会、共通セミナー（一般）の実施、あるいは各構成大学大学院研究科独自で実施されてきた。

平成18年度末から平成19年度にかけて、FDに関する規則や委員会の整備に伴い、PDCAサイクルを効果的に機能させ、教育研究のより一層の充実に向けた体制が整ったといえる。本研究科では、平成17年度より学生を対象とした講演会を各構成大学で実施しているが、平成21年度には本講演会受講者を対象としたアンケート結果を分析するなどして、内容の充実も検討していきたい。

また、本研究科は、在学生の4割以上が外国人留学生という特徴的な構成となっているため、例年行っている共通セミナー（一般）のアンケートのほか、どのようなアンケートを実施しても、外国人留学生からは何にも優先してまず「英語の使

用」の要望が多い。個々の研究指導においては指導教員が直接対応するため問題は生じていないが、全学生を対象とする共通セミナーや講演会等においては、英語のみであれば半数以上を占める日本人学生の理解の障害となるし、両言語の併用となれば、資料は支障なく準備できても、同じ時間内であれば講義・講演に盛り込む内容に限界が生じる。

また、本研究科は博士後期課程であることから、個々の学生の研究内容の専門性が極めて高い。共通セミナー（一般）は、将来研究者として活動するにあたり、広い視野・幅広い農林水産学の知識を養うため全ての学生に必修で課しているものであるが、全ての学生に対して理解しやすいようにすれば物足りなく、かといって博士後期課程にふさわしい専門性の高い内容にすれば、言語の問題もあいまって理解できる学生の割合が下がることとなる。

この、言語と専門性については、全学生を対象としたセミナーや講演会等において必然的に内在する問題である。留学生からは同時通訳の設置などの要望もあるが、経済的問題を別にして専門性の高さから利用は極めて難しく、解決困難となっている。

(別紙)

共通セミナー（特別）に係る授業評価調査結果（18・19・20年度の比較一覧表）

設問No.	質問内容	年度	そう思う	どちらかという とそう思う	どちらかという とそう思わない	そう思わない	わからない
設問 1	セミナーはシラバスに沿った内容でしたか？	18年度	79.10%	20.10%	0.40%	0.40%	0%
		19年度	79.50%	17.60%	0.50%	0%	2.40%
		20年度	88.40%	9.30%	0.90%	0%	1.40%
設問 2	配付資料は適切でしたか？	18年度	81.40%	13.70%	0.40%	2.70%	1.80%
		19年度	74.20%	17.20%	1.40%	0.50%	6.70%
		20年度	81.50%	13.80%	1.90%	1.90%	0.90%
設問 3	セミナーの内容に興味を持ってましたか？	18年度	78.90%	20.30%	0.40%	0.40%	0%
		19年度	78.70%	19.40%	0.90%	0.50%	0.50%
		20年度	86.10%	11.10%	2.30%	0.50%	0%
設問 4	セミナーの進め方は適正でしたか？	18年度	74.00%	24.20%	1.80%	0%	0%
		19年度	79.10%	19.00%	1.40%	0%	0.50%
		20年度	84.70%	14.30%	0.50%	0.50%	0%
設問 5	教員の話は理解できましたか？	18年度	61.20%	33.10%	5.30%	0.40%	0%
		19年度	62.60%	31.20%	5.70%	0.50%	0%
		20年度	71.00%	25.70%	2.80%	0.50%	0%
設問 6	セミナーを受講して知力・学力の向上に役立ちましたか？	18年度	72.20%	25.20%	2.60%	0%	0%
		19年度	70.60%	25.10%	4.30%	0%	0%
		20年度	80.50%	16.20%	2.80%	0.50%	0%
設問 7	教員の準備は十分であり、セミナーに対する熱意が感じられましたか？	18年度	83.70%	15.40%	0%	0%	0.90%
		19年度	83.40%	15.70%	0.90%	0%	0%
		20年度	87.90%	11.10%	0.50%	0%	0.50%
設問 8	セミナーは総合的に見て満足できるものでしたか？	18年度	73.90%	23.50%	2.20%	0.40%	0%
		19年度	70.10%	28.00%	1.90%	0%	0%
		20年度	86.10%	12.50%	1.40%	0%	0%